
銀星スターライト

藤咲一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀星スターライト

【Nコード】

N8905H

【作者名】

藤咲一

【あらすじ】

ある日、いつもと変わらない生活を送っていた高校生、北内恭介きたうちきょうすけは、夜空を彩る流星群を見た。その内一つが裏山に落ち、光の柱スターライトを作り出す。その姿に好奇心を駆り立てられた恭介は、着の身着のまま、その場所へとひた走った。その先で待ち受けていた未知との遭遇。そして、接触。追い詰められた恭介が選んだ心の叫びとは……私的王道SF。楽しんでもらえたら良いなあ。です。この作品は、空想科学祭2009に参加しています

プロローグ 流星の輝き

月明かりの下。空を流れる天の川の下。なぎ倒されて焼け焦げ、炎を灯す木々の中心。金色と白銀こんじきしろがねの二人がその力を爆発させていた。闇に映える白銀を纏うは、一人の女性。右腕を中心とした滑らかな銀を纏い、長い赤毛を振り乱す。力強くもしなやかな両脚で、大地を蹴り上げ宙を舞う。

対する金色。地球上では存在しない異形のモノを中心に纏わりつく触手。それはミミズの様で、蛇の様で、無数に蠢いていた。気色の悪い動き。そこから繰り出される鞭の様な横薙ぎの攻撃が銀腕の女性に襲いかかる。

「まったく、きりがいいわね」

そう独り言つ女性。それは誰かに同意を求める様でもある。

『打ち碎け瑞穂。今はそれが最善だ』

否、同意を求めているのだ。彼女の脳裏に響く声。その声の主に彼女は言葉を送ったのだ。瑞穂と呼ばれた女性は、右拳を握り締め、しなる触手に叩きつけた。

力が弾ける。

触れ合う金と銀。拮抗したその力の中で、上をいったのは銀の拳。金の触手を打ち碎く。感性の法則で宙を舞う金が力を失い、己の屈折率を銀色へと変えた。だが、襲い来る触手は一つではない。

空中に舞う彼女を狙い、下方からその打撃が来た。

『下だ』

瑞穂の脳裏に警鐘が鳴る。それを目視するよりも早く、彼女は迎撃態勢を取った。すばめた体。そこから繰り出す渾身の蹴り。

交錯した力。

一瞬、時間が止まった様な錯覚。

等しい力が、相殺される。いや、互いの体を砕いた。激痛が接触部位から翔け抜ける。

「いったいわねえ」

苦悶の表情を浮かべた瑞穂に、脳内の声が届く。

『修復完了』

瞬間、傷が癒える。痛みが消えた。そして、空中からの着地。五体満足に見据えた相手。金色の繭は攻撃の手を緩めない。

「久々に、リミッター外すわよ」

『了解』

二人の言葉が弾ける。瞬間、空間がぶれた。

刹那、触手が彼女めがけて叩きつけられる。しなやかな攻撃が、剥き出しの地面を裂く。だが、そこに彼女の姿はない。見失った。触手が止まる。そして、弾けた。

「まず一つ」

声だけが聞こえる。この戦場には彼女の姿はない。いや、確かに存在した。ただ肉眼で追えないだけ、常人を遥かに超越した速度の世界で、瑞穂は駆け廻った。時折激しく舞い上がる土煙。それが、彼女を捉える参考事項だ。

「二つ、三つ」

声に合わせて弾ける触手。完全に彼女のペースだ。このままいけば決着は近い。だが……視界の外で、人影が揺らいた。

彼女にとって、それは不運。相手にとって、それは好機。

金色の繭の主が、彼女以外の人間を認める。それは未だ成長を始めたばかりの少女。幼い顔立ちに黒髪、黄色のリボンが印象的な少女だ。どうして、その子がここにいるのかはわからない。だが、これは何かに使えるはずだ。

一つの触手が少女を捉え、一気に自分へ引き寄せる。それは素早い動きだった。少女が声を上げる暇すらない。何が起こったのか認識し、悲鳴を上げた時には、瑞穂の銀腕に抱かれた状態だった。

「大丈夫？」

優しい声。この声は聞いた事がある。そう思った少女。だが、顔はこちらを向いていない。いったいどこを見ているのだろうと目線

を追えば、そこに見える異形の物体。象の様に長い鼻。燃える様な赤い瞳、猿の様な赤茶の体毛。見た事が無い。裂けた皮膚から流れ出る緑の体液が、この惑星の物と明らかに一線を隔している。さらにそれを包み込む様に蠢く金色の触手。それが幾重にも纏わりついて、まるで毬の様。

そうやって幼女が相手を見つめる間にも、触手の攻撃は止まない。思惑通り姿を見せた相手に、緩める道理はない。

今度は二本同時だ。それを見据え奥歯を噛みならす瑞穂。両手は塞がっている。高速移動も幼女を抱えては無理だ。しかし……

「甘く見るんじゃないわよ」

瞬間、右腕の銀色が蠢いた。軸足を残し、振り上げられる銀色の足。それはまるで独立した生き物の様で、しなやかに動く。

金属音が無数に響いた。その度にその場から弾き飛ばされる触手。しかし、何度も何度も迫り来る。相手の勢いに押され始め、軸足が徐々に後退し始めた。

その長さが擦れる音と共に長くなる。焦りが、瑞穂の顔に現れた。

『このままでは、やられる。その子を捨てる』

合理的な考えが脳裏に響く。確かにそうすれば相手を倒す事も出来るだろう。しかし……

「いやよ。私は決めたの。昔も今もそれは変わらない。貴方の力は何のため？ 私のためでしょう。だったら、私の心を吸いなさい。更なる力を私にちょうだい」

瑞穂の叫び。それはすでにやっている。そう答えるべきだったのか、そうでないのか。それにすぐには答えられない。個人的な沈黙。だが、時間の猶予はさほどない。

『ならば、一度離れる。痛みを伴うが構わないな』

「覚悟の上よ」

心は決まった。その空気を感じ取ったのか、幼女の小さな手が、瑞穂の被服をありつた力の力で掴む。

その時繰り出された触手の横薙ぎ。それを瑞穂は背中で受けた。

走る激痛。弾き飛ばされるきゃしゃな体。一瞬意識が飛びそうになるのを何とかこらえ、叩きつけられる先を見据えた。なぎ倒されていない木々に突っ込む。その中を水平に飛ぶ瑞穂。彼女の先に待ち受けるのは、樹齢数百年の大木だ。

必死に少女を抱え込む。背中で大木と向き合った。

衝突。だが、衝撃はない。

光に包まれながら、瑞穂が重力に引かれ横たわる。下半身の自由が利かない。どうやら先の攻撃で背骨をやられた様だ。しかし、少女は無事。それに瑞穂は笑顔を見せる。

「ここに隠れていて」

それに黙って頷く少女。

「良い子ね」

そつと少女の頭を撫でた銀腕が、作戦を告げる。

『天より降り注ぐ、最大の一撃を見舞う』

その言葉が脳内に響く。背骨の修復は既に完了していた。戻る感覚を確かめ、瑞穂は立つ。息を深く吸い、そして吐く。感じる鼓動。体の中の感覚を研ぎ澄ます。練り上げて来た丹田。そこに蓄えた力を心の内から解放する。見開いた瞳が、烈火の炎を吹き上げた。

「限界まで、とばすわよ」

再び空間がぶれた。突き出した拳が生み出す衝撃波を纏い、瑞穂は目指す。最強の敵、金色の魔物を。

舞い降りた惑星^{ほし}。そこで出会った生命体。それは同じ力を手にした存在だった。心に蠢く破壊衝動。それをぶつけてもなお壊れない。強固な存在。闘争本能が彼の赤い瞳にたゆたう。

会心の一撃だった。だが、それで終わるはずもない。赤い瞳が見据える先。この惑星^{ほし}の植物が群生する影。つまり、森が弾けた。がさつく口角が、やはりと吊り上がる。

迫り来る爆発の中心。タイミングを見計らい、ありったけの触手で迎撃を振り下ろす。

最大級の重量が叩きつけられ地面が揺れる。だが、手応えがない。

「流星……」

声が聞こえた。その意味はわからない。しかし、相手が発した声だとわかる。傲慢だった。侮っていた。相手は今まで全力ではなかったのだ。反射的に見上げた夜空。そこで星に照らされた赤毛が揺れる。引き絞られた右腕。それが、最大の一撃だ。

「スターライトオー！」

力ある言葉と共に打ちつけられた一撃。その拳は、全てを打ちのめす。

途切れた彼の意識。

見せた決着。

小さな油断。

大きな後悔。

噴き咲く赤い花弁。

濡れる金色。

染まる白銀。

それが全ての終焉だった。

否、この物語の始まりなのだ。

1 星が見えない

この世界に存在する全ての現象は、全て科学的に証明することができる。過去、神の御業として語り継がれていた地震、雷、火山の噴火、蜃気楼なども全て、現在においては科学的根拠を用い証明されている。幽霊や妖怪、魔法等の類も、本当にこの世界に存在する現象であるならば、現在証明されていなくとも必ず証明できるはずだ。

科学とはファンタジーを蝕む害悪だと、偏見を向ける者もいるだろうが、それは間違いなのだ。なぜならば、ファンタジーの中で繰り広げられるような現象が、現実世界で再現できるのであれば、科学こそが本物の魔法になる。

未知なる力。未知なる現象。それらを携えて、君は魔法使いになりたくはないか。

本書では、そんな魔法使いを目指す君たちに、魔法の基礎を説いていこうと思う。

「って、何だよ。結局科学じゃねえか！」

大型書店の参考書コーナーに少年の声が広がった。一瞬空気が凝固し、時間が止まる。そういった比喻が似合う空間の中、少年の近くにいた他の客が身を小さくしながら、一瞥を残し、そそくさと離れていくのが見える。そんな姿を睨みつけた少年は「なんだよ」と独り言ちた。不機嫌そうに歪んだ口元が、八重歯を覗かせる。

そうやって悪態をついた少年の名前は、北内恭介。きたうちきょうすけ身長が高く肉付きも適度。そんな体に纏った紺色のブレザーをはだけさせ、学校指定のネクタイを適当に緩めている。厳しい人間から見れば「だらしない」と言われそうなその姿の上には、生まれつきの赤毛をヘアワックスで後ろに流し、藪睨みな黒い相貌を不機嫌に細くした顔が見えてくる。

外見だけで言ってしまうは不良だろう。しかし、そんな風貌を持った恭介は、不良ではなかった。口が悪い。性格も悪い。頭も悪い。そんな三拍子が揃っていても、決して恭介は不良ではない。なぜか？

それは、不良とは明らかに確執する信念があつたからだ。
己が信念を貫くためには、手段を選ばない。不器用なまでに真つ直ぐなその行動が、周囲に誤解を招くこともあつた。しかし、その事など、彼にとっては微々たる事象。いや、関係のない事柄なのだ。彼が掲げる信念に基づいた『退かぬ』、『媚びぬ』、『顧みぬ』の帝王学的三段活用。それこそが、恭介の根幹を担っているものであり、彼そのものだった。

そんな恭介がどうして、あの様な声を上げたのか。それは少し時間を遡る。

恭介の趣味は読書だ。しかも、主にライトノベルと分類される小説をこの上なく愛していた。外見からは到底想像もできないその趣味のため、今日もバイト帰りのこの時間、この大型書店に、新刊を求めて立ち寄っていたのだ。

他人の視線など全く気にせず、慣れた手つきで一通りライトノベルの棚を指差し確認した恭介は、新刊を数冊手に取るとレジで支払いを済ませた。若い女性店員が何度も文庫本に書かれたファンタジーなイラストと、彼の姿を見比べる姿が記憶に新しい。と、いうより、それがいつもの光景だった。

（俺がラノベ読むのが、そんなに不思議か？）

「ブックカバーはお付けしますか？」

「いらん」

ぶっきらぼうに言い放つ恭介の言葉に、萎縮した女性店員が体を小さくしながら紙袋に詰めていく。これもまた、いつもの光景。

（いい加減に慣れる。このダボハゼがつ！）

心の中で女性店員を目一杯罵倒した恭介は、「ありがとうございました」と控えめな声で差し出される紙袋を乱暴に奪い取った。

（さあ、サツサと帰ってラノベタイムだ）

そう、レジカウンターから踵きびすを返した瞬間、強烈な殺し文句が並べられたポスターが目に入る。A4サイズだったにもかかわらず、そのポスターにつづられた文字列は、とても甘美なイントネーションで脳内を巡り、恭介の心を掴んで離さない。

『遂に魔法使いを育てる参考書が発売！！』

（何……だと？）

恭介の視線が釘付けになる。ファンタジーが好きな人間ならば一度は思ったことがあるだろう。この世界に魔法は存在している

と。
力ある言葉を紡ぎ、空間を湾曲させ、通常では起こり得ない現象を具現化させる。そんな不条理な力を手にしたい。そんな理想を抱いた事が、誰でもあるはずだ。だが、それは一時の事。手に入らない力を求めたところで、それが空想であることに気がつく。

結局、目の前に突きつけられた過酷な現実から逃げる事だと理解して、その妄想は悲しさ、虚しさを伴い霧散するのだ。それが一般的。しかし、恭介の頭の中では、その妄想が現在進行形で展開されており、高校三年生となった今でもそう思っている。ただ、世界や国が、氾濫することを懼おそれて公表していないだけであると。

故に恭介のテンションは跳ね上がる。まさか、ついにあの国際魔法使い同盟が許可を出したのかと驚きの色が隠せない。

常識のある人間ならば「ありえない」と、鼻で笑うところだが、外見とは違う二面性を持った、いわゆるロマンチストで夢見がちな少年なのだ。この恭介という人間は。

だから、迷わず参考書が並ぶコーナーを探し出し、『とある魔法の基礎知識』と題された目的の本を手についた。

（この中に、魔法が……）

生唾を飲み込む。緊張と期待がのど仏をゆっくり上下させた。そ

して、表紙に手を添え、はやる鼓動をそのままにペラリとめくる。普段目を通すライトノベルとは違う文体が脳内を駆け巡った。しかし、どうも求めていたものと違う。一応、最後に大逆転があるのかと期待していたが、結局のところ科学についての解説書（入門編）だった。

さて、時間を元に戻そう。

期待はずれの参考書を元の棚に戻した恭介は、抱えていたライトノベル入りの紙袋を持ちなおすと、^{かかと}踵が重点的に磨り減ったローファーを引きずるように大型書店を後にする。

自動ドアをくぐると目の前にはファミリーストランやレンタルビデオ店の明かりが煌々と夜の闇に浮かび上がっていた。そんな光に目を細めた恭介は、雲ひとつない夜空を見上げ「これじゃあ、星がみえねえだろうが」と悪態を零した。

恭介の言ったことは正しかった。新しくできた道沿いに並ぶ店舗が、我が我がと競い合うように光を放っている。小さく輝く星々の光など邪魔な存在であるかのごとく、かき消してしまっているのだ。恭介が生活するこの街は、政令指定都市に追い付くべく開発が進む街だ。故に密集したオフィス街があると思えばその逆、一面に田園が広がる農村地帯が混在していた。今恭介がいるこの場所は、丁度その二つを結ぶ道の真中。旧来からの物と近代的な物が入り混じる不思議な、というより滑稽な^{こっけい}場所だった。

その場所にいる自分も似たような人間かと、自嘲的な笑みを浮かべながら冷めた視線で行き交う車を睨みつけた恭介は、田舎の方に爪先を向け、右足を踏み出す。

一筋の風が恭介の頬を撫でた。

ようやく風が冷たくなってきた。電気店のショーウィンドウに並ぶ大型液晶テレビの、ニュースキャスターが暦の上ではもう既に冬であると告げているが、それを未だ肌で感じることはできない。こ

の街に住む人々にとっての感覚は、まだ秋が始まったといったところだろうか。いや、コンクリートが囲う街路樹も、日光を得るために広げた緑の広葉を未だ^{いま}たたえている。だから現状にそぐわないのは曆なのだろう。時代が違うという事だ。

そんな風を肩で切って進む恭介の前に、詰襟の学生服はだけさせ、赤いシャツを覗かせた少年が立ちはだかった。日本人であるにも関わらず、自らの長い黒い髪を金色に染め上げたその少年は、全力で眉間に皺をよせ、恭介を睨みつけている。ポケットに手を入れ、猫背ぎみに敵対心を剥き出しにしている少年は東勝昭^{あずまかつあき}といった。

威嚇行動を見せる勝昭を認めた恭介が、藪睨みの視線を彼に対して送り返す。彼らの瞳が互いを捉えようと、自然ときつくなった視線同士がぶつかり合い火花が散る。

一触即発。

そういった緊張感がざわめきを生み、周囲の通行人を二人から遠ざけていく。

そんな中、首を傾けた恭介が「何だ？ 勝昭、俺になんか用か？」と、口を開けば、その態度に眉を吊り上げ勝昭は声を荒げた。

「ああ？ あるわけねえだろうが！」

突っ掛かる様に返された端的な勝昭の威嚇に、恭介は面倒臭そうに眉をひそめる。

「だったら、^ど退け。邪魔だ」

「何だとてめえ！ ふざけやがって、タイムンだ。コラア！」

切り捨てる様に放たれた恭介の言葉に勝昭が激昂。きつく拳を握り締めた。怒りを孕んだ攻撃が繰り出され、恭介の頬を捉え——ない。赤毛が上半身を捻り、突きをかわした。

「いいぜ勝昭。真っ直ぐな攻撃、嫌いじゃねえ……」

口端が吊り上がり八重歯が覗く。相手に対する^{わたかま}蟠りが、きつく拳を握らせた。

「やってやる。タイムンだ」

恭介と勝昭は幼稚園からの腐れ縁だった。常に同じクラスに存在してきた二人は、周りからいつも比べられて育ってきた。そして、そこで生まれた争いの種。それは、自然と芽吹き、花を咲かせる事となる。

つまりどちらが先にしろ、二人の間で争いは絶えなかったのだ。また、別々の高校に通うようになっても実家が近い現実。行動範囲もほぼ同じと言って過言ではない。そんな二人が出会う事は火を見るより明らか。ならば、こうなる事は、二人にとって自然であり、必然的な行動。言い方を変えれば運命と呼べるものなのだろう。

「恭介え！」

勝昭が吼える。同時に繰り出された右拳。それを左半身に見据えた恭介が、大地をしつかり踏み締めた。

恭介は避けない。

だが、拳を伸び切らせない。と、半歩踏み込む。引き締めた左肩で衝撃を受け止め、勝昭の利き腕を封じる。そして……

「勝昭い！」

恭介が吼えた。腰が回る。勝昭から最も遠かった拳が、一瞬にして目前に来た。

一撃。

気付いた時にはもう遅い。全身の力を使い振り抜かれた恭介の拳。それは勝昭の顎を見事に捉え、彼の意識を容赦なく断ち切る。一度ぐらりと揺れた勝昭が、白目を剥いて膝から崩れ落ちた。

「また俺の勝ちだ……な、勝昭……」

蔑む様な視線で勝昭を見送った恭介は、長い脚を伸ばし目下に倒れる幼馴染を跨ぐ。同時に溜め息が漏れた。脱力にも似た気だるさを、首を鳴らし乗り越え、恭介は独り空を仰ぐ。

「だから、……星が見えねえんだ」と……

2 流れ星

恭介の家は、田舎の端に建てられた鉄筋コンクリート製の薄汚れた四階建て市営団地の最上階だ。少ない間取りの小汚い家だったが、幼いころから住みなれたこの家は、父親と恭介が二人で暮らすには十分だった。そんな家の金属製玄関扉を前に恭介は眉の端を釣り上げる。扉越しにも人の気配が感じられない。どうやら今日も、父親はまだ帰宅していないようだ。そう感じた恭介は視線を落とし、玄関のわきに置いてある植木鉢を持ち上げる。

「やつぱりな」

そう言いながら眉間に皺を寄せた恭介が、植木鉢の下に隠されていた鍵を拾い玄関の鍵穴に差し込み回す。カタンとロックボルトが移動したのを確認した恭介は、家に誰もいないとわかっていながらも、体に染みついた言葉を口にする。

「ただいま」

恭介は金属製の玄関を引き開ける。もちろん「おかえり」と父親の声は返ってこない。一人では有り余る暗い家。手探りで明かりをつけるとぼんやり世界が色を帯びてくる。飾り気のない必要最小限を基本とする灰色がかった世界に、目を細めた恭介はまっすぐ自分の部屋へと向かった。

恭介の部屋は几帳面に整頓されている簡素なものだ。灰色を基調としたベッド。ライトノベルが整然と並ぶ本棚。何も置かれていない小さな机。たったそれだけ。そして、ベランダにつながる大きな窓からは、最近になって徐々にその勢力を拡大してきている人工の光が遠くに見えた。

手に持っていた紙袋をベッドの上に放り投げた恭介は、窓を開けベランダに出る。乾いた風が恭介の髪を横に撫でた。

ここからはまだ、星が見える。恭介がベランダの柵に手をかけながら夜空を見上げると、小さな自分をはっきりと自己主張する輝か

しい星々が、吸い込まれる様な黒いキャンパスを彩っていた。だが、恭介の瞳には少し滲^{にじ}んでそれらが映る。いつからだろうか、星が綺麗に見えなくなってしまったのは。そんな事を片隅で考えながら、夜空の中から特徴的な三連星を見つけた恭介は、特に輝きの強い星を指でなぞって線を引く。そうすると、冬を象徴する星座の代表であるオリオン座の完成だった。

満足げな笑みを浮かべる恭介。しかし、誰がその姿を見ているわけでもないのに、照れ隠しだと鼻を鳴らす。

その時夜空に、一筋の光が流れた。
流星だ。

一際大きな流星が、オリオン座のベルトに差し掛かった瞬間、夜空に閃光が走った。流星が激しく輝き、無数に別れる。一瞬の内に流星群と変化した光のシャワーが、世界を彩っていく。あまりにも幻想的な光景に、恭介は思わず溜め息を漏らした。

（綺麗じゃねえか）

しかし、その流星の一つが光を纏い徐々に大きくなってくる。それに気が付いた時、視線が光に吸い寄せられて、動かすことができない。

（まさか……）

彼の脳裏に疑念が浮んだ。それを、補足しようと頭を捻った瞬間、青白い光が、紅蓮の炎に包まれる。疑念が確信に変わった。動悸が激しくなる。恭介の本能が激しく警鐘を打ち鳴らした。これは、大きくなってるんじゃない。近づいてきているんだ。

流れ星とは小天体が地球の大気との摩擦で発光する現象だ。その天体が燃え尽きず地上に到達すると、それは隕石になる。大きさによって衝撃は様々だろうが、脆弱な構造である人間に当たれば、それは致命傷となる。

そう頭が理解したところで、体が動かない。「逃げだせ」と命令を送っても、手をかけている柵を力一杯掴むだけで、揺れる瞳孔が迫り繰る火の玉を凝視していた。

大気が震える。ガタガタと窓ガラスが、バサバサと赤い髪が、それに合わせて激しく震えた。

恭介の瞳が赤く染まる。まるでコマ送りだ。バレーボール大の隕石が恭介の頭上——団地の屋上を通り過ぎていく。連続写真の様に瞳に焼きつくその姿は、恭介の心を激しく震わせた。

（裏山に落ちる）

危険が及ばないと知った彼の体が、好奇心を剥き出しに動き出す。柵を弾き返す様に踵を返した恭介は家の中を駆け抜け、玄関を飛び出し、通路から隕石の行き先に目を細めた。

隕石は炎の尾を引きながら、恭介が裏山と呼ぶ森に吸い込まれていく。いよいよ着弾かと恭介は身構えた。あれほどしっかり視認できた隕石だ。必ず衝撃波が来る。以前読んだライトノベルにはそう書いてあった。

瞬間、夜の闇に閃光が走り、真つ白な光の柱が夜空を劈く。

恭介は反射的に通路の手すりに掴まった。が、待っても衝撃波は一向にやってこない。音もない。唸りを止めた空気の静寂が、恭介の頭を通り抜ける。

（どういう事だ？）

そんな疑問符が脳裏に浮かぶ。しかし、それを考えるよりも先に体が動いた。開けっ放しの玄関を戻ると、ダイニングの壁に並ぶ鍵の中から目的の物を乱暴に引っ掛け、玄関からもう一度外に出る。扉は閉めない。それよりも、闇に浮かび上がる光の柱が恭介を魅了し、視線を釘付けにしていた。

（まだ、消えるんじゃないぞ）

二段飛ばし、三段飛ばしで階段を駆け降りる。一番下まで下り終えると、団地の駐輪場を目指し走った。

駐輪場の目印はこの団地に一つしかない街灯だ。寿命が尽きる寸前の街灯が不定期に瞬き、普段なら不快感を覚える。しかし、今の恭介にとってはその瞬きすらも、戦地に赴くパイロットに向けられたガイドビーコンの様に映り、気持ちを昂らせた。

駐輪場に駆け込んだ恭介は、父親からもらった原動機付自転車（モンキー）に跨ると、握り締めていたエンジンキーを差し込み回す。周囲に自転車などの隔たりはない。

（このスペースなら……）

恭介は、一発でキックを決めるとギアをローに踏み込み、車体を傾けながらアクセルを開けクラッチをつなぐ。後輪が煙を上げながら空転し、車体の向きが流れるように回転していく。そして、ここぞというタイミングでモンキーが地面を捉えると、ゴムの匂いと黒い足跡を残し発進した。

恭介の住む団地の裏にはうつそうと茂る森があった。その森は恭介がいう裏山であり、小さい頃はこの森が恭介の遊び場だった。その頃からだったのだろうか、ファンタジーな小説を読み漁り、自分も不思議な世界で様々な冒険がしたいと思っていたのは。そして今、ファンタジーを求めたその裏山に不思議な隕石が落ちた。これは運命なのだ。光の柱に行けばきっと冒険が始まる。そんな逸^{はや}る気持ち^{もち}がタコメーターをレッドゾーンに導いていく。

タイヤのブリップが整備されていた林道から、轍だけが目印のオフロードへと変わる。一瞬でも気を抜けば暴れまわるモンキーから放り出され、ただでは済まないだろう。それでも恭介はアクセルを緩めない。その勢いのまま半分埋まった倒木を飛び越えると、巧みなバランスで着地を決めた。

車体を体ごと倒し、後輪を滑らせながらカーブを曲がった恭介は、木々の間から零れてくる白い光に目を細める。

（確か、この先は……）

恭介が記憶を頼りに推測すると、この先には開けた場所があった。そこは恭介秘密の場所であり、今でも一人で星を見る時に使っている。柱のそびえるその場所が秘密の場所だなんて偶然と呼ぶには出来すぎている。だが、それ自体はやはり偶然なのだろう。落ちる場所を決められる隕石など存在しないのだ。

光を見つめる恭介の口元が、溢れ出る歡喜に支配され始める。

視界が開けた。すぐ傍を流れていた木々が離れていく。真っ白な光を放つ空間。恭介は速度を落とし、目の前にそびえる光の尖塔を一周すると、モンキーを止めた。

「すげえ」

夜空を突き刺す光の柱。まるで、夜空に光の線を引く流れ星が、そのまま突き刺さっているようにも見える。いったいこれは何なのだと、黒い双眸がまじまじ見つめた。気が付けばモンキーを置き去りに、強烈な光を制限するよう目を細めながら、ゆっくりと柱に近づく。音もない。臭いもない。ならばこれは、と抑えきれない好奇心が、右手をそっと動かした。恐る恐る近づく掌。不器用に伸ばした五指が、輝く柱に触れた。

その時。

光の中から蛇の様に細長い『何か』が飛び出し、恭介の腕に絡みつく。

「くそ！ 何だ？」

反射的に振り払おうと激しく腕を振るが、纏わり付いた銀色の物体はまるで生き物の様に恭介の腕を上る。金属の光沢をもつ物体。しかし、その動きは生物の柔軟さと自らの思考を持っているか様だ。「離れやがれ！」

左手で銀色の物体を叩くが、金属的な抵抗を受けるだけで、効果がある様には見えない。それならばと、恭介は一本の太木に目を付け、その太木に右腕ごと勢い良く叩きつけた。多少の痛みは覚悟の上だ。しかし、ガツと鈍い音がするだけで、銀色の物体には効果がない。それだけでなく、恭介に対しての衝撃もなかった。

「何だよ、こいつは！？」

焦りと恐れが混じる声。そんな声を出しながら恭介がもう一度太木に向け右手を振りかざした時、銀色の物体の先端が恭介のうなじに届いた。と同時に、歪な世界が脳裏に焼き付く。

「がああああ……」

痛みと共に、電撃が走った。視界がゆがむ。全身の力が抜け、恭介は膝から崩れ落ちた。混濁する意識の中、聞こえないはずの音が、頭の中に響き出す。

『……か。き……るか。』

（な、何だ？）

『聞こえるか？』

「聞こえ、てる……」

口の中で止まったその言葉を最後に、恭介の意識が暗闇へと落ちた。

3 覚醒

「うつ……」

恭介の指が微かに動く。瞼を開ければ、剥き出しの地面が目の前にあった。意識を取り戻し始めた恭介は、神経を辿り体の有無を確認する。指は動く。爪先にも感覚がある。もちろん心臓は脈動していた。

（生きてる……）

覚醒し始めた意識で思考を巡らせる前に、腕を動かし大木の感触を確認すると、ふらつく体を制御しながら立ち上がった。しかし、どうも上手くいかない。バランスを崩した体を大木にあずけ、なんとか視線を高くする。ぼんやり見つめた視線の先には、気を失う前からそこにそびえる光の柱が辺りを照らしだしていた。

「何があつたんだ？」

目を細めながら柱を見つめる恭介。冷静に記憶を遡り、気を失うまでの流れを再生すると、原因が浮かび上がった。そう、銀色の物体だ。

寒気を走らせながら反射的に自分の右腕を突き出した。おぼろげに思い出した記憶が、夢ではなく現実だった。その事を証明する証拠が右腕に巻きついていて。銀色に金属の様な輝きを見せるその物体が首筋に触れた瞬間、あの電撃が全身を襲ったのだ。恭介は、憎々しく右腕を睨みつける。

「こいつが……」

そう独り言ちると、感覚がはつきりしてくる。体のふらつきも、どうやら“コイツ”のせいだった様だ。少し、右腕が重い。バランスが悪くなっているのだから、それを微調整すれば、問題ない。動ける。そう拳を握り締めた恭介は光の柱を睨みつけた。

元凶は銀色の物体だ。その原因は目の前にあるこの柱だろう。そう判断した恭介は、首を鳴らし大木から背中を離れた。そして、光

の柱に歩み寄る。

瞬間。

『離れる』

頭の中で声が響いた。同時——背筋に悪寒が走る。とっさにその場から跳び退いた恭介。

今までいた空間に、牡鹿がその象徴ともいえる立派な銀色の角を振り下ろす姿が見えた。勢い余って叩いた地面が微かに震える。それを見せつける様に角を振り上げた牡鹿の黒い眼差しが、恭介を捉える。あんな一撃を受ければ、人間などひとたまりもないだろう。生唾を呑み込んだ赤毛に、鼻息荒く明確な敵意が飛んできた。蹄が砂を巻き上げる。

「何だよ、いったい」

狙われている。それしか状況がつかめない恭介。冷静に考えてみても答えは出てこない。溜め息に変えた舌打ちをしながら、次の一撃をかわすために腰を低くすると、牡鹿をまっすぐ睨みつけた。

その時……

『聞こえるか』

「ああん？」

同じ声が頭の中に響いた。

『聞こえているか、地球人よ』

聞き覚えのある声だった。離れると忠告したこの声。この声を最初に聞いたのは確か……そう、恭介が意識を失う寸前だ。

「誰だてめえは？ お前か、鹿！」

目の前の牡鹿に向けて恭介は気持ち吐き出す。しかし、牡鹿は相応の反応を見せない。鼻息を荒くしただけで威嚇行為を続けている。

『そうではない……私は……』

（まさか……）

頭の中に響く声に恭介は一つの可能性を突きつけるため、その相手に視線を向けながら口を開いた。

「てめえ、俺の腕に絡みついている奴か？」

『そうだ。が、相手から視線を外すな。来るぞ』

俊敏に反応した恭介。声が示す相手とはもちろん牡鹿だ。その相手が恭介に向け上体を反らし、天高く振り上げた銀色の角を今にも振り下ろす瞬間だった。それを、地面を転がるようにして牡鹿の脇に抜けた恭介は、素早く立ち上がり、相手との距離をとる。

「つて、危ねえ。もつと早く言えよ。この銀色」

『獣相手に視線をそらした君が悪いのだ』

「うるせえ。そんなの知ったことか」

そう悪態をつきながら、恭介は牡鹿の瞳を睨みつけた。襲いかかろうとする動物から視線を逸らせてはいけない。そんな事は知っていた。もちろんライトノベルからの知識だったが、それを忘れるほど、恭介の頭の中には疑問符が溢れ返っていた。

なぜ、自分の右腕についた銀色の物体の声が聞こえるのか。

なぜ、自分はそれらを自然に受け入れているのか。

なぜ、自分が牡鹿に襲われなければならないのか。

次から次へと降り積もった疑問。しかし今、自分を狙う牡鹿と対峙する恭介にとって、それらの疑問は今もう、どうでも良い。それより、何より、今の自分が許せない。

なぜ、自分は襲い来る鹿に逃げてばかりなのか。

過去に誓った信念が、恭介に拳を握らせる。

『戦うつもりか』

頭の中に声が響いた。どこか恭介に同調する声。その声に目を見開いた恭介は奥歯を噛みしめ言葉を漏らす。

「だとしたら……」

『覚悟はあるか』

「覚悟？」

眉の端がピクリと動く。

『そうだ。あの鹿の角は銀色だろう。あれは私と同じ者があの鹿に寄生している証拠だ』

「て、てめえ。俺に寄生してんのか」

『話は最後まで聞け。本寄生されたものは通常の身体能力をはるかに上回る力を手にする。が、私は君に対して本寄生をしていない。仮寄生と呼べる状態にある。あの鹿と対等以上に渡り合いたいのであれば、本寄生を……私を受け入れる覚悟があるか？ 共に生きる覚悟があるか？』

頭に響く力強い声。確認するという事は恭介に不利益を被^{おそ}らせるという事なのだろう。だが、今の恭介にとってその質問は愚問だ。口角を吊り上げた恭介は自分の信念を、悔しさを、口にして咆^ほえた。「ああ、あるぜ。尻尾を巻いて逃げるのも、あの鹿に殺されんのもまっぴらごめんだ。俺は誰にも負けねえ！ そのためだったら、悪魔にだって魂売ってやる！！」

その咆哮が大気を震わせ、感情を鼓舞させる。高鳴る鼓動が、体中を駆け巡った。

『その心、確かに受け取った！』

そう聞こえた瞬間、恭介の体に電流が流れる。満たされた感情とは裏腹に、微かな痛みを伴って体の力が抜けていく。不甲斐ない痺れの様な感覚が、再び恭介に膝をつかせた。

「な、何しやがっ……た」

気を失うほどではない。が、体の自由が利かない。こんな時に牡鹿が向かって来ようものならば、避ける術など皆無だ。恭介は必死で牡鹿の瞳を睨みつけた。しかし、牡鹿も馬鹿ではない。銀色の角が円を描き、恭介に狙いを定める。そして、一度前足で地面を掻いた牡鹿は恭介に向け突進を始めた。

重戦車^{ひき}が轢^{ひき}殺そうと迫り来る。だが、体が言う事を聞かない。これでは、ただじつと自分の死を待つだけということか。

——キヨウちゃん——

「それじゃあ、意味がねえんだ！！」

恭介の叫びが響き渡る。それと同時に。右腕に巻きついていていた銀色が薄い膜の様に広がると恭介と牡鹿を隔てる壁となつて、地面に深々と突き刺さる。そして、その軟弱そうに見えた銀色の壁が、牡鹿の突進を甲高い金属音と共に受け止めた。

『待たせたな。本寄生完了だ』

そう聞こえたと思えば、痺れが体から消え去り恭介の体の感覚が研ぎ澄まされていく。壁越しにでも牡鹿の状況が手に取るようになる。まるで、壁が透けて見えている様だ。

立ち上がる恭介。一度首を鳴らすと、夜空を見上げた。本来ならば光の柱によつて掻き消され、見ることができないはずの星が、しっかりと瞳に映る。

「星が、見える」

噛み締める様に零れ出た言葉。その言葉を聞いてか聞かずか、牡鹿が壁から距離を取る。それを待っていた様に、銀色の壁が微かに蠢いたと思えば、一瞬にして恭介の右腕全体を包み込んでいく。継ぎ目のない柔らかな手袋をはめた様な感覚が右腕に広がっていった。まるで、西洋の甲冑かっちゅうを思わせるデイトール。しなやかな曲線と、鋭角な直線が織りなすその籠手が、指先から片口までを武装する。そして、肘から上に向つて特徴的な数本のパイプがシンメトリーを形成し突き出していた。

「何だ？ これは……」

『武器だ。君が望むのなら、右腕は何よりも硬く全てを打ち抜く鎚つちであり、全てを弾く盾となつた』

ファンタジーな展開に恭介の心が躍る。武器ちからを手にした。牡鹿と対するならば、後は勇気だけだ。が、そんな心配は無用。なぜなら彼には絶対に曲げない信念、そして、覚悟があつた。

これで……という思いが、腹の底から湧き上がり恭介の口を激しく突き動かす。

「さあ来い、鹿！ 男同士のタイマンだ！！」

信念を賭けた戦い。それを示す言葉と共に右腕を突き出した。気

合いの入った恭介の咆哮が響き渡る。

ゴングが鳴った。

敵対心向けられた牡鹿が、応える様に一度いななき、恭介に向けて加速する。そして、上半身を持ち上げ目一杯反り返らせると、後ろ脚で地面を蹴った。牡鹿の巨体が宙を舞い、振り上げられた銀色の角が恭介に向けて迫りくる。常人ならば腰が抜けてしまうほどの圧力だ。が、それを見据えた恭介は軽く鼻を鳴らす。

「まっすぐな攻撃。嫌いじゃねえ」

左半身に構えた恭介は、突き出した左腕で狙いを定め、全身の筋肉を引絞って右拳という弾丸を装填する。そして、振り下ろされる牡鹿の角を睨みつけた恭介は、大地をしっかりと踏み締めた。

左腕が牡鹿の角を潜り抜ける。タイミングは今だ。全ての力を集約した銀の拳を握り締め、無駄のない直線を描くと牡鹿の額に叩きこんだ。肘に突き出たパイプから、光と大気が押し出され、体を支える両足が微かに地面に沈み込む。僅かに残った腰の回転で振りぬくと、己が力の軌道を辿り、牡鹿が地面に打ちつけられる。

一撃だ。

力なく横たわる牡鹿を見据え、恭介が大きく息を吐き出した。緊張をほぐす様に肩の力を抜く。これで終わったのだ。

しかしその時、声が聞こえた。

『最後の仕上げだ』

「あ、何言ってるんだ。勝負は着いただろうが」

恭介は不機嫌そうに表情を歪める。

『今は……』

含みのある言葉に、恭介の脳裏に極論とも呼べる結末が浮かんだ。
「殺すのか？」

強がり、脅えが入り混じったぶっきらぼうな問い掛け。それを口にした恭介は、自らを嘲る様に鼻で笑う。

『大丈夫だ。殺しはしない』

心を見透かした様な返答に、恭介の思考が混乱する。この銀色は

いったい何者なのだろうか。恭介の、彼の何を、どこまで深く、知っているのだろうか。

『あの鹿に寄生した者を引き剥がす。そうしなければ、また争わなければならぬ。……触れてわかった。彼は今、人に対する憎悪に支配されている。憎悪を増幅させたのは、あの者だ』

淡々と語られる言葉。

何が原因なのかを告げる言葉に、恭介は怪訝な表情を見せる。「憎悪？」そう、口から出かかった言葉を彼は頭を振って飲み込んだ。何が牡鹿に憎悪を植え付けたかなど、この裏山を愛する恭介が考えればすぐに答えが出る。人間のエゴが憎悪を生んだのだ。そして、その憎悪が銀色の角によって増幅され、人間である恭介がその矛先になった。自然を侵食し、壊し、無愛想な四角い幾何学模様を押し付ける。それを、野生の動物が受け入れられるはずがない。故郷を返せ。仲間を返せ。摂理を犯した人間に罰を。滅亡という罰を与えよ。

そういった湧き上がる憎悪に、牡鹿が飲み込まれてしまう事こそ不幸だと、そう言いたげな右腕の言葉に耳を傾ける。

『すまないが、鹿の所まで移動してくれるか。抱いた感情ごと“あの者”を私が取り込む』

その言葉に恭介は、横たわる鹿に視線を移す。ぴくりとも動かない牡鹿。それに恭介は静かに歩み寄った。倒れた牡鹿を見下ろせば、後頭部から両方の角にかけて銀色の物体が絡みついている。

視線を外さずその場にしゃがみ込んだ恭介が、左手をそつと牡鹿の頬にあてる。チクリと感じる短い毛並みが掌から伝わってきた。湿気と温かさを伴ったその感覚によって、牡鹿が同じ生物である事を再認識させられる。

（ごめんな……）

何に対しての謝罪。そんな認識など彼にはない。ただ、言わなければならぬと思った。言うべきだと思った。しかし、口には出せない。己がエゴを貫くと決めた自分が、それを言ってしまうえば、倒

れている牡鹿が無念でならない。エゴを賭けて戦ったのだ。だって、それは口には出せない。出すべきではない。

『後頭部が接続部分だ。そこに右手を添えるといい』

頭の中に響く声。それに恭介は首を傾げるが、頭に浮かんだ疑問はすぐに霧散する。考えたところで結論は出ないのだ。ならばと恭介は、右掌を開きそつと憎悪を宿した牡鹿の後頭部に触れる。瞬間、牡鹿に絡みついた銀色が激しく輝き、液状に変化した。そしてそれが、恭介の右腕に吸い込まれるように移動し始める。

「な、何だ？」

『吸収、と表現するより融合と表現した方が良いか』

「どっちにしても、意味がわからん」

4 銀星

しばらくの沈黙が流れた。その間に牡鹿の銀色の部分は全て右手に吸収融合され、少し右腕に重さが追加される。見ていて不思議な感覚だ。まるで水銀が勝手に動き回り、それを似た様な金属が取り込んでいく。完全に別物かと思えば、それは間違いで、一つになっ
てしまえばそれが同じものだと嫌でも認識させられる。それよりも不思議だったのは、どうやって牡鹿に寄生していたのかだ。後には傷も残らずただ表面的に張り付いていただけの様に感じられた。
『さて、これで融合は完了した』

右腕は先の宣言通り取り込んだ。牡鹿の憎悪を増幅させていた“者”——絡みついた銀色の物体を——だが、何が変わるわけでもない。恭介に憎悪が移る事もなく、ただ少し、右腕の重さが増した程度だが、その少しの違いこそが、牡鹿のエゴを含んでいる証拠なのだ。恭介は金属質な右腕にそっと左手を添える。

「完了した、ねえ……」

しみじみと右手を見つめ、そう呟いた恭介は一度息を吐き出した。深く、深く、心に溜まった蟠りを吐き出す様に。

すると、それに釣られたのか忘れかけていた好奇心と疑問符が一気に蘇ってきた。

「つて、それよりだ。鹿の憎悪はどうなったんだ」

恭介は右腕を見据えながら疑問をぶつける。本当ならば、もっと右腕に纏わりつく銀色に聞きたいことがあるのだ。しかし、頭の整理がつかない恭介は順序など滅茶苦茶に手当たりしだい口から放り投げる。

「それにだ。お前は何で、この現象は何で、頭の中になぜ声が聞こえるんだ……まだある……」

一段落ついた安堵からか、ダムが決壊した様にあふれ出る疑問の波が、右腕に向けられる。しばらく沈黙に甘んじた銀色の物体は、

肩で息をする恭介が言葉を発しなくなっただのを確認すると、静かに説明を始めた。

『私は、精神感応金属生命体。君たちの言葉を借りるならば……宇宙人だ』

「宇宙人だと？」

『そうだ。私が生まれた星は君が住むこの星、地球ではない。遥か彼方の「変換不能」が私の星だ』

「って、オイ。一番肝心な所を変換不能とかでぼかしやがって。ぶざけてんのかてめえは!？」

『すまない。それは最初に説明しておくべきだったな。私に基本言語というものは存在しない。それ故、直接私自身を君の脳に接触させ意思を君が使用する言語に変換し、語りかけている。つまり、私知っていても君がそれに似た同意語や類義語を知らなければ変換することができない。君は私の星など知らないだろう？ だから変換不能となっただ』

宇宙人が順を追って説明をしたが、恭介には理解できない。しかし、これだけは理解できたと、現実臭い単語に引っかかる。

「コラ。てめえ。サラツと恐ろしいこと言わなかったか、直接脳になんとかかんとか」

『言った。そうしなければ、君とこうやって会話する事すら私にはできない』

「冷静に言いやがって。じゃあ、あの鹿も脳味噌に銀色いのが突っ込まれてたってことか……」

そう言いながら恭介は、横たわる牡鹿を見下ろす。

『そうだ。他の生物の脳幹に接触することによって文化的接触が可能となるのだ』

「脳幹とかリアルな言葉を使うな。何だか頭の中がむず痒くならあ」
考えただけで背筋が震える。恐る恐る左手で首筋のあたりを確認した恭介の指先にコツツと硬い感触があった。その事でこの話が本当であると確信する。それにしても、脳幹に接触していた物体を引

き抜いて無事でいられるのだろうか。確かに傷は残っていないかったが、後遺症の様なものはないのだろうか。実際はどうなのだろうか。そんな不安を抱えた恭介は、これ以上現実的な説明は聞きたくないと頭を振った。

『すまない。それでは話を戻そう……』

「戻さなくて良い。とりあえず俺の聞きたい事だけ答えてくれ。もう、それ以外は後回しだ」

説明を続けようとする宇宙人に、恭介が強制的に自分の意見をねじ込む。それに宇宙人は戸惑いながらもその要求を呑む。

『……わかった。何でも聞くが良い』

“何でも” 科学者ならば、掘り葉掘り聞き出すところだろうが、今の恭介にそんな興味は微塵もない。知りたい事はただ一つ。

「お前は、あの流れ星か？」

『そうだ……私と分裂した者たちが、あの流星群だ』

少しずれた回答に恭介は顔をしかめながら、質問を補足する。

「違う。俺家の上を通り過ぎた流れ星は、お前だったのか？」

『その質問には回答しかねるな。なぜなら私は、君の家を知らない』
宇宙人が知らない事は伝わらない。恭介は腕組みすると、少し唸りながらその事を確認できる質問を考えた。

「そうか、知らねえか……だったら、この光の柱を立てたのはお前か？」

『そうだ。これは私がここに不時着した証しだ。落下の衝撃を発光エネルギーに変換し周辺への被害を抑えた結果でもある』

宇宙人の回答に恭介は確信する。この宇宙人はあの流れ星だったのだと。青白く輝いて紅蓮に燃え上がり、裏山に落ちて光の尖塔を築き上げたのはこの宇宙人だったのだ。小難しい説明など今は望まない。ただ、それだけわかれば十分だった。科学では未だ説明できない不思議でファンタジーな宇宙人が目の前にいる。ライトノベルに求めているのはきつと、この事だったのかもしれない。出会ったことのない不思議な体験。世界を根底から覆すかもしれない稀有な

経験。それが今、自分と共にいる。あの嘘臭い参考書の言葉を借りるならば、恭介は今、魔法使いになったのだ。全ての感情を置き去りにして湧き上がる歓喜。

フィクションの中に足を踏み入れた。それを自覚した瞬間。自然と笑みが零れる。

「そうか……」

噛み締める様に瞼を閉じた。これからの事が恭介の脳裏をめぐる。宇宙人との共同生活。知りたい事は追々聞いていけば良いだろう。

どうして、彼がこの星に来たのか。

どうして、彼は寄生するのか。

どうして、彼は……

そこまで、考えたところで恭介は夜空を見上げた。星が瞬く。これ以上ないまでに、強く。

「じゃあ、お前の名前は？」

『名前？ 私に名前はない。概念も必要も私にはないからな』

宇宙人の言葉を頭の中で聞きながら、恭介はモンキーを探す。どうやらあの戦いには巻き込まれていない様子だった。恭介がこの場所に乗り付けたままの姿で、飼い主を待つ忠犬の様に宇宙人が作り出した光に照らされている。

「名前がない？ なんて不便な野郎だ。だったら、俺がつけてやる。カッコ良い名前を考えてやるぜ」

そう言いながらモンキーに跨る。

『何故だ？』

「これから一緒にいなくちゃならねんだ。名前がないと不便だろう。そう、おどけた顔で八重歯を見せた。恭介の笑みが右腕に向けられる。

どうやら、宇宙人にとって恭介という存在は想定外だったのだろう。どうも調子が狂うといった雰囲気を感じられる。“不便”と聞いても、何がそう不便なのかと疑問が浮かぶだけだ。“名前”にも興味はない。だから自己完結もせず、ただ価値観の違いを噛みしめ

ながら『……そうか』と、いい加減な相槌を打つのみだった。

そんな宇宙人の価値観など知る由もない恭介は、スタンドを戻すと、エンジンキーを回しオンにする。そして、キックでエンジンを始動させた。

しばらくエンジンの鼓動を感じていた恭介の視線が材料を求めて周囲を泳ぐ。色々と考えてみたが、どうもしっくりといかない。やはりこれしかないだろうと見上げた夜空に星が輝くと、衝撃とともれる感覚が恭介のインスピレーションを刺激した。

——銀星——

迷う事はない。気がつけば、浮かび上がった“名前”を口にしていた。

「決めた。お前の名前は銀星だ」

『銀星……』

「そつだ。銀色の流れ星だ」

『そのまま……だな』

皮肉にも取れる言葉は届かない。届いているが届かない。恭介は笑いながら夜空を見上げた。

「カッコ良いだろ？ よろしくな銀星」

豪快に笑いながらそう言った恭介はアクセルを吹かし、モンキーを発進させる。その場に残った光の柱が、恭介たちの後姿を煌々と見送った。

5 星ガ、オウモノ

本日は番組の内容を変更し、世界中に現れた光の柱についてお送りしております……

自宅の食卓で片肘をつきなら、恭介はブラウン管に映し出されたスーツ姿のニュースキャスターを、眠そうな双眸で見つめていた。脇には朝食で食べ終えたカツラーメンが、残った汁に侵食される割り箸を受け入れたまま置かれている。数は一つ。父親は結局、昨晩帰宅しなかった。

恭介がボーっとする頭を掻きむしると、銀色の掌に数本の赤毛が纏わりつく。それを強めの溜め息で吹き飛ばし、残った掌を確認するように握りこむ。見据えた銀色の拳は、金属の様な光沢で恭介を見つめ返した。

昨日の事は夢ではないのだ。流星を追いかけ辿り着いた先で、不思議な体験をした。宇宙人との遭遇。そして、共存の始まり。未知の力を手に入れた。彼の事をもっと知りたい。そう思うのなら、目の前にある銀色の腕に聞けば良い。恭介に寄生している宇宙人――銀星に。

「なあ、銀星……」

再びブラウン管の画像に視線を移した呆けた顔から、唇を動かさずに零れた情けない言葉。それに対し、『何だ』と直接頭に帰ってくる不思議な声。この声こそ、恭介が銀星と呼んだ宇宙人の声だ。恭介に寄生し右腕を覆っている銀色の精神感應金属生命体。彼こそが、今世界を騒がせている光の柱を生み出した張本人だった。

いつまでたつても次の言葉がやってこない状況を物足りないと感じた銀星が、催促する様に言葉を紡ぐ。

『何か聞きたい事があるのか』

「いや、別に……呼んでみただけ」

先ほどと同じ表情に、昨晚の様な覇気は一片も感じられない。理

由も含まず行動に起こした恭介の基準に困惑する銀星。もし彼が人間だったのであれば、間違いなく溜め息をついて頭を横に振っていることだろう。

確認されているだけで世界四十七か国、五百十六か所にほぼ同時といつて良い間隔で現れた光の柱ですが……

「なあ、銀星……」

再び零れた同じ言葉。そして、返ってくる同じ言葉。

『何だ』

「一つ聞いていいか？」

どうやら、最初の呼びかけには戸惑いが含まれていたようだ。そんな自己完結に至った銀星が、一文字足した言葉を紡いだ。

『何をだ』

「こんな地球に何しに來たんだ？」

『目的、という事か？』

「まあ、それ」

テレビの音声に影響されてという訳ではなかった。ただ単純に理由が知リたかった。未知の世界に足を踏み入れるのだ。それなりの理由があるはず。異世界への扉をくぐって冒険に出るにしても、古の戦艦を宇宙船に造り直し銀河の彼方へ旅立つ事も、その根幹には、相応の理由があつた。好奇心だつたり、復讐だつたり、地球の存亡を賭けた戦いだつたり。しかし、銀星からは、そういった目的に対する感情の昂りが感じられない。常に冷静で淡々と言葉を返すだけ。何かに急いて、恭介を動かそうとはしなかった。自分が逆の立場だつたらと考えると、それが不思議で仕方がない。銀星はいつたい何の目的でこの地球^{ほし}にやってきたのだろうか。もしかして観光？ と、恭介の頭に浮かんだ時、銀星の声がそれを弾き飛ばした。

『離反者を探しにだ』

「離反者？」

疑問符と共に零れ出た単語。無意識の相槌に銀星は言葉を続ける。『そうだ。同族の中から裏切り者が出た。その追討を私が担ってい

る』

「要は銀星。お前は警察みたいなもんか？」

『簡単に言えばそういう事になる』

どうやら、銀星はウルトラマンだった。遙か彼方の銀河の端から悪者を追ってこの星にやってきたのだ。

正義の味方、悪者を追い地球に立つ。なんとも心震えるシユチュエーションなのだろうか。銀星がウルトラマンだったら、恭介はハヤタ隊員。偶然にも物語の主人公になった気分だ。だから……と昨晚の事が恭介の脳裏に蘇る。

「じゃあ、あの鹿に寄生していたのはその裏切り者って事が……」

『いや、あれは私だ。私がこの地球に散りばめた私自身だ』

昨晚もそれは説明しただろう。そう言いたげな銀星の言葉。しかし、恭介にはその事など頭の片隅にすら残っていない。いや、伝わっていない。そう理解していないのだ。当然だろう。

「ああん？ どうして自分が自分を襲うんだ？」

だから、認識の矛盾が疑問を作り出す。怪訝な顔を見せる恭介に、銀星がゆつくりと言葉を選びながら脳内に流し込んだ。

どこかで聞いた事のある難しい単語がいくつも並ぶ説明を要約すると、銀星には同族の場所を把握する能力があり、地球にいる離反者を探すため、自らの体を分割し流星群として昨晚降り注いだ。このことらしい。

『……ここまでは理解してもらえたか？』

「ああ」

嘘だった。恭介にとってその説明は求めていたものではない。そうやって判断された説明は海馬に刻まれることなく、適当な相槌と共に外へと排出される。

『そして、もう一つ。私たちの一族は、元は一つの生命体なのだ。故に、個性と呼べるものは基本的に存在しない。こうやって君と会話をしている私は君の精神に影響された、仮初の性格にすぎないのだ。その性格は宿主の影響を受け、個性になる。つまりあの者は、

私であつた者で私ではない。それに、君を襲つたのはあの者の意思ではなく、宿主である鹿の意思だつた』

牡鹿の増幅された感情。それを思い出した恭介は苦虫を噛み潰したような表情で言葉を零す。

「憎悪……」

『そうだ。それが増幅され、君に襲いかかる結果が発生したのだらう。私たちが宿主の精神に影響受ける様に、宿主の精神も私たちの影響を受ける。宿主を形容する感情が増幅されるのだ』

「だから……いつも以上に寝起きが最悪なのか」

『それは、ただの寝不足だろう。私が影響を及ぼしているとは到底思えない。表面的な感情は宿主を形容しない。心の奥、深いところに根ざした感情を私たちは増幅するのだ』

なんとなく理解した恭介の口から導き出された答え。だがそれは、銀星に冷たく否定される。もう少し違う反応はないのかよと、浮かべた苦笑いの中、牡鹿の憎悪がどの位置に存在していたかの事実を知る。人間が広げすぎたエゴ。それはもう、取り返しのつかない所まできているのではないか。そうやって溜め息を吐き出した恭介に銀星が確認を取る。

『理解してもらえたか』

「まったく無理」

即答。しかし、それが全て本音ではなかった。理解できている部分もある。だが、考える事が面倒臭い。だから、簡単にまとめてくれればと舌を打つ。

『そうか』

諦めが混じる雰囲気为零した銀星に、結論どうなの？ と聞き返そうとするのだが、その質問をしたところで、結局それに対しての答えしか返ってこないだろう。つまり、恭介が不思議と感じるあの事を聞くには、直球で質問を投げかけなければならないのだ。感情が読めるのならば、いつその事、心まで読んでくれればと鼻から息を一度抜く。しかし、それも色々面倒臭い事になるのかと否定し

た恭介は、言葉を変換し“これだけ”と口を開いた。

「で、銀星はこれからどうするんだ」

『さあ……それは、君次第だ。私単体では、行動など限られてくる』『離反者を追わなくても良いのか』

『私が追わずとも、他の私が追うだろう。それに、いよいよ追討となれば、誰かが私を融合に来る。君には迷惑をかけない』

これでやっと恭介は理解した。感情の起伏が少なかった理由はこういった事が根底にあったからなのだと。つまり、やる気がないのだ、銀星は。それは、自らが置かれた状況を自分なりに整理して、出来る事と出来ない事を判断している事からきている判断なのだろうが、そんな他力本願で腑抜けなウルトラマンは納得がいかない。それより何より、合理的で軟弱な考え方が気に入らないと、恭介は口調を一変させた。

「誰かがやるう？ ふざけてんのかてめえは！ 何のために地球に来たんだ。そこまで説明できるんだったら、行動に起こせよ。一人じゃ無理なら、誰かに手伝ってもらえ。自分がやらないのに結果だけ期待すんのは、弱い奴がやることだ。それだけは気に入らねえ！俺はお前と共に生きるって覚悟を決めたんだ。お前も、俺と生きる覚悟を持ちやがれ」

勢い余って食卓を叩いた拍子にカップラーメンが一度軽く跳ね上がり、危ないバランスを何とか保ちながら着地する。残った汁に波紋が広がった。

しばらくの沈黙が流れる。いや、正確に示すならば、テレビのくだらないコマーシャル音声だけが空間に流れる。

あなたの、一步が地球を救う。ストップ地球温暖化……

その中、銀星が自嘲する。言葉に出したわけでも、行動に移したわけでもない。だが、そんな感情が、彼の恭介に対する認識を改めさせた。

——この宿主ならば……私は——

強い意志を感じる。それは、恭介の願望なのかもしれない。牡鹿と対峙した際受け取った心の一部なのかもしれない。だがそれが、徐々に大きく脈動し銀星の中で、力を形成し始めた。その力が、今まで黒く塗りつぶしていた選択肢を白く輝かせ、順序筆頭へと押し上げる。選ぶは銀星。望むは二人。

——強くなれる——

『すまなかった。君が望むのならば、私も望もう。強くあることを……。私たちは運命共同体だったな』

自己完結。いや、始まりなのだ。変わりゆく自分の感情がそれを示してくれる。

「そうだけ。銀星。俺たちは運命共同体だ」

『協力を感謝する。恭介』

初めて銀星の口から自分の名前が呼ばれた。それが、何を意味しているのかなど深くは考えない。それよりも対等に語り合える状況に恭介の表情が緩む。そして、二人のこれからについて口を開いた。「で、どうするんだ銀星。どうすれば良い？」

『まずは、情報集めだろう。世界に散った私と融合し、情報を集める。そして、最後には……』

「離反者の討伐か」

『ああ、そうなる』

「なあ、銀星。お前が追っている奴はどんな奴なんだ。どうして追われているのか意味がわからねえ。それに、見分けはどうするんだ？ 元は同じなんだったら見た目も同じだろ」

『離反者は、変異体だ。私たちから生まれた一族とは別の存在。常識など通用しない。その姿は私たちとは違い、金色に輝く。完全なる自我を持ち、無数の星を破壊しうる可能性を秘めた存在だ』

淡々としていた銀星口調が、少し変わった気がする。それを密か

に嬉しくなりながら頷いてみるが、おぞましい単語に驚き、声を上げてしまった。

「星を破壊つて。無茶苦茶じゃねえか！」

『ああ、それを相手に戦うのだ。故に切り出す事を戸惑っていたのだが、良かった。恭介とであれば可能だろう』

何を根拠にと鼻を鳴らした恭介だったが、不思議と恐れはなかった。それこそ根拠など微塵もない。だが、銀星の言葉が心の底に響く様で、彼がそう言うならば、そうなのだろうと、変に納得してしまった。それよりも、胸のつかえがとれた事。それが、清々しいやはり、ウルトラマンはそうでなくては。そう、安堵とも取れる息を吐き出した恭介は、右腕を確認するように拳を二度三度作り上げると、もう一度頭を掻きむしった。

「それよりさ、この右腕何とかしてくれねえか。外に出るにしても目立ちすぎだろ。それに、風呂にも入りてえ」

実を言うと昨日から恭介は風呂に入れていなかった。原因は右腕。制服の袖ごと右腕を包み込んだ銀星が邪魔をして、上着を脱ぐことが出来なかったのだ。それ故、頭がかゆい。

上昇を見せた話題が突然、気の抜けたものに差し替わった。一時の戸惑いの中銀星は、恭介という人間の一部を垣間見たようだ。この宿主は実に面白い。『ハハハ』と明確な笑い声を響かせ、言葉を紡ぐ。

『君が望めば、私は自由に形を変えよう』と。

6 星集め 『黒い猫又』

木枯らしに成り切れない、肌触りの良い風が舞う秋空の下。もうすぐで真南に差し掛かる陽射しが、大地の温度を上げている。ここは閑静な住宅街。と言うより、木目が目立つ長屋が押し寿司の様に密集している場所だった。

その細い路地を敏捷に駆け抜ける一匹の黒猫。その口には一尾の秋刀魚がくわえられていた。しなやかに躍動する体。それらに同調し不規則に揺れる三本の銀色の尾が、彼女が宿主である事を明示している。

「待てコラア！」

黒猫は背後から聞こえた人間の声を一瞥すると、鬼の形相で追いかけて来る赤毛が、燃える様になびいている。そう、彼女を追いかけているのは、魚屋の店主でも、裸足で駆けてく陽気な若妻でもなく、銀色の腕を持つ北内恭介だった。

その姿に一度体毛を逆立てた黒猫は、長屋の壁に跳躍すると、更にもう一度対面長屋の屋根に跳び上がる。それを睨みながら瞳で追った恭介は、力の限り大地を踏み切ると、長屋のひさしを銀星で掴み、強引に体全てを屋根の上に放り上げた。着地の拍子に瓦がカチヤリと悲鳴を上げる。

さすがに、もう追って来れはしないだろうと、黒猫は高をくくって尻尾フリフリ優雅に歩いていたのだが、背後に感じた殺気に、尻尾がピンと天を突く。

「俺から逃げようなんて、百年はええ！」

獲物を狙う恭介の八重歯が、吊り上がった口角によってその姿を覗かせた。それを恐る恐る振り返った黒猫が瞳で捉えると、再度全力で屋根の上を疾走し始める。

「だから、逃げんなって言うてんだろぅがあ！」

銀星のため、そして自分のため、世界に散った銀星のカケラを集

め始めたのだ。それによって、今の無差別級鬼ごっこに発展したのだが、なかなか決着を見ない。黒猫にとってこの町は隅々まで知り尽くしたホームグラウンド。それ故、恭介は黒猫に巻かれる事が度々あったが、多少見失ったところで、銀星の同族リーダーが捉えてくれる。だから、エンドレス。この鬼ごっこは、どちらかが諦めるまで続くのだ。

『恭介、このままでは終わりを見ない。作戦を立てなければ永遠のイタチごっこだ』

脳内に流れた銀星の声を聞きながら、恭介は全身の筋肉を鞭の様にしならせ屋根から跳び立つ黒猫の姿を見据える。

「それくらい考えてらあ……っ」と

そう言葉を返しながら、恭介も語尾に合わせて跳躍する。着地場所は、砂利と枕木が敷き詰められた、鉄道の路線。単線のそこを、黒猫は河川敷に向けて猛スピードで駆けていた。瞬時にその後姿を捉えた恭介は、筋肉に酸素を送り込み再動を始める。

『どうするつもりだ？』

「決まってるだろ。走って、走って、あいつを捕まえる」

砂利を巻き上げ、枕木を鳴らし、恭介は加速する。

『それでは、決着を見ないと先も言っただろう』

「じゃあ、どうすりゃ良いって言うんだ銀星？」

『だから、作戦を決めようと言っている』

その言葉に恭介は軽く鼻を鳴らし、同じじゃないかと皮肉を漏らす。

「何だよ銀星。てめえもノープランじゃねえか」

『いや、作戦は数千ほど用意したが、恭介はどれを選択するのだ？』

「はあ？ それを今から全部説明するのか？ 冗談はよしてくれ」

『ならば、君のイメージをくれ。そうすれば、それに最適な作戦を私が選択する』

銀星の提案に、恭介は「わかった」と小さく頷くと、力の入った

そのイメージを腹の底から繰り出す。

「何人たりとも俺の前は走らせねえ!!」

時間が止まった。いや、正確には世界が呆れた。

『馬鹿か君は。それは無理だと言っているだろう』

それらの代弁となつた右腕の言葉に、恭介は睨みをきかせながら言葉を向ける。

「コラ銀星。てめえ馬鹿つて言いやがつたな」

『聞き分けのない君には、その単語がぴったりだろう』

「ふざけんじゃねえ。俺はな、自分の足であいつを捕まえるんだ」

『君の意志は汲むが、それは少し難しいぞ』

「ああ？ 何故だ？」

そう睨みつけた右腕が、一つ間を置き言葉を紡ぐ。

『とりあえず前は見るべきだ』

「あん？」

そう言いながら視線を正面に移した瞬間。汽笛の様な警告音が鉄橋の上に鳴り響く。正面には、時速数十キロで迫る箱型の鉄の塊。

銀の車体に緑の筋を引いたその電車は、火花を散らした車輪と共に、耳障りな金属音を伴いながら恭介に向つて来る。

「もつと早く言ええ!!」

そんな悲鳴を上げながら、恭介は鉄橋から飛び退く。重力にその身を引かれた銀腕が、下で流れる水面に、一本の水柱が噴き上げた。

『無事か？』

チャプンと顔を出した恭介に銀星の声が聞こえる。それに答えるよりも、彼の頭の中は一つの事で一杯になっていた。黒い相貌が見つめる先、列車が通り過ぎた鉄橋の上。そこから自分を見下ろす金色の猫目。ずぶ濡れの恭介を嘲笑うかの様に細くなったその瞳と、秋刀魚の間からニヤリと覗いた牙が、震えるほど腹立たしい。そして、スンと転回する銀の尻尾が挑発する様に揺れた。

「ぎ、銀星……」

『どうした？』

「作戦をくれ」

『どれを望む？』

「一番確実な奴だ」

そう言い放たれた恭介の言葉。彼の瞳に明確な炎が、浮かび上がっていた。

『さあ、虎穴に入ろう』

そう言った銀星の言葉を聞きながら恭介が見上げるのは、一つのオフィスビル。全面ガラス張りで、陽光を鏡の様に反射し、輝きを放っている。鉄筋コンクリート製地上三十階、地下三階のビルの中に、あの黒猫がいるのだと、銀星が教えてくれた。そして、この中から動こうという気配は感じられないのだという。つまり……

「ここが、あいつの埒か……」

という事だ。

そのビルの中には複数の事務所が構えられている。ベンチャー企業、保険の支店、IT関連、旅行代理店から、探偵、末にはヤクザの事務所まで。混沌としたビルだが、それがこのビルなのだ。そこを埒にする黒猫は、不自然な空間を生き残る術を心得ているのだろう。本当に動物の適応力というものには感心させられる。

エントランスには、やはりと言うか、当然と言うべきか、群青色の制服に身を包む警備員が一人常駐していた。不審者に対する警戒が彼の仕事だ。ずぶ濡れではなくなったものの、よれよれの被服に身を包んだ恭介は、十分彼の仕事対象となる。

「おい君。ここに何の用だ？」

三十過ぎの警備員が恭介に声をかけた。警察官の制服とも見間違えそうなその姿に、恭介は眉間に皺を寄せた。

「ああん？」

鋭い目つきに警備員は一步後ずさり、もしかしたらという考えが導き出される。この人間は、あの事務所の関係者ではないかと。

『恭介、くだらない事に構っている暇はない。さっさと行くぞ』

「どこに行けば良い？」

「さ、最上階です」

怯えながら零れ出る警備員の言葉。それを無視した恭介は、銀星の言葉を待つ。

『最上階？ ……いや、屋上だ』

それに黙って頷いた恭介は、視線でエレベーターを探す。その姿を見た警備員が震えた指で、それを指示した。曲がり角の影になってわかりづらいが、確かにあった。恭介が目指す鋼鉄の籠が。

「ありがとう」

そう軽く礼を言い残した恭介は向かう。猫又の住む屋上へ。

恭介が屋上へと続く金属製の扉に手をかけた。立ち入り禁止と大きく記された赤文字を無視した銀腕は、ドアノブを回し錆びた音を立てながら、その扉を押し開ける。鍵は、銀星の力によってすでに解除されていたのだ。

ここに至るまで少し最上階の住人と争いがあったが、それは、一方的な勘違いと、それに付随した暴力の行使で始まり、それらを振り払う銀腕の破壊力で終幕となった。凄惨な状況を作り出した恭介は、完全に沈黙したその場を通り抜け、階段を上ると、強い風が吹く屋上へ辿り着いたのだった。

そこには、空調設備の室外機及び、水道の貯水タンク並びに、それらに繋がるパイプが設置されている。一応腰くらいまでの外壁が設けられているが、その意味は希薄で、安全対策に問題が見受けられた。基本立ち入り禁止だからといっても、これは明らかに杜撰過ずさんぎる。

そんな空間を見渡した恭介は、その外壁の上に乗りながら、自分に向けて体毛と尻尾を逆立てる黒猫が目に入った。逃げ場がないと相手も感じているのだろう。それに恭介の口角が少し上がる。

「ここが、年貢の納めどころだ」

そう、零れた言葉。だが、目を凝らせばその黒猫の後ろに、同じ毛色の子猫が三匹、猫又に縋^{すが}り付く姿が見える。その姿に、恭介の頬から力が抜けた。良く見れば、骨だけになった秋刀魚が、転がっている。吐き出した息と共に、体の力も抜けた。

「何だよ……そういう事かよ。そりゃあ、全力で逃げるわな」

この威嚇行為だつてそうだ。我が子を守るための虚勢だろう。だが、それをしなくては生きていけない世の中なのだ。それを噛み締め、恭介は銀星に言う。

「どうしても、回収しなきゃ駄目か？」

『君が望むなら、それは必要としない……だが……』

銀星が言葉の続きを流し込もうとしたその時だった。残酷な風がその猛威を揮う。強烈な風に煽られた猫又は、爪を突き立て必死でこらえるのだが、その子供たちは宿主でない。コンクリートにしがみつく事などできなかった。小さな黒猫が、ビルの外へと放り出される。それは、ほんの一瞬。

だが、猫又は迷わず飛び立った。

地上三十階から舞い落ちる子猫たち。各々が空を泳ぐように四肢を動かすが、空を泳げるわけではない。

落下速度が生む風の中、足掻いているにすぎないのだ。それを追いつき、宙を翔け抜ける猫又。先ずは一匹、口でくわえ込む。そして二匹、前後両足を使ってしがみついた。だが、このままでは、後一匹に追い付けない。未だ彼女には扱い切れない銀の尻尾がただ揺れるだけ。このままでは、一家そろってアスファルトに叩きつけられてしまう。

絶望か、悲しみか、それとも、乾燥が生み出したのか、猫又の瞳から涙が流れ……舞い上がった。

「諦めんじゃねえ！！」

声が聞こえた。耳を器用に後ろに回せばそれが幻聴でない事に気がつく。あの人間の声だ。赤毛と鬼の形相をした人間の声。その意味などわからない。だが、なぜここにあの人間が来ているのだ。

恭介は身を細くし、赤毛を激しくはためかせながら猫又を追う。理由なんてなかった。いや、厳密に言えばあるのだが、それを考える時間などないまま、体が動いていたのだ。

なんとか猫又に追い付いた恭介は、銀腕で彼女らを抱え込んだ。

そして、更に加速をすると、残りの一匹を左手で掴み取る。そして、相棒の名を心から叫んだ。

「銀星ええ！」

『望め恭介。君にはそれができるのだ！』

オフィス街に生まれた光の柱。その傍らで恭介は、腕の中で眠る黒猫一家を見下ろした。銀の尻尾が子猫を包み込むように丸まっている姿が、母親の強さなのかと下唇を噛む。

「なあ銀星。屋上で、言つてたよな。“だが”って。その続きは何だ？」

緩やかな抑揚に銀星は、口調を合わせ言葉を紡ぎ出す。恭介が何を望んでいるのかは、わからない。が、事実は告げるべきだろう。

『“だが”の続きか？ それは、この者を、離反者と戦わせたいのか？ と、言う事だ』

銀星の言葉が心に突き刺さった。そこまで、考えた事など微塵もない。ここで吸収しなければ、いずれこの猫又は離反者と戦う事になる。そうなれば、子猫の事など構っていらなくなるだろう。いや、もしかすれば、その命を失い、子猫の下から姿を消すのだ。母がいなくなった辛さは、痛いほどわかる。例え、力を失った事で生活が苦しくなったとしても、この子猫たちには母親が残るのだ。それだったら……

流れた長い沈黙。

そして、完結を見せた恭介の思いが、今、零れ出る。

「お袋を、大切にしろよ……」

7 星集め 『虎と少年』

「銀星えースターライトオーー!!」

恭介の咆哮が響き渡った。銀星を纏った右腕が拳を握りこみながら直線を描く。目標に向かって放たれた最強の鎚は、恭介に飛びかかる銀色の爪を持った虎の額を打ち抜いた。大気と光が肘から排出される。

放たれた衝撃に、虎は放物線を描いてアスファルトの地面に叩きつけられその動きを止める。それを見据えた恭介は満足そうに鼻を鳴らした。

『何だ、今の掛け声は』

虎に寄生した“銀星であつた者”を融合すべく歩み寄る恭介に、銀星の淡々とした口調が水をさす。それを受け流す様に笑った恭介は「必殺技だよ」と右腕に力瘤ちからこぶを作つて見せた。見せる相手はその右腕なのだか、それを指摘する者は誰もいない。

彼らは今、隣町にある小さな動物園にいる。アスファルトで地面が塗り固められた園内に、規則正しく植えられた植物。公園の様に芝生が未だ萌える公園も含み、緑を強調した作りとなっていた。そこで、行動展示ではなく、ただの展示を目的とした鉄製の檻が無機質なコンクリートと金属で動物たちを囲っている。休日には小さな子供連れで賑わう、隣町の人気スポットの動物園に、銀星の能力によつて導き出された近場の“銀星であつた者”を求め、恭介たちはここに来ていた。例えば“小さな”といつていても、全国規模で宣伝されている動物園と比べ、何の遜色そんしょくもない充実した内容を誇るこの場所で“銀星であつた者”は一頭の虎に寄生した。そして、鉄の檻を破壊し園内を血で染め上げたのだ。

麻酔銃で応戦しようとした飼育員。他の檻で飼われていた動物。それらが食物連鎖の上位に位置する虎の胃袋の中へと消えた。増幅されたのは食欲だった。

不細工なまでに膨れ上がった腹部を引きずりながら俊敏な動きを見せる虎に、誰も手出しができず、園外に出さない様バリケードを作る事だけで精一杯。そこに恭介たちが出くわし、周りの制止を振り切ると、単身虎に立ち向かったのだ。

園内の惨劇を目の当たりにした恭介は吐き気を催したが、それを味わう事もなく虎との戦闘が始まった。

恨みも憎しみもない。ただ、貪欲に求めた本能がこの惨劇を生んだのかと、眉をひそめながら一撃必殺を誇る拳を繰り出す。その後銀星に見せようとした力瘤も、どこか割り切った考え方が生み出したのかもしれない。それとも、牡鹿の時と同様、個々が持つエゴの衝突を思い浮かべていたのかもしれない。が、そのどちらにしろ、恭介の心の中には虎に対する怒りがなかった。亡くなった人間に同情はする。しかし、運が悪かった。そう思うだけだ。

ここがもし人が作った空間ではなく自然の中だったら、仕方がない事だ。人の尺度で測ろうとするから、人を殺した虎に怒りや恨みを抱くのだろう。

もう一つ言葉を重ねるならば、動物園自体がエゴの塊だったのだ。故に、人のエゴがこの惨劇を生んだと言っても過言ではない。同じ動物を檻で囲い、餌を与え、見せ物にする。一種の優越感というものがこういった仕組みを作り上げたのかもしれない。違う者ならば、好奇心が、優しさが、夢が、この中に詰まっているという言い分^{ぶん}を主張するだろう。しかし、その者はやはりエゴに縛られた人間なのだ。

何が悪いのか。どうしていれば良かったのか。そんな事を考えていても、今の状態がどうにかなるわけではない。この虎を殺したとしても殺された人たちが生き返りはしない。

銀星がこの星にやってこなければ、虎に寄生しなければ、そんな事を考えたところで誰にも責任を転嫁する権限はない。

だから、悪いのは“運”なのだろう。

『待たせたな。融合は完了した』

銀星の声が聞こえる。また少し重さが増した右腕を握りしめ恭介は立ち上がった。自分ができるのはここまでだ。後は、他の人間に任せよう。どうするのかは火を見るより明らかだろうが、虎に対してそこまでの義理はない。そう溜め息を吐き出すと、目線を正面に移す。

すると、場違いな人影が恭介の視界に映り込んだ。それに目を凝らす恭介に、その人影は口角を吊り上げる。

誰もいないはずの園内。どす黒く変色しアスファルトにその後を残す血だまりの真中に、線の細い輪郭の少年が子供っぽい笑顔を浮かべながら立っていた。少し離れているにも関わらず少し目線を下げなければ顔が見れない。中学生。いや、小学生か。上下を紺で統一した上品なスーツとも取れる服装に包まれるその少年は、どう考えても迷い込んで来た様子には見えない。恭介が訝しむ目をさらに細めると、少年の薄い茶髪は血なまぐさい風を孕みふわりとその姿を変えた。

「あゝあ、先こされちゃった」

中性的な声。いや、どちらかと言えば女性寄り。しかし、悪戯っぽいその口調は小学生男子そのものだった。彼の名は白木一色^{しきいつし}。

「あ？ 誰だてめえは？」

威嚇とも取れる鋭い視線を向けられた一色は一瞬脅えを見せるが、不敵な笑みを浮かべながら恭介を見返した。瞬間、右腕の袖口から鋭い銀色の刃がその姿を現す。アスファルトに切っ先を突き刺した刃を、見せつける様に地面を削り取りながら前へと突き出すと薄い唇が恭介に向けられた。

「おじさんと一緒。僕は選ばれたものなんだ」

「お、おじ……で、てめえ俺はまだティーンエイジャーだぞ！」

戸惑いの中飛び出した恭介の主張に、一色は意地悪な笑みを浮かべる。

「僕から見たらおじさん。でしょ」

見た目が少し老けて見える。それは恭介が気にしている事だった。

子供っぽくありたいと思う訳ではないが、必要以上に老けて見られるのは嫌だった。年相応。それが一番なのだろうが、世の中そうはいかないものだ。だが、恭介の見た目に問題があるのも事実。だらしなく纏ったオレンジのラインを含む群青色ジャージがそうさせているのだろう。

しかし、それは今関係ないだろうと横から銀星が釘をさす。

『恭介。あの地球人も宿主だ』

「ああん？」

話がどこかへ行ってしまう事を懸念した銀星の言葉に、恭介は一色の突き出す銀の刃へ視線を移した。見えているだけで刃渡りがメートルを超える両刃。そのディテールはゲームやファンタジー小説に登場する“剣”。小学生がそれを持つ事など、この国の法律では許されていない。それどころか彼の細腕でそれを見せつける事など不可能だ。導き出された答えに、恭介は眉をひそめる。

「俺と同じって事が……」

「そうだよ。おじさん。僕たちは勇者なんだ。モンスターを倒して強くなる勇者なんだ」

動かない虎に切っ先を向けながら一色が笑う。もう、“おじさん”と言われても反応しない。恭介は奥歯をギリリと噛み鳴らすと、一瞥を向けた虎に同情を示す。

（お前は、モンスターじゃねえ。ただ、力を暴走させた野生の虎だ）
同族嫌悪。それが芽生えていたのだろうか、本心として言葉を紡ぎ出してくる一色に恭介は嫌悪感を抱く。しかし、目の前の少年とは根本的な部分が違う。信念がそう拒絶した。

「いや、違うな。俺とお前は違う」

「違わないよ。僕とおじさんは一緒なんだ。神様に選ばれた勇者なんだ。ここに来たのだって、ゲシュタルトに導かれたからでしょ。

“敵”を倒せて。強くなれって」

言葉の端々に歪な信念が見え隠れする。それはやはり、恭介とは違うものだった。子供じみた言動を恭介は軽く鼻で笑い飛ばす。し

かし、この人間にこの力は危険だ。そんな予感が脳裏を過る。一瞬緩んだ表情を極端に険しく作り直した恭介は、一色の瞳を睨みつけた。

「坊主。てめえにこの力は出来すぎたもんだ。火傷しない内に俺に渡せ」

差し出される銀色の右腕。そのゆつくりとした動きとは対照的な印象の低音が、一色の心を締めあがらせる。瞳には明らかに見とれる脅えがあった。経験しなくともわかるのだろ。この男は危険だ。

自分の力が及ばない。いや、揮える力は同等だ。しかし、まだ扱うものが未熟であれば経験値の差が絶対的な線を引く。弱肉強食。自然の摂理。平等なヒエラルキー。そういったものが一色の脳裏に警鐘を響かせた。

「いやだ！ 僕は勇者なんだ。勇者になるんだ！ ゲシユタルト！」
一色の叫びが園内に響き渡る。その瞬間、袖口から真っ直ぐ延びた両刃の剣が引っ込むと、変わりに航空機を思わせる翼が少年の背中に現れた。

「僕は強くなる。あんたに負けないくらい強くなってやる。あんたは“敵”だ。だから、僕が倒す」

怒りとも憎しみとも取れる形相を恭介に向けた一色は、垂直に跳び上がった。攻撃が来るのかと身構えた恭介が相手を見据える。が、攻撃ではなかった。ゲシユタルトと呼ばれた一色に寄生する“銀星”が数本のパイプを翼から突き出し、強烈な空気が押し出した。変則的なジェットを推進力に、この空域から離脱していく。

つまり、逃げたのだ。

小さくなって消えていく一色を呆然と見届けた恭介が、それに気がつくには少々時間を必要とした。そして、ようやく脳内での処理を終えた状況が、恭介の口を開かせる。

「に、逃げやがった」

『その様だ』

一人取り残された恭介が、冷静に打たれた相槌に眉をひそめると、銀星が言葉を発する。

『どうする。追いかけるのか』

「当然。俺たちも飛ぶぞ」

『わかった。君が望めば翼となろう。イメージをくれ』

銀星の言葉に、恭介は翼を思い浮かべる。大空を自在に舞う姿。それに見合った大きな翼を。

次の瞬間、右腕にあった銀星が姿を変えた。恭介がイメージした翼を寸分たがわず形どる。両手を広げるより大きく、天使を思わせる銀色の翼が恭介の背中に具現化された。機械的な物ではなく、鳥類が持つその翼を得た恭介は、その翼を一杯に広げ大地を踏み切った。

頬に風が当たる。澄み渡る青空が少し近くなった気がした。……ただだった。翼は風を捉えることなく、重力に引かれた恭介は地面に着地する。

沈黙が世界を包み込んだ。状況が理解できない恭介は、自分にも問いかける様に気持ちを銀星に向けて吐き出す。

「なぜだ銀星。なぜ飛ばねえ」

『これでどうやって飛べと……』

冷静な回答。悲しい風が、心の内を通り抜けた。

8 星の誘惑

朝の教室。まだ、他に生徒は登校してきていない。一色は背負ったランドセルを落書きだらけの机の上に置いた。手際よくランドセルの中から筆箱を取り出すと、消しゴムを手に取り、黙々と落書きを消し始める。これが一色の日課。そして、これが一番苦痛だった。毎日毎日、何度も何度も、消しても消しても、書き込まれる落書き。

『バカ』

『カス』

『調子にのるな』

『存在が気に入くわねえ』

そして……

『死ね』

無知とは残酷だった。その言葉が一体何を意味するのか、本当に理解をして使われているのだろうか。記した者の年齢を鑑みれば、そうは到底思えない。ただ一色を傷つけるためだけに、心無い言葉を連ねているだけのだろう。そういったクラスメイトによる陰湿ないじめは、もう半年も前から続いている。

繊細で壊れやすいこの年代にとって、いじめという行為は人生の致命傷となる。一色もまた、その例外に漏れる事なく、日々傷ついていた。なぜ、僕だけ……こんな目に合わなくちゃいけないんだ。一色は耐えていた。こんな不条理に屈してなるものか。しかし、そう思っていたからではない。逃げる事を知らなかった。いや、逃げる事が出来なかった。共働きの両親からは学校には必ず行くようにと言われている。それが物心ついた頃から一色にとって絶対だった。だから、登校拒否という逃避は選択肢の中に存在しない。いつも味方のいない空間で一人、少年は戦っていたのだ。

自分を否定する“敵”たちと。

一過性であろうこの行為が終わることだけを願い、じっと耐えていた。それが、彼の選択できる自分なりの戦いだった。

しかし、降りかかる火の粉を払わなければ自分の身を焼く。内に溜まるフラストレーション。それを解消してくれるのは、頭の中で繰り広げられてきた歪な妄想だった。大好きなゲームを題材とした舞台に無理矢理“敵”を引っ張り上げ、勇者となった自分が正義の名の下、最強の力を持って惨殺する。一度で足りなければ、何度も何度も舞台に引っ張り上げ剣を突き刺す。伝説の武器として名高い聖剣ゲシュタルトを持って悪を切り裂くのだ。

血塗られた聖剣を振りかざす勇者は常に称賛され、臍物をぶちまけ倒れる“敵”は罵倒されながら晒される。毎朝の日課をこなす一色の脳裏には、常にこの妄想が繰り広げられていた。

だが、一色には今、力がある。勇者にも魔王にも負けない、最高の力が。

しかし、それをもつてしても恭介からは逃げてしまった。同じ力を持ち、虎を一撃のもとに沈黙させた新たな“敵”。今の力では勝てそうにない。もっと経験値を、力を手に入れたい。どうすれば良いのか……。そんな事など、怒りを含んだ歪で幼い思考から、すぐさま答えが弾き出される。

手頃で弱い“敵”を倒せばいい。僕をいじめたあいつらを……

心を吸った聖剣が、我が身を振るえと働きかける。膨張し始めた怒りが少年の妄想を現実につ張り出した。

上空から見降ろす研ぎ澄まされた世界に“敵”が見えた。空白だった覚悟が復讐に塗りつぶされていく。

「ゲシュタルト……いつもの通り。モンスター退治だ」

一色の見詰める先。そこにはランドセルを背負う三人の少年たちがいた。舞台は現実。時は夕暮れ。人気の少ない、未だ分譲が始まらぬ新興住宅地の一角。この場所を少年たちは近道と称し、仲良く

下校していたのだ。敷かれてまだ新しいアスファルトが平らな世界を作り出す。自然とは違う人工的な舞台。その舞台を踏みしめて一色は、少年たちを待ち構える様に睨みつけた。

徐々に近づいてくる少年たち。周囲を気にせず発せられている話し声が、一色の耳にも届き始める。

「結局、今日から不登校だぜ。あのバカ」

「つまんねえ。良いおもちゃだったのにな」

「まあ、でも良くもった方じゃない。壊れるまでさ」

「あゝあ、明日も来なかったら、次だれにする？」

「だれでも」

「じゃあ、亀山にしねえ？ あいつ最近ム力つく」

「だな」

馬鹿笑いが聞こえた。その笑い声を絶望の叫びに変える瞬間を想像すると、一色の口元がつい緩んでしまう。抵抗できない絶対的な力を振りかざし踏み潰そうとしている相手が、愚かで醜いモンスターに映る。込み上げてきた思いが、それらを嘲笑した。飛んで火に入る夏の虫だと。

その瞬間、舞台に全てが整う。緞帳が上がる様に、一色の背後から一陣の風が通り抜けた。動物園で孕んだ血なまぐさい空気が風に乗る、少年たちに一色の存在を気付かせる。毎日自らの優越感を示すため、いじめ続けた相手が目の前にいる。物足りなかった一日のスケジュールがここで補填されるのかと、三人の馬鹿笑いが獲物を見つけた肉食動物のそれに变化させた。

「なんだ、カスじゃねえか」

「もう、卒業まで顔が見れないかと思った」

「お前も、物足りなかったんだろ？ 俺たちが遊んでやるよ」

三人は舌舐めずりをするがごとく、一色に歩み寄る。それをまっすぐ見つめ返す瞳には、揺らめく炎が見て取れた。言葉を返す必要などない。どうせこいつらは心無いモンスターだ。勇者に倒される無様な雑魚モンスター。考えるだけで嬉しさが込み上げてくる。ど

うやって殺してやろうか、一撃で首をはねようか、それともじわじわとなぶり殺しにしてやろうか。

もつ、一色の中に“恭介を倒すため”という目的はない。目前で戯言を囁^{ささや}る相手を妄想ではなく現実で、どう殺害するかにすり替わっていた。

「ほら、とりあえずお前が持てよ」

少年の一人が背負っていたランドセルを一色の足元に放り投げる。ドスと鈍い音が皆の鼓膜を震わせる。それを一色が口角を釣り上げながら見下ろすと、視界の外から残り二つも飛んできた。

「拾えよカス。お前は俺たちの奴隷なんだ」

「かしこまりましたご主人さまって、傳^{かす}いて拾え」

優越感に浸りながら向けられる心無い言葉。いつもの事だ。少年たちが一色を見れば口を開く、くだらない行為。しかし、今日はもうそれに耐える必要がない。我慢しなくても良いのだ。嬉しさが一色の肩を震わせる。決めた。こいつらは串刺しだ。

「力を示せ……」

言葉と共にスウと差し伸ばす右腕が、一つのランドセルを目標に捕らえる。

「ゲシユタルト」

瞬間。袖口からその姿を現す聖剣ゲシユタルト。鋭い切っ先が目標を貫き、アスファルトを割る。それを斜めに切り上げながら振りかざすと、空中でランドセルが紙片を振りまき切り裂かれた。舞い散る物体。それを境に少年たちの視線が交錯する。恐怖におののく六つの瞳と、獲物を見据える二つの瞳。世界が変わった。自己満足で築きあげていたヒエラルキーが反転する。少年たちは敏感だ。瞬時にそれを感じ取り、行動を起こす。

逃走だ。

何振りかまわず反転すると、全力で駆け出した。しかし、規格外で根本たる恐怖が足元をすくい上げる。おぼつかない足運びが空転し、アスファルトに少年たちを叩きつけたのだ。それでもまだ、逃

げようと足掻く這いつくばったモンスターを見据え、一色は声を上げて笑った。

「何だよ、いつもの勝ち誇った顔はどこいったんだ」

じりじりと歩み寄る一色。その姿はもう、勇者を形容する事が出来ない。ただ欲望のままに追い詰める狂戦士。復讐の鬼が姿を現す。

「や、やめろよ」

「俺、やりたくてやってたわけじゃないんだ。やらなきゃ俺たちがやられる」

「た、助けてくれ。俺たちの仲だろう」

都合の良い言い訳だ。弱者に回ればこの程度か。こんな奴らにいいめられていたのかと思うと、怒りが腹の底から込み上げてくる。尻もちをつきながら後ずさる弱者を、蔑む視線で見据えた一色が、魔剣と堕ちたゲシユタルトを天高く振り上げる。串刺しは止めだ。見せしめにまず一人、首をはねてやる。

「まずはお前だ」

冷淡に声を漏らすと、振り下ろした切っ先が弧を描き、横方向の斬撃へと変わる。一色の復讐が今、始まった。

9 スターチャイルド

天使の翼を大きく広げ、垂直に降下する恭介。推力を生みだしている数本の噴出口から爆発的な空気が一度に押し出される。

「間に合え！」

重力すらも推力に加え、恭介が吼えた。視線の先には振り下ろされる魔剣が弧を描き始めた瞬間がある。だから言ったのだ。その力は一色の手に余ると。的中した予想に舌打ちをする暇いとますらない状況がもどかしい。

「銀星！」

『望め、最高の結末を』

言葉が弾けた。瞬間。いや、刹那だ。すでにその意味をなさなくなっていた天使の翼が肥大変形し、魔剣の進路に立ち塞がった。アスファルトを貫いた銀色の棍こんによって横薙ぎの斬撃が、光を放ち受け止められる。

「なんだよ！ これは！」

状況が理解できない一色。苛立ちが声となって大気を震わせる。だが、その余韻を踏み潰す様に、棍を伝って恭介が降ってきた。空気が押し出され、風が同心円状に広がる。足の屈伸を最大限に発揮し、衝撃を緩和する恭介の姿を見せつける様に時間が止まった。

挿すげ変わる前であった目標の“敵”が目の前に現れ攻撃を受け止めたのだ。予想だにしない展開が、一色の思考を混乱させた。

固まったまま動かない周囲を尻目に、恭介は立ち上がる。そのゆっくりとした動きは、この世界に降臨した救世主を彷彿とさせ、夕闇に降り立った勇者の様だった。

その勇者が魔剣を揮う少年を睨みつけると、周囲の時間が動き始める。我に返った一色が小学生とは想像できない跳躍を見せ、後方へ下がり恭介との距離を取った。

「何しに来たのさ、おじさん」

平静を装う相手の言葉を鼻息で吹き飛ばした恭介は、足元に転がる涙でぐしゃぐしゃになった表情の少年を一瞥すると、眉間に皺を寄せながら踵でその少年を軽く蹴った。簡単な合図だ、早くこの場所から逃げ出せ。安全な場所へ離れるんだと。

恭介の合図を理解したのか、少年たちは一目散に逃げ出す。何度も何度も転びながら必死で逃げ惑うその背後を一色がキャツキヤと笑った。その姿を不機嫌な表情で睨み返した恭介は、奥歯を噛みしめると、込み上げる怒りを抑え込み、静かに淡々と言葉を紡ぎだす。「おいたのすぎたあ、ガキンチョに、教育的指導だ。……なあ銀星」その言葉が向けられると、翼と棍が形を崩し、恭介の右腕を優しく包み込む。西洋の甲冑を模した最強の鎚がその姿を現した。その右腕をゆっくり前へと差し出した恭介は、遠近法で掌に乗る一色をきつく握り込む。

「だったら、邪魔しないで。そいつらは僕の獲物だ」

「ああ？ 指導が必要なのはお前だ。そんな物騒なもん振り回してお前はいったい何がしたいんだ？ 勇者になることか？ それとも個人的な復讐か？」

見透かされている。どうして、わかるんだ。この人間は自分の事なんて何も知らないはずなのに。一色がさらに一步後ろに下がった。それを見据えた恭介の口角が少し上がる。

何でもわかつてる。そんな態度が気に入らない。それなのに自分の邪魔をするのか。一色の中に初めて恭介に対する明らかな怒りが生み出された。

「違うよ。僕の目的は強くなる事だ」

「無抵抗な相手をいたぶる事が、強さなのか」

「違う、違う、あいつらは僕をずっと……」

いじめてきたんだ。最後が言葉に出せなかった。相手の意見を肯定してしまうからではない。ただ、その事から自分が弱い事を露呈してしまう虞がある。だから、弱いところは見せられないと、一色はそう下唇を噛み締める。悔しさが、怒りに変わり、少年の目つき

を一変させた。

「ずっと……どうした」

たたみ掛けるように一色を馬鹿にした恭介の声。彼の思わく通り精神的に追い込まれた少年が、感情を爆発させる。

「うるさい。うるさい。うるさい！ わかった事言うなよ。何も知らないくせに。僕には力があるんだ。誰にも負けない強い力が。だから、こんなところで立ち止まっちゃいけないんだ！」

魔剣の切っ先が相手に向けられる。それを見据えながら、ゆるんだ口元をゆっくり動かし、恭介は低音を響かせた。

「そうか。じゃあ、相手してやるよ。お前の持つてる力全部でぶつかってこい。その全てを全力で否定してやる」

挑発するように右腕を突き出した恭介。予感があつた時から決めていた。こいつは、この少年は一撃で終わらせてしまつてはいけないと。

恭介の挑発に一色は激高し魔剣を掲げる。彼を象徴する力。その力を見据えて恭介は吼えた。

「銀星！」

「手はず通りだ」

確認と同時に振り下ろされる力。その切っ先部分を、微動だにせず右手で受け止めた。逃がさない。握りしめられる刀身。押しても引いてもがっちりと固定された魔剣が一色の気持ちを更に昂らせた。「切れる。切れる。切れるお！」

瞬間。固定されていた抵抗がフツとなくなり、魔剣がアスファルトを切り裂く。切ったのだ。自分の方が強かったのだ。そういった確信が、口元に笑みを生む。

ざまあみろ。そんな眼差しを恭介に向けた一色の表情が、その姿を見て一変する。まったく変わらない姿。さっきまで魔剣を掴んでいた銀の掌には、切っ先部分がそのまま残っている。つまり、切れたのは、いや、折れたのは一色の力の方だった。

「良いんだな？」

「ああ、頼む」

銀星の確認に恭介は口元だけで頷いた。すると、魔剣の切っ先が形を崩し、右掌から融合される。少しの重さが加わると同時、脳裏にフラッシュバックのごとく、一色の記憶が流れ出す。途中サブリミナルで広がる彼の心。誰にも見せない深い、深い位置にあるもの。復讐でも、いじめでも、妄想でも、憧れでもない。それは……

「そういう事が……」

恭介は、これを最初から望んでいた。以前、銀星に取り込んだ相手の感情などはどうなるのかと聞いた時、返ってきた回答——『気を失っているときは、知識と感情のみが私に引き継がれる。しかし、そうでなければ、君にも同じ事が起こる』——を利用したのだ。言葉で聞くより正確で手っ取り早い。

一瞬で一色の全てを知った。その寂しさと、飢えに、恭介は奥歯を噛み鳴らす。

瞬間。

「返せ！ 僕の力を返せよ！」

一色の言葉が斬り上げてくる。それを、体を開きながらかわすと、逆手にした右掌でそれを受け止めた。もう一度、強く握りしめる。ギリリと擦れた金属音。瞬間、甲高い音を響かせて魔剣が半分に破壊断れた。

その事が信じられない。認めたくない。まるでスローモーションの様に流れる世界。扱いきれない力で振り上げた自分自身が宙を舞った。夕日が眩しい。だからではない。信じた物が壊されていく。そんな心が、涙を生んだ。

「どうした。それで終わりか」

恭介の言葉に、怒りはない。どこか諭す様にも聞こえる優しい声。それを聞きながら一色は瞼を閉じた。アスファルトに打ち付けられた背中が痛む。もう、いやだ。戦いたくない。

「い、いやだ……」

零れ出た弱々しい言葉。

「ああ？ 聞こえねえ」

「いやだ！」

心の底から放たれる言葉。その言葉に、恭介は激しく喉を震わせた。

「立て！ 立つて俺を見ろ！ じゃなきゃ、誰もお前を認めちゃくれねえ！」

一色の核心部分をえぐる言葉。それが、彼を苦しめる。それが、彼を奮い立たせた。

「うるさい！ 僕は、僕は、僕はここにいるんだ。空気じゃないんだ。あんたに何がわかるってんだ！」

悲痛な叫びが響き渡る。右袖口から刃渡りが半分になった魔剣がその切っ先を作り出す。気が付けば、一色は恭介に向って駆け出していた。魔剣の切っ先を、まっすぐ突き出し、直線を描く。目指すは、相手の力。

「銀星……」

「わかった」

恭介は動かない。銀星も動かない。ゲシュタルトの切っ先が、銀色に輝く二の腕を貫いた。剣を通じてでも感じる肉を貫く感触。ひどく重い。あんなに軽やかに振るっていたゲシュタルトがそれ以上動かない。いや、動かせない。

銀の腕から流れ出る、赤く輝く液体。生物の証。それが銀の刃を伝い、一色の下へと滴り落ちる。揮った力の結末。癒される事のない心が、もう動かさせない。悔しさじゃない。悲しみでもない。どれにも当てはまらない感情が、頬を伝う。

「これが、お前が求めた力だ。一色」

一色の頭に恭介の大きな左掌が、包み込む様に置かれる。

「嫌だろう。つまらないだろう」

嗚咽を漏らした一色が、一度頷く。涙があふれて言葉にならない。「強さってのは、腕っ節だけじゃねえんだ。傷つく事を恐れずに、気持ちを伝える事だって強さだ。弱さを見せる事だって強さだ。甘

える事だつて強さだ。自分の気持ちを抑えて我慢する事は、強さじゃねえ。白木一色。お前が本当に望んでいる事はこんなことじゃあねえよな」

心に沁^しみる優しい言葉。もし、この人にもっと早く出会ってれば、自分は今の様な思いはしなかったのだろうか。いや、それはただの妄想だ。幼い自分が今の言葉を聞いたところで、何もわからず微笑み返したただけだろう。今の自分だから、こんなにも心が痛いんだ。

『恭介……』

「わかった」

銀星が右腕から左腕へ移動する。それを確認した恭介は、銀色に変化した掌を、そつと一色のうなじに添える。瞬間、一色の意識が安らぎの表情と共に断ち切られた。

10 一色の星

一色が目を覚ますとそこには、見知らぬ天井があった。ただ白だけの天井に簡素な蛍光灯が自分を照らしている。体の感覚が作用し始めると、今どこに居るのが分かってきた。清潔なシーツに包まれたベッドの上だ。どれくらい意識がなかったのだろうか、考えてみてもそれは、意味のない事なのだろうと、瞼を閉じる。

少し前、いや、ゲシュタルトを揮っていた間の研ぎ澄まされた感覚がない。聖剣と出会う前に戻った感じだった。たぶん、赤い髪の人、みんな持つて行ってしまったのだろうか。そう、少し軽くなった自分の体重をベッドの抵抗で確認する。

それにしても、不思議な人だった。自分の事などお見通しと言わんばかりの言葉。でも、それが暖かった。心に響いた。あの人のように強くなりたいと思った。

まっすぐに、優しく、それを言葉にできる。そんな強さが欲しいと思った。

「一色！」

室内に聞き覚えのある声が重なった。一色は居ても立ってもいられず。目を見開き上体を起こす。少しばやけた視界の中に、彼の両親が息を切らせながら心配そうな顔をしている。

久しぶりに見た二人の顔。どこか、やつれている様にも見える。二人とも仕事場から飛んできたのだろう。父親は背広のボタンを留めていない。母親は長い髪の毛が纏まらずに広がっていた。いつも身だしなみに気を遣う二人が、それを気にしていない。その姿を見て、一色は声を上げて笑った。

その姿を見た両親から安堵の息が漏れる。しかし、いつまでも笑い続ける我が子に父親は眉をひそめ、母親は目を細くした。

「なんだ。元氣そうじゃないか」と父親。「もう、心配させないで」と母親が言う。

「一色が病院に運ばれたって聞いて、お母さんたち飛んできたんだから」

その言葉で一色は、自分が今まで病院のベッドで寝ていたのだと理解した。たぶん、道端で血の跡を残し倒れている自分を誰かが見つけて、通報してくれたのだ。もしかしたら、誰かじゃなくて、あの人がそれをしてくれたのかもしれない。

「……大丈夫だよ僕。ケガとかしてないし。……心配かけてごめんなさい」

一色の言葉。いつもの事だ。両親に迷惑をかけてしまった。それを謝る小さな瞳。しかしそれは、心に嘘をついていた。

「そうか。じゃあ父さん仕事に戻るから。また明日、迎えに来るな」大きく息を吐き出した父親が、携帯電話を背広の内ポケットから取り出し、どこかへ電話を始める。その先は間違いなく仕事場なのだろう。

それに合わせて母親も口を開く。

「明日は、一色の退院記念にパーティーでもしましょう。そのためにも、お母さん仕事に戻らなくっちゃ。ごめんね一色」

そう言って母親も携帯電話を取り出す。

仕事へ戻ろうとする二人の姿を見つめていると、あの感情が込み上げてくる。恭介が覗いた深い位置にある感情。いや、深い所に押し込めたあの感情が。

自然と零れる涙。放り出していた両腕が、白いシーツに皺を寄せ。力いっぱい握りこんだシーツが一色の気持ちそのものだ。

今まで何度口にしうとしたことだろう。しかし、それは叶わなかった。結局、自分が嫌われてしまう事の方が嫌だったからだ。いじめを耐えた事だっそうだ。強くなりたいと望んだ事だっそうだ。全ては、両親のため。如いては自分のため。そういった事を口にはできなかった。でも、あの言葉が脳裏に蘇る。

——お前が本当に望んでいる事はこんなことじゃあねえよな——

「それじゃあ一色。父さんと母さん行くから。明日まで良い子にしてるんだぞ」

背広のボタンを留めながら、父親が話す。視線は指先。

「明日また来るからね」

備え付けの鏡で、髪型を整える母親。目線は鏡を通した自分。

その二人が見詰める先に、白木一色はいない。自分がない。僕がない。

「僕を見て……僕を見てよ二人とも！」

弾けた気持ちが溢れ出す。いつもと違う雰囲気の子に二人の視線が集まると、心の声がぶちまけられた。

「お袋か……」

『覗き見とは、趣味が悪いな』

カーテンが閉まっていない病室を覗き込んでいると頭の中に銀星の音がする。

「うるせえ」

そう返した恭介は、病院の外壁にある僅かな出っ張りを踏み外しそうになる。慌ててバランスを取ると改めて自分の位置を認識した。ここは病院の四階。一色の病室から外壁を隔ててすぐのところだ。夜風が赤毛を優しく撫でる。

『本当に、不器用だな君は……心配なら出ていけば良いだろう』

「それじゃあ、意味ねえ。俺が出てってもあいつの解決にはならねえさ」

『だったら、覗き見せずに立ち去るべきではないか。プライバシーもあるだろう』

「それとこれとは話が……」

『別ではないと思うが。君ももう少し自分に素直になるべきだろう。望めば良いのだ。一色を助けたいと。あの空間に自分も入りたいの』

だと。そうすれば、私は形を変えよう』

むず痒いところをついた言葉。もし銀星が人間だったのならば、不敵な笑いを浮かべているかもしれない。そういった態度に恭介は、怒りとは違う体温の上昇を感じる。堪え切れない感情が口を動かした。

「あゝうるせえ、うるせえ。俺には何も関係ねえんだ。ほら、銀星帰るぞ。さつさと翼になりやがれ」

『本当に君は……不器用で、天の邪鬼だ』

そう言つて翼を模した銀星が、天使の羽とは不釣り合いな細長い人工物を突き出し、推進力となる空気を吐き出した。恭介の体が宙に舞う。

「銀星……どこで覚えたそんな言葉」

『さあ、一色に聞いてみたらどうだ』

「ゼー……つたいに、聞かねえ！」

月光に天使のシルエットを残した恭介の言葉が、空を彩る星たちのもとへと消えていった。

銀星えゝスターラートオー!!

暗室の中で、壁一面所狭しと並べられたディスプレイに銀色の右腕を振りぬく少年の姿が映し出される。対する相手は一頭の虎。腹部を異常なまでに膨らませたその虎は、通常では考えられない物理の法則を描きながら少年に打ちのめされた。ふと、その少年の姿が過去に焼きついた最愛の人と重なる。まさかと思い瞬きをすれば、それは幻の様に消え、最初の画面が映し出された。

それを見据える二つの瞳。瞳孔にその映像が映り込む。光源が少し強いと細くした目が、男性の眉間に皺を寄せていた。学術的な驚愕はない。自分は物理学者でも、動物学者でもなくただの天文学者だ。先の映像を見たところで、理論的な疑問は何も浮かばない。ただ、撮影された日付から、一週間前にこんな事があったと納得するだけだ。そして、あの幻は心の内が見せた白昼夢と考えるのが、合理的か。

そう言い聞かせる様に鼻から息を抜き出した男性は、腰かける黒い革張りの高級な椅子に全体重を預ける。長身で筋骨隆々、もうすぐ五十を迎えるというのに、ホワイトカラーと言うよりブルーカラーが似合うその体をギイと鳴いた椅子の感触で確かめると、無精が伸ばした黒い頭髪を掻きむしった。

その時、暗室の扉がノックされ、室外にも設置されたスピーカーマイクとリンクしている同様の物から女性の声が流れ出す。

室長兼、統括代理兼、臨時日本支部長兼……

律義に全ての肩書を綴っていく凜とした声。このままスピーカーの性能を堪能しようかと考えてみるが、最近になってどこまででも増え続ける兼務の肩書にうんざりし、男性は手元のボタンを押しながら口を開く。

「もついいから、さっさと入って来い」

同時に暗室が光に包まれる。扉が開くと室内の蛍光灯が純粋な光を放ち始めたのだ。十数畳ほどの部屋。そこには男性が座る椅子と対となった浅黒く重厚な机。整然と書籍が並ぶこれまた光沢のある重厚な本棚。統一されたそれらだけがある室内。どう考えても持て余しているといった感じが否めない。

男性がその机の方へと椅子を半回転させる。その背後で壁掛けディスプレイたちは、左右から展開される壁に隠されていく。机越しに男性が入口を見据えるとそこには先ほどの声の主、中川佐和子なかがわさわこが、まるで秘書のように書類ケースを小脇に抱え、昨日とは異なる灰色スーツに身を包み、長い黒髪をアップにした姿で立っていた。少し前までは男性と同じ白衣を羽織っていたはずだ。それに、去年二十四歳で大学院からここに来た彼女だ。いったいどこにそのレパートリーがあるのかと女性の神秘を考えさせられる。

「で、どうした？ また俺の肩書が増えたのか？」

面倒臭いと投げかけられる皮肉を、佐和子はツンと澄ました表情で受け流す。そして、男性の机まで進むと書類ケースから数枚の書類と、しっかりとした紙に堅苦しい文章が並ぶ一枚の書面を差し出した。

「室長兼、統括代理兼……」

「今まで通り室長で良い」

再び重ねられそうになった長つたらしい肩書は聞きたくない。と言っよりそれをいちいち聞いていたら進む話も進まない。

「そうですね、わかりました。それでは室長。内閣総理大臣から委任状が出ました。こちらから申請するより早かったので、限定の案件は付きますが、こちらの目的としては十分すぎる内容です」

「ほう」と、その委任状に目を通した男性は「これで、世界征服もできるな」と冗談を飛ばすが、彼女はクスリともせず真面目な瞳で男性を見る。冷えかけた空気を取りあえず鼻息で吹き飛ばした男性は、手に持った委任状を無造作に机に放る。

「で、あれか。統括やら支部長が帰国するまでは俺が、この肩書も

持つことになるのか？」

「そうです。肩書だけではありません。しっかりと働いてもらいます」

どうも、今現在すら働いていないと言いたげな彼女の言葉に男性は怪訝な顔を作る。

「働いているだろう？ 俺だってここ三日は家に帰っていない。それに風呂に入る暇をおしんで現状の把握をしているぞ」

そう聞いた瞬間。佐和子は無言で一步下がる。崩れそうになった表情をプライドが繋ぎ止めた。

「お、お二人は、あと一週間は戻られません。ですから、室長。せめて最低限の執務はこなしていただけないと……私が統括からお咎めを受けてしまいます」

「あの爺。まだバカンスを決め込むつもりか」

「バカンスではありません。この度のスターライト発生に伴い、本部の招集に応じられているだけです」

「あ？ 俺あそんなこと聞いてねえぞ。一言『バカンスじゃ』って言い残して二人とも消えやがった。どういふことか説明してもらえるか。統括孫娘中川佐和子君」

男性の言葉に一度溜め息をついた佐和子は、自分の祖父が結構いい加減な仕事をしている事実^{じじ}に頭を痛める。いや統括である祖父だけではない。支部長である祖父の親友も同じだ。この状況で、二人の言葉を疑わなかった目の前の室長も同じ穴の貉^{むじな}。似たもの三羽ガラス。事は一刻を争うかもしれない事態であることをトップスリーはちゃんと理解しているのだろうか。

「わかりました。祖父の不手際もあります。私が知っている限りの事を説明します」

そう言つと佐和子は内ポケットから一冊の手帳を取り出し、金属製の枝折^{おし}りを目印にページを開いた。

「β《ベータ》が再動を見せたそうです。原因は今回のスターライトというのが本部研究員の見解だそうで、そのために統括と支部長

は招集されました。また、現状についての報告会も重なっています。今回のスターライト。やはり十一年前で確認されたスターライトと同様ですが、規模が世界規模となっています。酷似するのは二十二年前のスターライト。若しくは、それ以前にあったと思慮されるスターライトです。ほぼ全てのスターライトから『ガンマ』を回収していますが、一部はもうすでに寄生を完了している模様です。そのためいくつかの事件が発生。なんとか情報操作で抑えてはいますが、時間の問題でしょう。その対応を含め委任状が發布され……」

淡々と進む説明。男性は自分の知識と比較しながら、正確に紡ぎだされるその声に耳を傾ける。男性たちが所属している機関。それは、非公開の世界規模組織だった。その正確な創立は定かではない。世界各地で古より存在してきた科学技術機関。それが三十年ほど前に統一され、“世界科学技術研究対策機構（W・STAR）”といった長々しく訳のわからない名称が生み出された。主な役割として、時代にそぐわない、行き過ぎた科学技術を規制し、秩序の維持や人間の退化を防止するのが根底にある。何故それが必要か、それは地球外生命体の技術や、過去魔法や錬金術として語られていた技術が世界に流通してしまえば、扱う人間がついていけず世界の崩壊が起こる。だから、存在するが公開できない技術を管理・把握・研究しレベルが達したものを世界へ配信する一種の緩和装置としての働きが主だ。そして、その副産物である世界機密の集まりがこの“W・STAR”であり、最先端の技術を扱う研究者の集まりが“W・STAR”なのだ。

そのW・STARの中でも、専門研究員でなければ、他の技術を知ることができない。それを知ることができるのは、本部及び各支部の統括及び支部長だけだ。男性は室長という肩書だが、何度もトップ二人の代理や臨時で役職に触れることから同様の知識を得ている。

なのに、統括は孫娘にそういった機密を全て伝えているようだ。信頼しているのか、爺バカなのか、もう少しこの機関の存在意義を

理解しろと男性は心の中で悪態をつく。そこで統括孫娘の説明が終わり、パタンと手帳が閉じられる。

「……以上です。何か不明瞭な点はおありですか？」

「さあな。俺も知らない事が含まれてちゃ判断の仕様がないだろう。あの爺は君に全てを話したみたいだからな、それが全てなんだろう。まったく、世界規模の守秘義務もあつたもんじゃない」

そうやって、皮肉を言った男性はおもむろに立ち上がり、羽織っていた白衣を脱ぎ机の上に放り投げた。その姿を見ていた佐和子が目に見える溜め息をつく。

「どうされたんです？ 仕事される気になりましたか？」

「ああ、仕事する。だから、風呂入ってくる。ずっと一步離れた距離にしか君がいないのはどうもやる気が出ない」

「な、何言ってるんですか室長。わ、わ、私が近くにいなきゃ仕事できないってセクハラですよ、セクハラ！」

室内に佐和子の顔から動揺が広がる。どうも、こういった事には慣れていないようだ。それをわかって男性は口を開いたのだから、その姿は思惑通りといったところか。顔を真つ赤にして初心な表情を見せる佐和子を尻目に、男性は着々と支度を進める。

「じゃあ、後は頼んだ。ささつと行ってくるから、気長に待っていてくれ」

「な、何言ってるんですか！？ お風呂なんていいですから今すぐ仕事してください！」

そうやって詰め寄る佐和子が机を一度バンと叩く。その顔を真面目に見つめ返した男性はニヤリと口角を上げ囁くように言った。

「実はな、一週間風呂に入っていないんだ」

それを聞いた瞬間、統括孫娘は素早く後ろに三步下がる。その隣をアタッシェケース片手に通り過ぎた男性は背中越しに右手を上げると「大丈夫だ。明日には帰ってくるさ」と言い残しその部屋を後にした。

一人残された佐和子は、腹立たしい気持ちをもう一度机に叩きつ

けると、防音を無視し大声を上げた。

「あんの、三バカ!!」

揺れた時計が、黙って夜の七時を告げている。

12 星を知る者

「どの面さげて帰ってきやがった？ このクソ親父！」

恭介の罵声が、自宅リビングに響く。だらしないジャージ姿で自分を見返す息子を満面の笑顔で抱きしめると丸太のような腕で締め上げた。その男性の名前は北内道三。きたうちどうざん 年齢よわい四十七にして、筋骨隆々。恭介よりも少し背の高い黒髪。その長髪が手入れをしていないからか、ボサツと広がりを見せている。そう、この男こそが恭介の父であり、一週間風呂に入っていないと言った、あの男性だった。

「父親にクソはねえだろう。このバカ息子」

そう言いながら、さらに腕に力を込めた。「ぎゃあ」と恭介の口から空気が漏れる。一大学院の研究者が持つ力ではない。研究ばかりに暮れているくせに、どうしてこんな馬鹿力が維持できるんだ。そう呼吸器官の中枢を圧迫されながら恭介は必死でもがいた。数日から数週間の不定期な間隔でしか帰宅しない父親に、残った空気を絞り出す。

「さつさと離せ、クソ親父。臭えから、クソなんだ。今度はどれだけ風呂入ってねえ」

道三は「二週間」と真実を告げようかと思ったが、それより、そんなに臭いのかと、表情を歪める恭介を開放し、自分の体を嗅いでみる。が、特に臭いとは感じない。いつもの匂いだ。加齢臭という単語が脳裏を過る。しかし、途中でカレー臭へと変換されてしまった。こういった感性もオヤジ臭くなる原因かと自嘲し、過去にも妻から感性の指摘を受けたと、鼻から溜め息を抜く。あの頃から自分はオヤジ臭かったのだ。

「そんなに臭うか？」

とばけた表情で首を傾げる道三に、恭介は鼻をつまんで大きく息を吸い込む。

「間違いなく臭え。風呂は沸いてっから、さつさと入って来い」

そう言いながら、椅子に掛けてあつたバスタオルを掴み父親にぶつける。それが床に落ちない間にすくい上げると道三は、それを肩にかけ口を尖らせた。

「まったく、元気な瑞穂みずほにそっくりだ」

「そんな事言つてねえでさつさと入れ」

鼻息荒く言い放つ息子を尻目に、豪快に笑つた道三はアタツシエケース片手にバスルームへと向かう。

その姿を見送つた恭介は、大きく溜め息をつく。今日の道三はいつもと違う。交わした会話の雰囲気は変わらない。だが行動がおかしい。必要以上のハグだつてそうだ。小学生までの記憶を遡つてみたが、そんな事は一度もなかった。しかしそれよりも恭介の中で引っかかる言葉。どうして今更、母親の名を口にするのかと。

恭介の母。北内瑞穂きたうちみずほは聡明で、腰まで伸ばした赤毛がとても魅力的な女性だつた。

“だつた”この言葉が示す様に、瑞穂はすでにこの世にはいない。十一年前のある事故によつて命を落としたのだ。それは、恭介が幼い時期の事で、はっきりとした記憶がない。覚えている事といえば、近所同士が集まつた夏のキャンプで事故があつた。その時、母親と幼馴染が違ふ世界へ旅立つた。といった、おおまかなものだけ。今考えれば、その時からだろう。一緒に参加していた勝昭と今の関係になつたのは。そういった様々な原因を孕む過去の事件。それをいくら父親に問いただしても、「あれは、不慮な事故だつた」と遠い目をされるだけで、詳細を決して語りはしなかった。そして、道三が例え話をするにしても、決して母親の名は口にしなかったのに……それなのに、どうして今になつてその事を口にするのだらう。

心の底にしまつてあつた疑問が、再び脈動を開始する。締め付けられた胸の痛みに、恭介はもう一度溜め息をついた。

「何で、今更……」

複雑な表情を見せる恭介に、今度は銀星が端的な疑問を投げた。
『恭介。君の父は何者だ』

「ああん？」

どういった質問か理解できない恭介は、眉をひそめる。自分の父親が何者かと聞かれ、どう答えたら良いのか言葉を選びきれない。だが、一般的に捉えればこうだろうと、唇を動かした。

「ただのクソ親父さ。大学の研究かなんかで全然家にも帰ってこないバカ野郎だ」

『専門は？ 生物学か？』

やけに質問をする銀星に多少訝しむものの、恭介はひらひらと手を振る。

「さあな。興味が無いからわかんねえ。……なあ銀星。どうしてそんな事聞くんだ？」

どうして銀星が道三に興味を持つのか、恭介にはわからなかった。いつもマイペースで、冗談ばかりを振り撒き、人前で本音は一切口にしない。それでも行動は常に本音で間違いはなかった。そこには少し憧れを見ているかもしれないが、それ以外は性格破綻者だと烙印を捺している。

不潔で、皮肉屋、意地が悪くて、天の邪鬼で、口が悪くて、手が早い。

と、そこまで考えてみたが、自分の事を棚に上げている事実を思い出し、恭介は自嘲する。ああ、結局似たもの親子なのだと。

だが、そんな恭介の戯れをよそに、いつも以上に緊張感を孕んだ言葉が紡ぎだされた。

『君の父。彼の持つ鞆の中に、同族を感じる』

緊張感がリビングを包み込む。銀星の言葉。その意味が良くわかる。今まで、同族の気配を感じ取った時、争い事は避けられなかった。一歩間違えば、命を落としかねない。そんな展開が常に用意されていたのだ。恭介の心で警鐘が鳴る。まさか、父親と争わなければならないのか。そんな思いが掌を汗で湿らせた。

だが、道三は今風呂に入っている。だったら、鞆から多少なりとも隔離されているかもしれない。今ならば、今の内なら、争うこと

なく決着をつけられるのではないか。そう恭介の中に浮かんだ瞬間、電話のコールが鳴り響く。ジリリリンと鳴ったその音は、自宅に備え付けてある電話からではない。と、いうことは、携帯電話の着信音だ。この家で携帯電話を所有するのは父親しかいない。耳を澄ませばバスルームからその音が流れてきている事に気がつく。突然の事に恭介は生唾を飲み込んだ。

13 星の知らせ

バスルームで一通り体を洗い、衰えを見せない体躯を鏡に映してボージングした後。さあこれから湯船につかるうかといったまさにその時、道三の耳に仕事関係の連絡を意味する音が聞こえ始めた。

昔懐かしい黒電話を意識したその着信音が今はとても耳障りだ。

眉をひそめ口元を歪めると、脱衣所に置いてあった携帯電話を手に取り、発信者を確認する。どうやら相手は登録していない番号らしい。そういった状況にある者と考えれば、大体の察しは付く。だが、それでも、バスタイムを邪魔された事の方が上を行った。

道三は生活防水が施されているその携帯電話をとりあえず湯船の中に放り込む。着信音がお湯の中で遠くなった。しかし、電話の着信は止まらない。一つ溜め息を吐き出すと、自らの体も湯船の中に入れ電話を拾い通話ボタンを押して耳へ当てる。

「やあっと出あったか！ この馬鹿もんが！」

いきり立った老人の声が鼓膜を震わせる。どうやら予想通りの相手だったようだ。直接のコンタクトはしないと決めていたはずなのに、この老人はまったく。孫娘に何か吹き込まれたのか？ と、狭い湯船で体を小さく纏めた道三は、面倒臭そうに口を開く。

「何ですか統括。私は今バスタイム中ですよ」

「なあに言つとる！ 大事な仕事ほったらかして何しとるか！」

「だから、風呂に入ってるんです」

水面から突きだす収まりきらない膝に、フウと息を吹きかけながら再度現状を示す。

「そんなこたあ、わかつとるわ！！」

必要以上の音量でまくしたてる統括の声に、道三は無言で通話音量を下げた。

「わかつてるんでしたら、声を荒げないでください。血管切れて死にますよ」

こんのたわけが！ 大声を出さずにおられるか！ 今の時期がどれだけ重要かってことお、きさんはわかつとおのか！？ あ！？
「わかつてますよ。今がどんな時期で、どんな状態にあつて、あなたの孫娘がとんでもなく優秀で、あなたが爺バ力だつて事もみくんなわかつてます」

だつたら尚更じゃ！ さつさと仕事に戻らんかい！

皮肉も全て認めるのかと、口元を緩める。が、このままでは話が先に進まない。そう感じた道三は、話を切り返す。

「わかりました。すぐに戻ります。でも、その事を言うだけに鳴らした訳ではないですよ。で、どうですか“バカンス”の方は？」
本当につまらん事ばかりじゃ。招集しおつたくせに、会議の“か”の字も出てきやせん。γ《ガンマ》のお披露目は無理そうじゃのう。どうも、今回のバカンス、一筋縄では行かんみたいじゃわ。支部長と一緒に動きまわつてはおるが、そろそろここが限界かもしれん。大目に見とつた本部の雲行きが怪しくなつてきとるわ

その言葉で空気が変わった。ある程度予測できていた事だけに、道三の表情があからさまに曇る。

「やはり……ですか。骨折り損のくたびれ儲けとならない内に、残念でしたねと切り上げましょう」

そうしたいのはやまやまじゃがな。あ奴は言う事を全く聞こうとせん。我が子が絡めば盲目にもなるう。ホントに幸せな子供じゃて「そうですか……お義父さんにも無理はしないようお伝えください」無理無理。無理じゃわ。いくらお前の言葉だろうが聞く耳持ちやあせん。もちろんわしもじゃがな

「なら少しは、自分の体を考えて、新しい研究材料でも探してみてはいかがです。帰ってから研究員が熱を上げるくらいのもが本部にはあるでしょう」

そんなもんありません。わしが惹かれるのはこの情勢くらいじゃわ

「情勢ですか？」

おお、いつにも増して殺気立つとる。原因はやはりβ《ベータ》かのう。再動など見せおるから、彼奴らの欲望を驅り立てよるんじや。また、それをじゃ、挿げ変わった若い頭が黙認しよる。あの腹黒ボンボン。どうもわしは好かん

「まあ、仕方のない事です。お偉い方も人間だったって事でしよう」
それではいかんだ。いずれ組織の意義を忘れ、暴走するやもしれん。そうなればβの宿主も被害は免れんぞ

ほぼ核心を突いた言葉。この電話も本部の回線を利用して架けているのだらう。本部による盗聴を懸念すれば、この言葉など選ぶ事ができないはずだ。それをしないとは到底思えない。それでも、統括はそれを口にした。つまり、事態はそこまで押し迫っているという事だ。

「統括……。私にいったい何をしろと？」

さあの、わしの口からは言えん。が、それをするだけの権限は渡してあるう。それにだ。わかつている事をわざわざ聞くな。何時からの付き合いだと思うとる。お前が優秀で、一介の学者でない事などとうにお見通しじゃ。どうせ、風呂なんぞ口実。既に行動を起こしておるのではないか？

その言葉を聞いて道三は鼻を鳴らす。どうも、この引退間近を匂わせる老人は道三を買い被り過ぎている。とは言い切れない様だ。ここまで凶星を突かれると逆に清々しい。それにこの状況だ。よほどの無能でなければ、間違いなく手を打ってくる。不利な状況まで利用して、道三の選択肢を消し去った。

「買い被り過ぎですよ統括。今の私にできる事は、悪ガキの尻を引っ叩くくらいです」

そうか、なら、期待せずに待っている。だがな、これだけは言うておくぞ、わしの可愛い孫娘は絶対――

統括がそう言った所で、通話が切断される。一方的な切断だ。どうやら、もう、後には退けないらしい。それに、時は一刻を争う様だ。

「俺も覚悟を決めるか……」

最後に零れ出た言葉。それを噛み締めて、道三は湯船から上がった。

脱衣所には、先ほどまで纏っていた服と、アタッシェケースがある。どうやら、鍵は開いていないし、壊されてもない。もし、顔も合わさず渡す事が出来たら。どれだけ楽だっただろう。この中に眠る記憶。それについて語らなければならない。そう思うと、服を着る手が時々止まった。

14 星学者の思い

恭介は動けないでいた。電話の音で出鼻を挫かれたのが最大の要因だが、頭の中で事の成り行きが整理できなかった事もある。たまにしか自宅に帰ってこない父親が“銀星だった者”を鞆につめて帰ってきた。銀星が鞆の中からその存在を感じていたという事は、父親は宿主ではない。だったらどうして、あの父親がそれを持っているのだろうか。考えて、考えて、考え抜いたが、結局結論は出ず。それ故、その先につながる行動が起こせなかった。

そして、道三が浴槽から上がる音を聞き、わからないのであれば直接問いただそうと、心に決めたのだ。

「あゝさっぱりした」

道三が、着てきた服に再びその身を包ませ、リビングに戻ってきた。その手には、問題のアタッシェケースが握られている。不自然に連れ添うその鞆を睨みつけ、恭介は拳を静かに握り込む。やはり、父親は知っているのだ。鞆の中に入っている“モノ”が何であるか。その反応に、何か感じ取っているのだろうか、道三の眉の端がピクリと動く。リビングに戻った瞬間から感じていた。言葉に出さずともわかるこの緊張感。さて、どうしたものか。手遅れにならないうちに、息子には、恭介には告げておかなければならぬだろう。過去に何度も問い質されたあの事実を。だが、あまりにも唐突すぎる。それをこいつは受け入れられるのだろうか。今でもまだ知りたいたいと思っているのだろうか。

まるで、互いに次の言葉を牽制し合う二人。どちらが先に言葉を紡ぐのか、迷っているのかもしれない。待っているのかもしれない。なぜならそれが、これから起こる運命を物語っているかもしれないからだ。

そんな中、アタッシェケースを凝視する恭介の行動に、道三は大きく息を吐き出す。その行為が何を意味するかなど、当の本人以外

知りえることではなかった。が、いち早く恭介が口を開いた。

「親父。何迷ってんだ……」

その言葉とともに道三へ突き刺さる鋭い視線。今日は良く凶星を突かれると、内心舌打ちをする。しかし、それにしても子供の観察眼とは恐ろしいものだ。今まで生きていた中で、この癖を知っているのは、両親と妻瑞穂だけだと思っていた。だが、息子もまた、これを知っていたのだ。それは嬉しい事実。本当ならば、力一杯抱きしめてやりたい。しかし、今の状況であれば、違う形でそれを示すべきだ。それにどうやら、息子もそれを望んでいるらしい。次の言葉を持たずとも、彼の瞳がそう言っている。

「俺になんか言いたい事があるんじゃないか」

そうやって、まっすぐ相手の瞳を見据えてくるところは、瑞穂に良く似ている。自分が憧れを抱いた強い視線。決して目的を見失ったりしない、まっすぐで、眩しすぎる視線だ。道三の中に、過去の映像が蘇える。息子に重なる最愛の人。風もないのに揺らぐ腰まで長い赤毛が、あの頃のままだ。瞼を閉じれば、その姿がより鮮明に浮かび上がる。立ち止まっている自分を責めているのか、語れない弱さを咎めているのか、彼女の瞳はまっすぐ道三を見つめていた。

話しても良いか？ 瑞穂。

……………

問いの答えに言葉はなかった。しかし、彼女は頷いてくれた。あの時の優しい笑顔で、温かい幸せを見せてくれた純真な笑顔で、息子に真実を託すべき時が今である事を教えてくれたのだ。

迷いは……消えた。

力強く見開いた瞳で恭介を見つめ、重厚な唇が動き始める。

「恭介。お前に話さなきゃいけない事がある」

いつも以上に真面目な表情だ。そこには烙印を捺せるような雰囲気はない。これから父親から語られる事は、どんな事であってもそれは真実なのだ。そう理解した恭介は、拳をギュツと握り直し、全ての感覚を研ぎ澄ませた。

まず、W・STARについて説明があった。道三がその研究室長として、超最先端の技術を知る者だと聞かされた。

次に、その組織が銀星たちを捕獲研究している事。恭介が宿主である認識。そこではさすがに驚いたが、組織の巨大さをイメージすれば事足りた。

そして……道三の話は、アタツシケースへと差し掛かる。

「どうだ。信じられるか？」

優しい口調の父親に、恭介は黙って頷く。迷いのないその瞳を見返し、道三はアタツシケースに手をかける。そして、四桁のダイヤルを瑞穂の誕生日に選択すると、その錠前を小さい音と共に解放した。それを丁寧にテーブルの上に置く。

「開けてみる」

その言葉に促されるまま、恭介は蓋を開ける。中に入っているモノに見当は付いていた。だが、その姿を見た途端、思わず息を呑んでしまう。そこにあったモノ。それは……

人の右腕だった。

いや、正確に言うならば右手を模した銀色の金属生命体。二の腕から、指先まで細部にわたり正確にトレースされたその右腕は、か細く、まるで女性の腕だった。

目を見開き、まじまじとそれ見つめる恭介に、道三が口を開く。

「わかるか？」

その言葉は、きつと二重ふたえに問い掛けているのだろう。その銀色の物体はどういったモノなのか？そして、その腕は誰の物なのか？

恭介にとって前者は考えるまでもない。銀星と同じ者だ。そして、後者についても、だいたい見当がつく。道三の態度。アタツシエケースの鍵の番号。それより何より、懐かしい思いが込み上げてくる。これは、間違いなく母親の右腕なのだ。

「恭介……」

銀星の声が流れ込む。しかし、その声が入り込む余地は、今の恭介の中には微塵もない。母への思いが溢れ出し、頭の中を一杯にしていた。蘇る記憶。

優しくかった母親。同じ赤毛でいじめられた時、一緒に悲しんでくれた。

賢かった母親。夜空に輝く星々を繋げて、星座を教えてくれた。厳しかった母親。自分が間違った事をすれば、いの一番に飛んできて叱ってくれた。

温かかった母親。不安で眠れなかった時、眠りにつくまでずっと自分の手を握ってくれた。

その母親の手が、今ここにある。変わり果てた姿でここにある。思い出せば思い出すほど、涙が溢れ出した。あの母親の、大好きだった母親の死が。今日の前にある。何度も父親に聞こうとしたのは。本当はどこかで生きているかもしれないと願っていたからだ。それを拒み続けられ、その推測がいつしか自分の中で本当になっていた。なのに……

「悪かった」

そう言いながら道三は恭介を優しく抱きしめる。少し不器用で優しさを求めるのは酷だという丸太が、震えながら恭介を包み込んだ。

15 星を継ぐ者

どれだけ、父親の胸で泣いたのだろうか。一頻り涙を流した恭介は、充血した目を細めながら、父親の胸板を押す。

「くせえよ。親父……」

それが、精一杯の強がりだという事は誰の目にも明らかだった。しかし、そんな息子の態度に道三は救われる。今にも泣きだしそうだった自分を隠す事ができた。せめて、父親として自分は弱くてはいけないのだ。そんな気持ちが唇を動かす。

「恭介。お前の“Y《ガンマ》”を見せてくれ」

W・STARの説明を受けた時、銀星の呼び名を教えられた。だから、その意味は良く分かる。つまり“銀星を見せてくれ”だ。それに応え、恭介は銀星に呼び掛ける。

「銀星」

そう言葉に発した瞬間、恭介の右腕が最強の鎚を形成する。甲冑のようなディテールに道三は黙って頷いた。そして穏やかな表情で右腕から恭介の顔へと視線を移す。

「銀星という名前を付けたのか」

「ああ」

——北内君。今日からα《アルファ》回収チームのサポーターとして働いてもらう——

——室長。俺の研究はどうなるんです——

——誰かに引き継がせるだけだ。研究員は星の数ほどもいる。それに君の担当する人物はこの世界では有名人だ——

——まさか、“銀腕の魔女”ですか——

——ああ、性格に少し難有りだが。委員会の御息女だ。丁重に扱えよ——

——今日から君のサポーターになりました。北内道三です——

——さんげんみすほ三元瑞穂です。よろしくお願いしますね。道三さん——

——こ、高校生なの君？——

——見て分かんない？ ほ？らピッチピチの十六歳——

——何やってんのよ道三。α《アルファ》の反応が出たわ——

——出たって君ね。俺には分からないんだから——

——うるさいわね。私先行くから、ちゃんとサポートするんだからね——

——ちよ、ちよつと——

——飛ぶわよ『銀星』——

「瑞穂と同じだ。瑞穂もこいつを銀星と呼んでいた」

溢れそうになる涙を必死に堪え、道三は母の腕に視線を落とすと、母の右手を摩さすった。

——おっそいわね。何してたのよ。ほら、さつさとα《アルファ》回収班に連絡——

——いつになったらついてこれんのよ道三——

——な、なかなかやるじゃない。見直したわ——

——これは道三にしか任せられないの。わかる？ それだけあなたが優秀ゆうしゅうってこと。理解してる？——

——何で、私、戦ってるんだろう……ねえ。教えてよ道三——

——もし、さ。もし全部のα《アルファ》を回収したら、私普通の女の子に戻るから……そしたらさ……——

——道三。大好き——

——北内瑞穂になりました。これからずっとよろしくね。道三——

——子供ができたの。すごいわね今じゃ、もう性別わかるんだって

——ふっふん。名前はもう決めてあるの。恭介。どう？ 良い名前でしょ——

——スターライトって綺麗なのに、どうしてこんな風になっちゃうのかな——

——β《ベータ》！？ 大丈夫よ。だって私は“銀腕の魔女”なんだから——

——瑞穂？ 瑞穂？ どこだよ。どこ行っただよ瑞穂お！——

「そして、戦っていたんだ。十一年前、あの日が来るまでは……瑞穂はあの子を……覚えてるか？ 一緒にキャンプに行ったあの子だ」

道三の問い掛けに恭介は力強く頷く。忘れるはずがない。初恋の相手だ。名前は南条真奈美。なんじょうまなみあの事件以来行方不明になっている。その両親も引越してしまい、連絡は取れない。だから、彼女もきつと……

「瑞穂は、あの子を庇って死んだ。最後まで自分の意志を貫いたんだ。だがな、その子が今も事件に巻き込まれてる。特異なケースとして本部で隔離されているんだ。人間の欲が、今も彼女を苦しめている。だから恭介……彼女を、真奈美ちゃんを助けてくれ」

それが、父親の本音だった。隠す事のない言葉。恭介だから言え

た本音。本当ならば自ら乗り込んでいつて救出したいに決まっている。自らが妻の意志を引き継ぎたいに決まっている。だが、それができなかった。道三には力がなかった。強大な科学技術の巣窟である本部相手に戦う力が、常識を覆す魔法のような力が。

だから何度、妻の右腕に寄生してくれと頼んだ事か。それでも右腕は反応を見せない。どうして受け入れてもらえない。何故だ！何度も叫んだ。しかし、それは叶わなかった。できなかったのだ。なぜなら、この右腕にはもう力は残っていないのだから。残っているものは彼女の記憶だけ。それに気がついた時、道三は誰にもこれを渡すものと奥深くへ隠し込んだ。

だが、恭介にならそれができる。力が残っていない者であっても、吸収される事ならば可能だ。長年の研究から、それは立証済み。そんな中、今回三度目のスターライトが起こった。その瞬間道三は歓喜に震え、我先にとγ《ガンマ》を求めたのだが、それも手にする事が出来なかった。組織で回収されたγは全て本部へ送られ管理される。だから、古くからの付き合いであり瑞穂の事を知る、同じ意志を持った統括・支部長と共に“バカンス”という名の作戦を決行した。γ強奪作戦だ。しかしそれも本部に先手を打たれ、もう猶予はない。残された道はこれしかないのだ。

「瑞穂の意志を継いでくれ……」

震えた父親の声。弱々しくも感じられる。こんなにも小さな父は見た事がない。少し恭介は寂しくなった。屈強な父だと思っていた。底が知れない父だと思っていた。だがそれは、表面だけしか見せていなかったのだろうと今気がつく。気丈に振る舞う事が恭介のためだと思っていたのかもしれない。幼くして母を失った我が子を不安にさせてはいけなと取った行動なのかもしれない。だがもう、そんな事はどうでも良いと恭介は鼻を鳴らした。そして、おもむろに母の腕を銀星で掴む。

（銀星……）

『わかった』

呼応する心。母の腕が形を崩し、今恭介の腕の中へ。

母親の意志を継ぐのに何の躊躇ためらいがあるうか。初恋の相手を救い出すのに何の戸惑いがあるうか。そんなもの微塵もありはしない。だから、恭介は笑う。辛気臭い空気を吹き飛ばすかの様に大声で笑った。

「なあに言っただ親父。そんな大事な事、親父にや任せておけねえからな。俺がやってやる」

そう言っただ胸をドンと銀星が叩けば、穏やかに拍子を刻む心が高鳴った。熱い血潮が体中を駆け巡る。父の思いが、母の記憶が、それに乗って銀星を、恭介を導く。

「それに、もう継いでる。親父の意志も、お袋の意志も。だって俺は、あんたたちの息子だ。お袋の力あ、そいつらに見せてやんぜ！」

恭介が突き出す拳が、チョンと道三の胸板をこつく。衝撃なんて皆無だ。だが、どうしてこんなにも堪えるのだろう。不思議な感情だった。寂しくもあり、悲しくもあり、憎らしくもあり、嬉しかった。こんな時、どんな顔をすれば良いのだろう。自分の父はいたいどんな顔をしていた？ どんな瞳で道三を見ていたのだろう。

——頑張れよ、道三——

笑っていた。精一杯の表情で……だから自分も……

「泣くんじゃねえよ親父」

必死で作ろうとする笑顔ができない。いつもならば意識せずとも簡単に作れた。でも、今の恭介を前にすると、それができない。代わりに、今まで隠し続けた涙が頬を伝い流れている。

「う、うるさい。泣いてねえ。ほら行け。さつさと姫を助けて来い」

大きな掌が恭介を追い払うように動くが、それを嬉しそうに笑った恭介はたった一言、言葉を残して玄関先から飛び立った。

「親父は、天の邪鬼だ」

残された道三は、椅子に腰かけその時を待つ。渡すべきものは渡した。自分がやるべき事はこれで、全て成した。あの時からの思いを息子に託せた。だから、それに後悔はない。今回の事で、それだけの人間に思ふべきところはあるが、各々一筋縄でやられる人間ではないだろう。無事でいてくれる事を信じるだけだ。危険に晒されるのは本来であれば自分だけで良かった。そうあるため力を求めて強くなりたかった。だが、気持ちだけではどうにもならないのがこの世界なのだろう。だから、思う事が全て叶ってしまったら、それは目指すための“モノ”が欠如してしまう。根底となる心が抜け落ちてしまうのだ。

全ての生物。いや、全ての存在に心があるとするならば、その大切さを知らない愚かなモノたちは、厳しい生存競争で淘汰され消えゆく運命にある。力は全てではない。強さこそが全てなのだ。それぞれの存在意義に従って求められる強さ。自分に求められている強さ。それが今やっとわかった。

「俺は強くなれたかな……瑞穂」

零れた言葉。だがその言葉を上塗りする様な足音が、リビングに雪崩れ込んで来る。統一された黒装束に自動小銃（MP-5）を構えた部隊が底の分厚いブーツで床を汚す。銃口が狙うは一点。道三の体だ。

「恨みますよ統括。巻き込むのは卑怯だ」

それらに視線を移さず皮肉を零した。

「それは、私の言葉です室長」

黒の部隊を掻き分けて、佐和子がその姿を現す。最後に目にしたスーツではなく今度は黒いスーツ。そして、手にしているのは書類ケースの代わりに、同色の拳銃だった。カチリと撃鉄の起きる音が静まり返った部屋に響く。

「いつから研究員が銃を携帯する時代になったんだ」

いつも通りの口調が飛び出すと、道三の後頭部に佐和子の銃口が当てられる。かすかに震える感触が伝わってきた。

「黙りなさい！ 北内道三研究室長。研究資材の独占及び、無断持ち出し、並びに、情報漏洩。ほか三十三点の罪状であなたを拘束します。抵抗すれば、皆が引き金を引きます」

佐和子の声が上がする。こんな繊細な指に無骨な凶器を握らせたのはいったい誰だ。直接はあの腹黒ボンボンだろう。だが、その大元は自分。だったら、このまま引き金を引かせるわけにはいかない。それに、統括も言っていた。孫娘は巻き込むなど。

「抵抗しない。言い訳もしない」

そう言って道三は両手を頭上に置いた。

16 導く星

煌々と輝く月の下、眼下に広がる白く歪なキャンパスが、黒い天使を浮かび上がらせ、自然の絵画を作り出していた。その間をはな駆け抜ける銀色の翼。肌に沁みる冷たい風が、恭介の目を細くさせ、内から起こる焦燥が口元を歪ませる。

翼が受け継いだ記憶を頼りにW・STAR本部への道筋を直線で描く。彼の脳裏にはメルカトル図法で記された世界地図が浮かび上がり、本部の場所を赤く点滅させ示していた。

点滅が示す場所——それは、北緯三十七度十四分零秒、西経百十五度四十九分零秒。そこに、南条真奈美が隔離されているのだ。

白と灰が浮き彫りにする不規則な土台の上を、滑る様にして移動する黒い十字架。あまりにも広大な高層雲のせいで、その影に変化が乏しく、体に当たる風がなければ移動している事を忘れてしまいそうだった。その錯覚が、恭介の思考を苛立たせる。

「銀星、もっと早く飛べねえのか」

『それは可能であり、不可能だ』

即座に紡がれた回答が理解できない。普通だったら二者択一のはずだ。可能か、不可能か。だが、返ってきた答えは両方を包括するもの。

「どういう意味だ？」

恭介の問い掛けに、銀星は無言で速度を跳ね上げる。突き刺すような寒風が恭介を轟音と共に襲いかかった。それにもう、声すら出す事ができず、恭介はその理由を知る。

いくらまだ、体感する冬が始まったばかりとはいえ、太陽の代わりに月が輝く時間帯だ。それに加え、高度二万フィートを飛行すれば凍えるのが当然。顔に当たる寒風はもう、耐えられないほどの温度にまで下がっている。それなのに恭介は速度を上げるとせっつくのだ。だから、言葉で説明するよりも体感した方が手っ取り早いだ

ろつと、銀星は速度を上げた。そして、一定区間を過ぎると、速度を元に戻す。

『こういう事だ』

つまり、脆弱な人間が速度を出せない理由という事だ。

「こら銀星！ 言葉で説明しろ言葉で」

『君のためを思ってた』

「だったらこう……何かねえのか。俺を守りながら速く飛ぶ方法ってのは？」

盲点だった訳ではない。銀星の質量というものは変わらない。形は変えられても増やす事はできないのだ。ならば、翼と防護壁を同時に形成するには少々体が足りなかった。見様見真似で飛んでから、一色の航空力学を取り込んで現在の飛行形態がある。そう考えたところで、銀星の声が流れ出した。

『ある。……かもしれない』

「ああ？ なんだそのいい加減な返答は？ 銀星らしくもねえ」

『実を言えば、未だ初代銀星の記憶・知識を理解できていないのだ。彼は……いや、彼女は私とは比べ物にない知識と記憶を所有していた。それを一度に引き継いだのだ。私の処理速度が追い付かず、現在、本部に関する情報以外はシャットアウト状態にある。故に、それらを検索すれば、見つかるかもしれない』

「ん？ じゃあ、検索すりゃ良いじゃねえか？ それだけだろ」

簡単じゃないかと紡がれた恭介の言葉。持っているかもしれないならば、それを探せば良いだけの事。樂觀的な彼の笑みに、銀星は渋い声を漏らす。

『しかし時間が……』

「んなこたあ構わねえ！ さっさと検索しやがれてんだ！」

『わかった。後悔するなよ』

銀星がそう言い残した瞬間、揚力が衰えを見せる。風向きが変わった。黒い十字架がどんどん迫り、まさかと思った時には……もう遅い。

「嘘だろおおおつ!？」

その絶叫を残した恭介は、雲の中へと消えた。

力を集中し、己が意識の中へと銀星は潜っていく。間違いなく揚力を失った恭介は重力に引かれ落ちている事だろう。だが、こうなる事は彼も了承済みだ。彼が生まれた地球と衝突するまでに、検索を終えなければ……

それにしても、彼女の知識は膨大。その一言に尽きる。客観的に求めた知識から、主観を含めた独自の理論まで。はつきり言って、その全ては人一人の人生を費やしたとしても到底手に入る代物ではない。いったい先代は母星からどれだけの期間離れていたというのだ。

そう銀星が思考を巡らせながら、この地球に^{ほし}適応し、且つ人間を酷使しない手段を詮索する。

見つけた。地球において彼女が導き出した知識^{ちから}。航空力学を。それを素早く頭の中にインプットする。拙い一色の力学とは比べ物にならない精密さ。これがあればどの様な飛行も可能だろう。

それに付随して、数えきれない技術が見え隠れする。その中で今まで知る由もなかった自分の使い方を見た。もう、感嘆するしかない。彼女は天才だ。いや、彼女の宿主、恭介の母が天才なのだ。

これで、知識は揃った。そう銀星が検索を終了しようとした時、思考がぶれ、銀星の精神が干渉を受ける。真つ暗な世界に突如浮かぶ写真の様な映像。その映像が高速で流れ出し、彼に見せるは彼女の記憶。まさかこれは、彼女の仕業なのだろうか。いや、こんな事などできるはずがない。主導権は宿主を持つ自分が握っているのだ。ありえない。そう拒絶しても、それは決して止まらなかった。

瑞穂は、最初のスターライトで宿主となった。その事でW・S・T ARに入る事となる。その時、年齢十六歳。今から逆算して、二年前。恋に焦がれる年代だ。その瑞穂が当時研究員であった道三

と恋に落ち、三年後結婚。翌年恭介が誕生する。そして、さらに六年後、二度目のスターライトが発生した。思えばそれがカウントダウンの始まりだったのかもしれない。

α《アルファ》回収の段階からA A Aの実績を残し、知識、経験とも豊富な瑞穂は、暴走する感情を次々と回収していった。素早い対応と的確な判断。空を舞って放つ拳が必殺技。華麗で強靱なその姿を皮肉って“銀腕の魔女”と異名すら語られるほどだった。しかし、魔女の快進撃もある相手によって遮られる。

十一年前のあの日、夜空に星が輝きだしたその頃、今までとは違う金色の魔物が現れたのだ。勝負は五分。互いに攻めあぐねる硬直状態の中、一人の幼女がその戦いに紛れ込んできた。そう、道三や恭介たちとキャンプに来ていた中の幼女だった。

その幼女を守りながら瑞穂は戦った。そして、ある一瞬の隙を突き、金色に輝く魔物の宿主を必殺技が打ち抜いた。宿主が気を失えば、相手は必ず沈黙する。これで瑞穂の勝ちだった。それが今までの相手であつたならば……

勝利を見た魔女は、油断していた。まさかまだ動けるとは思ってもみない。だがそれが、瑞穂の、恭介の母親の本当の命取りになった。

数時間後。道三が駆け付けた時には、もう、無残な姿だった。宿主の血で赤黒く変色した右腕だけがその原型を留めていたにすぎない。そして、その傍らには幼女を新たな宿主にした金色の魔物が月影に照らされ静かに佇んでいた。

その魔物が、今はβ《ベータ》と称され本部の地下で隔離されている。

脈動する銀星の思考。

『見つけた』

この地球に^{ほし}来た目的が、目指す先にいる。消さなければならぬ存在。一族の汚点。それが恭介の母の仇。これは運命か。人生を共

にすると決めた宿主と目指す相手が同じだという。

——銀星……お願い——

——心配はいらない。例えどんな手を使つたとしても——

「銀星！ おいこら銀星！！ 何か言えよっ！ このままじゃ……」

恭介の目に海面が迫っていた。暗く波を湛える太平洋。月影が微かに雲間から差し込み、反射して揺れる輝きが、さらに恐怖を引き立てる。だが、もうそれを防ぐ術はない。

「くそつたれがあ！」

眼前に両腕をクロスさせ想像を絶する衝撃に耐えようとする恭介。これで耐えられるなんて思っていない。しかし、何も抵抗せずに終わる事はしたくない。その思いが、恭介の体を垂直へと導く。一点突破。それが唯一残された、いや、取る事ができる手段だ。

（南無三……）
なむさん

瞼と奥歯をギュツと噛み締める。と、同時。両腕があ感覚に包まれた。

『待たせた』

「遅え！！」

銀星の声が聞こえた瞬間、恭介の視界が闇に消え、水柱が夜空を突き上げた。

大量の海水を噴き上げた海に霧が舞う。歪に広がる同心円がその衝撃を物語っている様だ。そんな余韻を海風がなでる。だが押し流す事は出来なかった。徐々に盛り上がりを見せる海面が、まだ終了を告げていない。

瞬間。

銀色の嘴が水中から貫き海面を破裂させる。

水しぶきを巻き上げ飛び立つ巨大な鳥。薄い滑らかな翼を広げ、前方には必要以上に突き出した鋭い嘴。そして後方に、超ど級の噴出口が左右均等に並ぶ。その姿は、まるでナスカの地上絵で描かれ

るハチドリにも似た形態だった。

そのハチドリが、雲に塗れ^{まみ}月光を反射し、新たに得た翼は、その身の残像だけを連ね、再び空へと舞い上がった。

17 星に憑かれて

「ああ、わかった。そいつの身柄もこちらへ送れ。私が直接断罪する」

受話器を耳に当て、淡々と言葉を紡ぐ青年。歳は二十代後半と言ったところか。ブラウンの長髪をがちつとしたオールバックで固めている。襟元まで閉まる詰襟の白いスーツに身を包んだ細身の男性は、青い瞳を正面に移し、デスクを挟んで武装した四人の警備兵に跪かされる自分と同じ衣に身を包んだ白髪の老人と黒髪の男性を、乾いた視線で嘲笑った。その男の名は、ケビン・ウエストサイド。W・STAR最高責任者にして、世界技術の頂点に立つ者。

間接照明によってベージュ色に染まる壁が、全面大理石である事を示す黒い斑点で、反転した夜空の様に、その空間を隔離していた。そんな部屋の空気は冷気を運び、湿った喉が冷やりと心地よい。そう感じながら、最後の言葉を紡いだ。そして、銀色に輝くデスクに受話器を置くと少し目を細める。

「中川統括。三元日本支部長。君たちの部下は実に優秀だ。だが、あの代理は少々間が抜けた大木だったようだな」

薄い唇から彼の母国語が流暢な発音で流れ出す。言葉の意味はわからずとも、名前の発音記号は変わらない。意識せずとも皺が寄る統括は、現状を一番理解するために、打破するために、百戦錬磨の頭脳を酷使していた。

ケビンが何を聞き出したいのか、二人に見当はつく。それに言葉の意味もわかる。先の言葉もその前口上でしかないだろう。それを、どう捉えるか。考えたところで結末は……いや、結論は変わらないだろう。“否”だ。それだけの覚悟を持って統括は本部にやってきた。支部長も同じ意志を持つ。

北内には悪いが、“バカンス”の全容を話していなかった。自分たちの、いや、自分の目的。例えば真実を告げていたとしても彼なら

ば同志であつたと思う。が、命を賭けるにはまだ、惜しい人材だ。自分が消えた未来を担ってもらわなければならない。まだ、彼がここに連れてこられる事は想定^{はんてい}の範疇^{はんしゅう}だ。問題はない。もし最悪の事態が降り掛かるうとも、支部長がいれば自力脱出が可能だろう。彼にはそれだけの能力^{ちから}がある。ならば、今のこの状態でできる事と言えば、処分される前に一言二言皮肉を飛ばすくらいだ。

そう、鼻を鳴らした統括が、隣で同じ姿に固定されている中肉中背で自分より年齢が二周り下の親友に言葉を向ける。

「なんて言つてんだあ？ ああ腹黒ボンボンは？」

「北内が捕まつた。こちらに連れて来るらしい」

「あんのボケエ。悠長^{じゆうちやう}に風呂なんかはいつとるからじゃ」

統括の言葉に支部長の眉がピクリと反応した。支部長は今年六十。未だ衰えを知らない知識と肉体が、彼をまだ四十代にも見せる。だが隣にいる統括はどうだ、全ての髪が白く少なくなり、彫りの深い皺が、若い頃の面影を消してしまっている。変わらないのは瞳の力だけだ。知り合つたのは大学の研究室。それからずっと彼を見て来たが、悪戯の延長——知略謀略ばかりに長けるだけで、計画となれば全くその真意を見せようとはしない。知れば自分が傷つくとも思っているのだろうか。いつも雲のようで、本音を語らない。それ故に、この親友がどのような人間だという事は嫌というほど思い知らされた。

「どうしてその事を知つてる？」

低音で鋭く返される言葉。顔は正面を向かされているというのに、その視線が突き刺さる錯覚に襲われた。支部長は統括の事を敬いはいしない。いや、誰も敬いはいしない。それは親友となる前からの事だった。不満があれば漏れだすその威圧感たるものや、誰もその上を行く事が出来ない。親友となつてからは統括に対するその行為に遠慮がなくなり、魔力がこもっている様にも感じる。北内はこの威圧感を前にして、よくあんな事を言えたもんだと、一瞬その場面が統括の脳裏を過つた。だが、自分はこういつた空気に慣れていない。

いや、慣れてはいるが耐えられない。それに……もう隠す事はない。う、ちいとな、話す機会があつたもんで……」

弱々しく零れ出た言葉に、支部長の溜め息が漏れた。

「またお前は勝手に。直接の連絡は無しだと最初に決めただろう」

「なんじゃあ。お前こそ一人で勝手に出歩きおつてからに。どれだけわしが心配したか」

「お前が先にどこかへ消えたんだろ。心配したのはこちらの方だ」

「そうだったかの。最近ボケが進んで覚えとらんわ」

「お前のせいで、北内が捕まった。いったいどうするつもりだ」

「さあ。わしゃ知らん」

「この無責任男が。今の状況がどんな状況か少しは理解しろ」

自分たちが置かれている立場を理解していない。いや、わかつていながら囀り続ける二人の日本人に、ケ빈は奥歯をギリと鳴らした。

「黙らせる」

指示に従い、警備兵が二人の首根を鷲掴みに、床へと叩きつけた。ゴツと鈍い音が聞こえる。だが、老人の口は止まらない。

「日本語で話せボケエ。わしゃ英語は知らん。あいきゃんのつと、すぴいく、いんぐりつしゅじゃ！」

「もう一度だ」

再び鈍い音がする。しかし……

「七光りで上なんか立ちおつてからに。躍らされとる事にも気付かんか？ この、クソボン！」

「もう一度」

叩きつけられた統括の額に血が滲み出す。

「ボケ、カス。ダアホ！ プライドだけで飯を食つとる貴様が滑稽じゃ。お乳は美味いか？ 高みの見物なんぞしとらんで、さつさと舞台上が上がって来んかい」

「もう一度」と声を出そうとしたが、この老人はきつと、命が絶た

れるまでその口を止めないだろう。そうケ빈は出しかけた言葉を呑み込み、作った無表情を崩さず、相手が望む舞台に上がり込んだ。「口が減らないお年寄りだ。スラングが強く、理解しかねるな。統括であるなら綺麗な言葉を使ったらどうだ」

統括は誘いに乗って日本語を話し出した青年に、口角を吊り上げ悪態をつく。

「使えとつたら、こんなところには来とらんわ」

「しかし、少しは敬った言葉を選ぶべきだろう。あなたの命を握っているのはこの私だ……」

そこまで言くと、言葉が変わる。碧い目が細くなった。

「さあ、こちらの舞台に上がりたまえ。古く野蛮な日本人よ」

自信に満ちた笑みがケ빈に浮かぶ。だが、二人にとって効果は薄い。それが逆に、統括の口を走らせ。支部長の瞳に炎を灯す。

「何度も言うところだが、わしゃ英語がわからんのじゃ！」

「よく、その口で言う。父と話す姿を私が知らないとも思っているのか。その様な時間稼ぎは見苦しい。さあ、話せ。お前たちの目的は何だ！？」

「言わん」

沈黙が続いていた支部長が口を一言開いた。それが意外と、統括が笑う。

「やるのう。三元」

「あなたの方が、冷静だと感じていたのだが、どうやら感情的だったようだ」

目を細めククと笑うケ빈に三元は怒りを含む切れ長の目を向けた。瞬間、目に見えない槍がケ빈の体突き抜ける。力強い瞳。そこから放たれる威圧感。ケ빈の顔から余裕を消した。いまだ解明できない科学を是とした能力。それを内心噛み締めると、引きつる頬が皺を作る。

「魔女の父は、魔法が使えるようだ…… 実に有能でしたね彼女は。組織のために戦い、その生涯を終える。しかし、β《ベータ》に殺

されては、やはり無能か」

咄嗟に口を突く言葉。それは、傷つけられたプライドの復讐。怯えに対する自己顕示だ。手にしたヒエラルキーが作り出したものと言ひ換えても過分ではないだろう。だが、それに対して父の瞳は憎しみ色に染まる。抑えられない感情が暴走した。

「殺す」

支部長の中で閉じられていた門の門かんぬきが外れる。だが、平均的な体軀を押さえつける屈強な警備兵によって、その動きは制限されているのだ。大きな行動など起こせるはずがない。はずだった。

「よせ！ 三元」

統括の制止の言葉などもう彼には届かない。瞬間、空間が爆発した。一瞬にして警備兵が吹き飛ぶ。勢い良く壁に叩きつけられた二人の大人は壁沿いにずり落ちるとその動きを止めた。それに素早く反応した残りの警備兵が支部長を、三元正勝を組み伏せにかかるが、同様に弾き飛ばされる。人の常識を遥かに超越した打撃が数瞬にして四人の男を黙らせたのだ。特殊な機械ちからなど使用していない。人に内在する力を、百パーセント使用しただけに過ぎないのだ。人間の力というものは無意識の内にセーブされている。それを、この人間は自由に解放できる。それに、組織で独自の研究成果である“チャクラ気”を使いこなし武の頂点を極めた者でもあった。

迷わず正勝はケビンを目指す。その速さ、尋常ではない。一瞬にして間合いが詰まる。デスクを飛び越え、ケビンが浮かべる余裕の笑みに怒りの拳を振り上げた。

と同時。見えない壁がその行為を遮った。透明な空間に波紋が広がる。空中で静止させられた獣は怒りの牙を剥き青年を睨む。しかし、それを見返した青い瞳は優越感に満たされ波がたゆたい、快感が背筋を走る。

「やはり、魔法使い。だが、科学の前では微々たる力」

「餓鬼が！」

吐き捨てる言葉に憎しみがこもる。だが、それは相手を喜ばせる

だけだ。

「あなたがいる限り力技は無理でしたのでね。まんまと罠にかかってくださり、感謝の極みでございます」

ニヤリと覗かせた性悪な八重歯が、全ての言葉を包括していた。

「馬鹿もんが……」

統括からは余裕が消える。手札のAが奪^{エース}われた。計画が、目的が、白紙になった。いや、それごと破れ去られた。再び母国の土が踏めないだけでなく、目的すら果たせず消えるかもしれない。

応援で呼んだ警備兵が裏切り者を連れ部屋を出ていく。もちろんあの獣には同様の措置が施されている。最近開発された防護フィールド。γ《ガンマ》の宿主を使った実験によって強度は保障されていたが、敵となりうる最高の力に対しての実験は行われていなかった。まさかこの様な形で達成されるとは思ってもみず、完璧な力を確信したケビンの内から歓喜が声となって溢れ出した。

「時代遅れの力にいつまでも固執するからいけない」

部屋中に響き渡る感情の嵐。その中、ケビンの背後——照明の届かない暗闇の中から一人の騎士がその姿を現す。

「結局俺の出番はなかったな」

そう言葉を零す銀色の騎士。全身を西洋の甲冑に似た鎧で身を包み、特徴的な一本角を突き出す兜によって、その顔は見る事が出来ない。だが、声や口調から、それが男性だという事だけは判断できる。

「当然だ。γ《ガンマ》の力を越えるものなど、この世に存在しない」

その声を聞き騎士の鎧が音を立てた。彼の言葉は矛盾していない。ただ、言葉が飛躍しているだけだ。が……

「ならば、試してみるか。今度は全力だ」

低く絞り出された言葉に、ケビンは背筋が凍るのを感じる。

「必要ない。もう敵はいなくなったのだ。今はまだ必要ない」

破壊されるとは思っていない。だが、可能性が否定できなかった。そんな笑みを浮かべたケビンに、騎士は握り込んだ拳を解く^{ほど}。

「まあ良い。その時は砕いてやる。この拳でな」

そして、突き出すように握り込んだ。

その時だった。警報が鳴り響き、デスクに備え付けられたホログラフ投影型の通信モニターが起動する。中空に四角く画面が照らし出され、その中に映った金髪碧眼の女性オペレーターが現状を報告する。

総監。所属不明機が高速で接近中です

「迎撃しろ。その権限は我々にある」

ですが……

「どうした」

あまりにも高速すぎ、予定空域での対応が間に合いません

「何だと」

間に合わないとはどういう事だ。ケビンの頭に疑問が浮かぶ。本部と連携する基地には高性能対空索敵レーダーが配備されているはずだ。最大半径三百海里（約五百五十キロメートル）のレーダーで捕えて間に合わないとは考えられない。

「緊急発進だ。空域の問題など何とでも説明してやる。最新鋭無人^{グリフ}戦闘機^{オン}をだせ。撃ち落とせ！」

了解

そう言っただけで通信は切断される。いったい何が近づいて来ているというのだ。記録を遡ってみても、該当する科学^{もの}が見当たらない。行き過ぎた科学力。まさかとケビンにある考えが過った瞬間、騎士の口が動いた。

「Y《ガンマ》だ」

18 破壊の彗星

月影に照らされながらハチドリは飛ぶ。無尽蔵に加速されていく速度。いったいどれほどの壁を越えたか。高度七万二千フィート上空に煌めく銀色の槍は衝撃波を放ちながら、六枚目の壁を貫いていた。そして、仰角を下げ目的地に向けてその嘴を向ける。

二人の目的が重なる場所——それはアメリカ合衆国、ネバダ州、リンカーン郡に存在する“エリア51”と呼ばれ、表面上はある種の噂が絶えないアメリカ空軍基地だ。その地下にW・STARの本部は存在していた。

分厚い積乱雲を蹴散らし、槍は目指す。山脈や込み合った丘の間に形成され、乾燥が生み出したアルカリ性塩湖。真つ白な世界が生み出す幻想的な荒野を。

そんな中銀星は警戒する。間違いなく本部では宿主が存在するはずだ。少なくともあのβ《ベータ》が。営利を目的としているならば抵抗を受ける。軍隊も配備しているならそれも出てくる。どうするか……関係のない者には悪いがこの衝撃波を持って薙ぎ払うしかなさそうだ。

その時、不自然に並ぶ無機質な飛行物体が視界に飛び込んでくる。やはり来た。予想通りだ。編隊を組み飛行する戦闘機部隊。だが、その速度は止まっているかの様に見える。ありえない相対速度を体験した事がない機械相手に、こちらに気が付いているかも疑問が浮かぶ。しかし、それに構っている余裕は銀星にはなかった。何も言わず、その中心を擦り抜けると遅れてやってきた衝撃波が容赦なくその編隊を爆砕した。のも束の間。月の光で輝く塩湖から次々と戦闘機が飛び立つ姿が確認できる。それに合わせて地対空ミサイルが放たれた。通常ならば考えられない波状攻撃だが、W・STARの技術を搭載されたグリフォンと称される無人戦闘機とミサイルは意識が共有されており、同志討ちを回避する事に成功したのだ。故に

こういった無謀な策が成立する。

だが、無数に舞い上がる力の粒は銀の槍と擦れ違った瞬間、爆発し塵となって降り注ぐ。閃光と黒煙の帯を引き、ついにハチドリは目的地に到達する。が、着陸はしない。圧倒的な力を見せつけ恐怖に駆られた人々を逃がす時間が必要だ。人を殺す事を宿主は——恭介は望まないはずだから。

衝撃波で、基地の建造物をえぐる。絶妙にコントロールされたその衝撃は、まず天井部分を削り取る。そして、空中で旋回をしながら、生体反応を確認した。この力も初代銀星から引き継いだ知識だ。ちから三次元に展開された基地全容が脳裏に浮かぶ。照らし合わせてみれば、地上に生命は存在しない。科学技術に守られた城が、この基地の正体だった。

これならば遠慮はいらないと、さらに深く衝撃波で建造物を薙ぎ払う。戦闘機や他の機関に使用するはずだった燃料に引火し、そこから中で爆炎が噴き上る。

爆音が轟く空間で、月の白が、影の黒が、炎の赤が、見下ろす銀星を斑色に染め上げた。

各種モニターが並ぶコントロールルームでオペレーターたちの絶叫が響く。

「グリフォン全滅。地表部分完全に沈黙。外部カメラ損壊。モニターできません！」

「映像を衛星に切り替える。少しでも情報を集めるんだ！」

「相手はこの化け物か。どの国が攻めて来たとしても殲滅できる火器だったはずだぞ！」

「いったい何が目的だ。今日はあり得ない事ばかり起こりやがる！」
「衛星画像繋がりました。出ます！」

分割されていた中型モニターの枠を取り払い、合成された超大型モニターに映像が映し出された瞬間、その場にいた全員が沈黙し息

を呑む。

上空からの映像だが地上の悲惨さが良く分かった。基地が赤く燃えている。夜の闇を、赤く染め上げていた。交代勤務を終えて帰る際、航空機から見下ろすいつもは荘厳で力強い砦の姿は微塵も残っていない。瓦礫が積み重なる廃墟が、以前の姿を思い出させるだけだ。例えば戦争で絨毯爆撃を受けてもこの様にはならないだろう。確かそういった事も考慮して再建されたはずだった。はずだったのに、それは意味がなかった事だとこの場にいる全員が思い知らされた。

「悪魔……」

一人の男性の震える唇からその言葉が漏れると、抑えきれない恐怖が同室に派生していく。人とは弱い動物だ。信じたモノが打ち砕かれれば、そこに広がる絶望と恐怖に支配される。それを与えた相手が、認識できず理解できなければ、それは無尽蔵に増幅され生きる希望を失うか、自我を失う。

ここにいる人間もその通りだった。ある者は奇声を上げて逃げ惑い。ある者は力なくへたり込み光を失った瞳でモニターを見つめるだけだった。

同時——同じ画像を映し出すモニターを前に、ケ빈はデスクを激しく叩く。馬鹿な。科学の粋を集め計算しつくされた迎撃システムがたった一機の、いや、二つの生命に打ち砕かれたのだ。まさかの真実。それを受け入れられるほどケ빈は人生を達観していないし、悟ってもない。誰にも見せない歪んだ眉が、その憎しみを露わにしていた。

「プライド崩壊か？」

そう背後で笑う騎士が憎らしい。その顔は見えない。だが、その顔が自分を見下している事だけはわかる。気に入らない。表情の作り替えなど忘れて、肩越しに騎士を睨んだ。

「早くお前も迎撃に行け。でなければ、あの約束は反故だ」

その言葉に騎士の鎧が拳を作り出す。このまま頭を打ち抜いてやるのか。だが、それはできない。大切なものを守るため、必要な知識^{から}を得るため、それはできなかった。騎士は強がりを持って鼻を鳴らす。

「俺がやらなきゃ、全滅だ。言われなくてもやってやる。そこで指くわえて待つてろよ。俺の力を見せてやる。お前は、γ《ガンマ》が最高の力だと認識すれば良い」

そう言い残し、高笑いを響かせながら、ケビンの部屋を後にする。その姿を視線だけで辿ったケビンは、内臓が煮え滾る思いだ。抑えきれなくなったその怒りをもう一度デスクに向けて叩きつける。

どういつもこいつも日本人は、自分の事を馬鹿にしがやる。俺が一番だ。誰も届かない頂上に君臨しているのだ。技術の粋を詰め込んだ基地がなんだ。まだ俺には、最後の力がある。γ《ガンマ》やそれと同様のα《アルファ》を持ってしても倒す事の出来なかったβ《ベータ》が。世界一の力。宇宙一の力を持っているのだ。見せてやる。見せつけてやる。誰がこの世界の王で、誰がこの世界で一番なのかという事を。

不敵に歪む口角が狂気に満たされていく。気が付けばケビンは、自分の部屋を出た。目指す先は、この基地の最下層。照明が連なる無機質な長い廊下を抜け、専用のエレベーターに乗る。指紋・音声・角膜・静脈。全ての認証に加え、十三桁の文字数列を打ち込めば、静かにその籠が動き出す。深く、深く、人が人を殺す、真理とも呼べる感情を抱いて。

19 巡り会う星 ユニコーンとオーガ

「えらく派手にやったもんだな。銀星」

基地の中心。元々開けた場所に降り立ったハチドリは、その姿を最強の鎚へと変えていた。惨状を見渡しながら、恭介は目を細める。遠くで未だ吹き上がる火柱。基礎を残して吹き飛ばされた建造物。撒き散らされた何かの残骸。これで、死傷者がいないというのは奇跡としか思えない状況に、溜め息が漏れる。

『必要最小限だ。これで戦意を喪失してくれば、人とは戦わなくて済む』

「喪失してくれたらな……」

『多くの者は失ってくれた様だが、やはり、同族に対しては効果が薄かったようだな』

銀星が感じる同族の気配。遠ざかる事なく近づいてくる。間違いなく、敵となるだろう。だが、それにしてもおかしい。ここにはβ《ベータ》が隔離されているはずだ。だが、それに関する反応を何も感じない。情報が間違っていたという事なのだろうか。疑問が浮かぶ。しかし、暇を与えない同族の反応が銀星を貫く。

『また派手にやってくれたな』

銀星を通じ、恭介にも流れ出す言葉。頭の中に反響する声は銀星より少し低かった。

「どうした？ 銀星」

戸惑う恭介に、銀星は言葉を紡ぐ。

『精神間通信。同族間だけにおける無線通信だ。これは元々、我々の技術ではない。君の母が発案した技術の一つ。相手は間違いなくW・STARの宿主だろう』

「敵か？」

『ああ、間違いない。敵意が混じっていた。方向は二時。そろそろ肉眼で確認できるはずだ』

恭介が銀星の示す方向に目を凝らす。立ち上がる火の陽炎の向こうで、徐々に大きくなる人影が見えた。あれが、宿主。姫が囚われる魔王城の門番だ。その門番が、膝を屈め何かを拾う仕草が見て取れる。すると、拾った右手が膨張した。スラリと伸びた右腕のシルエット。それが、こちらに向けられたと思った瞬間、あの声が響く。『さあて、まずは挨拶だ』

同時、陽炎が破裂し、その中心から砲弾が襲いかかる。銀星が反応するより、恭介の動きが早い。右手で砲弾を掴み取ると、見せつけるように握りつぶす。粉々に砕け散った砲弾が元はコンクリート製だったと言いつ残し、上昇気流で舞い上がった。

「やってくれるじゃねえか」

そう独り言つ恭介の先には、一瞬だけ姿を見せた銀色の騎士が右腕を砲台とし狙撃した事が認められた。その事で銀星は相手の実力を知る。再び揺らぐ陽炎の向こう。そこには全身を防護した相手がいる。その事だけを見て取れば、この舞台を作り上げたのは不利だった。恭介には生身の部分が多すぎる。

『恭介、力を望め。全身に纏う強固な鎧を想像するんだ』

「あん？ 何でだ？ このままでも戦えるだろう」

『君は炎で身を焼かれないのか』

相手は『《ガンマ》』で身を包み、炎の中を更に歩み寄る。その姿を見据えた恭介は、銀星の思いに応えた。

「力をくれ銀星。俺が望む鎧を」

『任せておけ』

言葉が流れ出す。最強の鎧が一回り小さくなった。代わりに左腕にも同じ鎧が、胸と背中を引き締まった筋肉様のディテールで包み、下半身を鋭角なうろこ状の脚絆きゃはんで覆う。そして、闘争心を表現した面兜が力強い二本角を突き出し、全てが銀星で包まれた。まるで、鬼人きじんを思わせる姿。これが、恭介の思い描いた鎧だ。

確認するように、両拳を握り込む。違和感はない。銀星が顔面全てを覆っているというのに、視界も変わらない。ハチドリであった

ころから感じていた。いや、牡鹿との戦闘でも感じた事だ。自分は、銀星を通じて世界を見る事が出来る。それが、確信に変わったただけだった。

『油断するな。来るぞ！』

銀星の警報が鳴る。それに素早く反応した恭介はその視線で、再び弾ける陽炎を見た。しかし、今回は砲弾ではない。一角を突き出し、迫りくる銀色の騎士がその間合いを人間離れたスピードで詰める。その右拳が固く握られているのが見えた。

それに合わせて恭介は必殺の右拳を装填する。小細工なし。拳と拳のぶつかり合いだ。

「銀星え……」

「リジエクト……」

『逃げる恭介！』

騎士の声が聞こえた。その意味を理解した銀星が声を上げるが、瞬間。間合いが交錯し、互いの声が爆発した。

「スターライトオー……」

「ナックルウー……」

互いの拳が拳を捉える。押し出された風圧が周囲の炎を退かせた。互いの足が地面のアスファルトを踏み抜く。硬直する時間。一見互角に見えるそのやり取りは、数瞬の後、結果を見せた。恭介の腕が悲鳴を上げる。拳が碎ける音がした。そして、その残響を残し、陽炎の中へと弾き飛ばされる。

「がぁぁぁぁ！」

重力に引かれながらもほぼ水平に回転しながら飛ぶ恭介。地面に触れた瞬間、糸の切れた人形のように跳ね、地面を転がる。激痛が走った。右腕が、全身が熱い。仰向けに見上げた夜空が、遠く見えた。『恭介。すぐに治してやる』

銀星の言葉が遠くで聞こえる。その瞬間、右腕の痛みが遠のいた。銀星にはある力も備わっていた。それは、宿主の傷を癒す能力だ。自己再生といった自然治癒力を高めたモノでもあるが、それだけで

は説明できない治療も可能としている。以前一色に貫かれた腕もこの能力によって治療、完治していたのだ。

「何でだ銀星。何で、俺の拳が通用しない？」

零れ出た恭介の疑問。弱々しい言葉に銀星は無言で治療を続ける。銀星の取ってその答えは簡単すぎた。技術の違いだ。もし、先代の記憶を受け継いでいなかったら、簡単にこの答えは返す事ができなかっただろう。

宿主同士の戦いを想定した技術。それが使用されたのだ。全てにおいて彼女は用意周到だった。最強の鉾ほこであり最強の盾である力を持った宿主同士の戦いとは、即ち盾の削り合いにある。全身を盾で覆った相手をいくら攻撃したところで、それは無効なのだ。ならば、盾を排斥し生身の部分へ衝撃を与えなければならぬ。それを可能にする能力。それは、強制分離と呼ばれる技術だ。恭介は一度、一色相手にそれを成しているが、攻撃と合わせて強制分離など、宿主の技術が違う。圧倒的に恭介には経験が足りなかった。焦りが生んだ結果。後悔しても、しきれない。

そこで、治療が完了する。粉碎された骨を、破断した筋肉を、弾けた血管を全て繋いだ。神経も問題ない。これで動けるはずだ。

「恭介。動けるか？」

「動ける。痛みもねえ。だけど銀星。あいつに勝つにはどうすれば良いんだ」

その言葉が恭介の口をついた時、返答の様に聞こえてきた騎士の声。

『まだこれからだぜ、眠るにはさ……』

恭介の背筋に悪寒が走る。目の前の陽炎からあの騎士が拳を振り上げ、姿を見せた。

「早い！」

肉声と共に振り下ろされる騎士の拳。言葉には出していないが、間違いなく“リジェクトナックル”。考えたところで、防ぐ術などありはしなかった。

咄嗟に構えた恭介だったが、顔面を防ぐためにクロスさせた両腕を避け、その拳が腹部へ突き刺さると、背にしていたアスファルトが同心円に陥没する。

内臓が弾けた。肝臓が、腸が夥しい血液を体内で放出した。激痛と共に逆流する血液、声にならない空気が押し出され、赤い声が噴き出す。

にもかかわらず、恭介は右拳を握り締めた。繰り出す拳は、弱々しい。全身を『ガンマ』で纏う者ならば、よけるに値しない攻撃だ。だが、騎士は飛び去るように距離を取ると、声を送る。

『なかなかタフじゃねえか。さすが、その二本角は伊達じゃねえな。ユニコーンの宿敵、オーガ。だが、物語じゃ、お前は俺に殺されるんだ。裏切り者オーガ!』

騎士の声の頭の中で響く。その中銀星は治療にあたっていた。もうすぐ完治する。だが、恭介は言葉の意味を噛み締める。聞き覚えのある名前だ。記憶を遡ればそれは深いところで見つかった。同年代ならば皆知っている特撮ヒーローの名前。幼稚園の頃、日本で最高の人気を誇った。正義の戦士ユニコーンとオーガ。その二人が悪の秘密結社メフィスタンを壊滅に導く話だ。番組開始当初、ヒーローの人気は二分される。白夜騎士ユニコーンか、紅蓮闘士オーガか。しかし、途中ヒロインがメフィスタンの人質となり、オーガは彼女を守るため、ユニコーンと戦い、その命を落とす。幼い子には残酷で、斬新なストーリーだった。勧善懲悪ではなく、心を描かれたストーリー。その後、周囲でオーガは敵役だったと言われるようになった。

もちろんその人気に、恭介含む幼馴染三人は“ゴツコ”と名をつけ、それぞれを演じ遊んだのだ。恭介は、オーガ派だった。勝昭はユニコーン派。真奈美は何も言わずヒロイン役を選んでいた。それを思い出し、まさかという思いが、恭介の脳裏に過る。

20 勝昭の星

それは、偶然だったのかもしれない。あの日——恭介の頭突きで意識を失ったあの日だ。勝昭の世界が変わった。天を劈く光の中で不思議な声を聞いたのだ。

『力が欲しいか？』

突然だったが迷う事はない。欲しいと答えた。それが、全ての始まりだったのだ。

どうして、その様な事を望んだのか、考えれば簡単だった。恭介に勝ちたい。ただそれ一心に紡がれた気持ち。それが、勝昭の生きる目的だった。不良へと堕ちたのも、悪い事をし続けたのも、髪を金色に染め上げたのも、自己顕示——誰よりも、恭介よりも目立つためだった。

コンプレックスとは、誰もが持ち得る劣等感。隣の芝生は良く見える。そういった意識の塊が勝昭だった。

幼い頃に知り合った三人の人間。その中の恭介は、勝昭にとって特別な存在だった。何事においても、自分より優れ、人当たりも良い。優等生を絵に描いた性格をしていた。幼稚園でも人気者。彼が声をかければすぐにグループが出来上がり、その中心に彼がいたのだ。最初の内はその中にいる、その他大勢でも良いと思っていた。楽しかったのだから。でも、それでは彼女は、自分の事を見てくれないと思った。そう、恭介と同時期に知り合った南条真奈美がだ。

勝昭は、彼女に特別な存在だと見て欲しかった。あの大きな焦げ茶色の瞳。いつも両サイドを黄色のリボンで纏めた黒い長髪。笑うと向日葵ひまわりのようで、周りの人を温かくしてくれた。その彼女の事が好きになった。明るい性格も好きだ。恭介と比べる事なく接してくれる優しい性格も好きだ。何もかも全てが大好きだった。

彼女に喜んでもらうために、トレードマークのリボンを新しく作

りプレゼントした事もあった。それを彼女が、笑顔で黒髪に結ぶ姿が、今も記憶の中で色褪いろあせない。

三人で遊ぶ時は、いつも“幻獣伝説ユニコーンゴツコ”だ。恭介が紅蓮闘士オーガ。勝昭が白夜騎士ユニコーン。そして、真奈美がヒロイン役である、緑川真波。みどりかわまなみテレビで見た次の日には、そのストーリーを再現して遊んでいた。

あの日までは……

十一年前のあの日。いや、覚えている。七月七日。七夕の日だ。

その日、勝昭と恭介と真奈美を含め、その家族みんなで、少し早目のキャンプが行われた。キャンプと言いながらも、近場の裏山で天体観測が目的だ。細かい星々が集まって彩る天の川を見ようと恭介が言いだした。彼の父親は、大学で天文学を教えている教授だと自信満々に言っていた恭介の顔が思い出される。

キャンプは昼からだった。バーベキューで始まったのだ。その後三人は、昨日見たユニコーンを思い出しゴツコを始める。

前日のストーリーは衝撃的だった。味方であつたはずのオーガが敵に寝返り、ユニコーンを殺そうとするのだ。信じていた仲間に裏切られるというのは、絶望でしかない。それを幼いながらに感じ取った勝昭は、ゴツコにも熱が入ってしまった。

——何で裏切ったんだ！？ オーガ！——

——真奈美が、好きだからだ——

テレビ通りのやり取りだった。しかし、オーガの言葉が現実と重なり、嫉妬心が込み上げてくる。真奈美の事を好きなのは自分だ、恭介なんかに渡すものかと。そこからは、手加減なしの殴り合いだった。原因は勝昭にあつたのか、恭介にあつたのか、それはこの際、関係なかった。先に手を出したのは勝昭。

幼い二人の殴り合いだ。怪我など知れている。しかし、それを目の当たりにした真奈美は、泣きながら二人の間に割って入った。

——もうやめてよ！ カツちゃん。キョウちゃん——

悲痛な叫びに、恭介は手を止める。しかし、勝昭の気持ちは収まらなかった。嫉妬心と独占欲が彼を止めなかった。そんな勝昭に……ペチン。

小さい音を立て、真奈美が平手を打つ。それで勝昭は我に返った。いつの間にか組み伏せていた恭介の強い眼差しが突き刺さる。唇を切っているのか、口から血を流していた。

現状がやっと理解できた時、もう一度、真奈美の小さな掌が勝昭の頬を叩く。

——カツちゃんなんて大嫌い——

初めての失恋だった。その後の事はあまり覚えていない。その後、恭介の母親と、真奈美が行方不明になった。三日三晩、警察や消防、消防団や自治会が搜索したが二人は見つからなかった。数日後、恭介の家で葬式があった。見つかつてはいないが、死んだという判断なのだろう。今思えばおかしい事だったのかもしれない。しかし、当時の勝昭にその判断はできなかった。数ヵ月後、何も言わず、真奈美の家族もどこかへ引越していった。

誰もいなくなった南条家を見つめ、勝昭は泣いた。泣いて、泣いて、泣き疲れた時、行き場所のない悲しみが、怒りに変わり恭介に向けられる。あいつが言い出さなければ、真奈美は死なずに済んだのに。あいつのせいだ。あいつが全て悪いんだ。

——あいつは、裏切り者のオーガなんだ——

その時からだ、恭介に必要な以上の執着を見せ、絡みだしたのは。

そして、銀色の力を手に入れた日に深夜の路地で声をかけられる。「ヒーローにならないか？」と。

それはW・STARの研究員だった。その言葉に応じた勝昭は、組織に入って様々な事を教えられる事となる。スターライトとは何か、α《アルファ》、そしてγ《ガンマ》について。宿主とはいったい何で、何ができるのか。全てを受け入れ呑み込んだ。するとどうだ、自分が正に幼いころゴツコで描いていたユニコーンそのものではないか。銀色の鎧に身を包み、悪の生物と格闘するヒーローだ。勝昭には戦士としての才能があった。メキメキと才能を開花させあつという間に最上級ランクになる。すると、本部においてその力を揮わないかと打診があった。戦う場所があるのなら、迷う事はない。答えはイエスだ。

勝昭は正義のヒーローユニコーンでなければならなかった。そうする事で、自分は恭介に勝っていると思えたからだ。あのオーガを倒した正義。それを守るため。

21 輝くは金の星

ケビンは嚴重に閉じられた銀色の扉を前に、映し出される自分の表情を確かめ、自嘲した。そこには、理想として描いていた自分の姿は存在しない。醜い感情に蝕まれて、歪に歪んだ顔があつた。プライドで生きてきた者の顔。それが、地に堕ちた神であるとケビンは嘲笑う。

誰よりも、自分の事は知っている。父から学んだ帝王学。その中にあつた精神学は、この上なく知的好奇心を満たす玩具だ。自らの感情を知り、他人の感情を知る。それを言葉で操つて、我が道を成してきた。あの日本人の爺どもは、自分の事を挿げ変えられた飾りだけの頭だと思つている事だろう。しかし、それは違う。

全てケビンの技術ちからによつて組み伏せてきた結果が、今の地位だ。手段は選ばなかつた。人には必ず弱みというものがある。金だつたり、異性だつたり、地位だつたり。つまりは欲だ。その部分を財力や情報網でかき集め、自分を押し上げる力とした。やつて見れば簡単だ。人の感情とは実に脆く、揺らぎ易い。欲に目が眩み、忠誠の尻尾をパタパタと振る。それが、他の者に恐怖として伝染し、ケビンは今の役職に就いたのだ。世界の頂点。技術の頂点。体裁は“世界の”と謳うたっているが、その気になれば、世界を征服する事ができる。ただそれをしなかつたのは、世界規模のモラルを守つていたからにすぎない。

彼にとつて、エゴを、プライドを傷つけられる行為は、何事にも代えがたい屈辱だ。今まで何の苦もなく生きてきた。望めば全てが手に入った。苦勞などない。故に、統括の言葉が気に入らない。支部長の存在が気に入らない。基地を破壊したY《ガンマ》も、凶星を突いたあの騎士も。全てが気に入らない。

神を侮辱すればどうなるか、力を持つて示さねばならない。神の雷。天罰を与えなければ。それを成す事が出来るのは、あの歴代最

強を誇る“銀腕の魔女”を消し去ったβ《ベータ》のみ。それを扱う事ができるのは、自分しかない。そう、ケビン「ウエストサイド」か。

「私が、神だ。私が最強だ……」

言葉が漏れる。いや、言い聞かせているのだ。この扉を開き、その力を手に入れるために。

最後の声紋認証を終えたセキュリティは、赤から、青へと、その発光色を変化させた。複雑に絡み合った門が、パズルを解く様に一本ずつ外れていく。そして、最後の一本が外された時、重厚な扉が、重い音を響かせながらゆっくりとその身を開放していった。

隙間から零れ出す。金色こんじきの光。徐々にその全貌が露わになる。最も恐ろしい力。β《ベータ》が。

逆防護フィールドが展開された先、数メートルの超硬化アクリルガラスの向こう側。そこには、一人の少女が蹲つづくまっていた。黄色いリボンと床まで広がった黒髪。そして、か細い肢体。それを防護するように広げられた六対十二枚の金色の羽根。暁の明星ルシフェルが、麻布の様に見える特殊素材で編み込まれたワンピースに包まれている。一見、巨大な繭にも見えるその姿を、ケビンは恍惚の表情で見つめた。美しきこの力こそ最強なのだと、笑みが零れる。

その時、人一人分もあるつかという一枚の羽根が動きを見せた。

瞬間、ケビンの頭の中に直接声が響きだす。

『どうした人間。新しい食事ちしきでも持ってきたのか』

中性的な声。その声によって紡がれた言葉には、感情がこもっていない。それに眉をひそめたケビンは、壁に埋め込まれているスピーカーマイクのスイッチを押した。

「新しい知識など、もうない。今回私は、今まで与えてきた知識の謝礼を受け取りに来た」

『謝礼だと』

室内に流れるマイク音声に反応し、翼がもう一枚開かれる。

「そつだ。今まで私は、お前に膨大な量の知識を与えた。それが契

約だったからな。しかし、今、その知識を与えた私の、私たちの組織が危機にさらされている」

『だから、どうしたというのだ。私には何も関係のない事』

「さらに知識が欲しいだろう。ならばその力、貸してはくれまいか。一部でも良い。私に寄生してはくれないか」

少しの沈黙の中、さらに二枚の羽根が展開される。

『そうすれば、更なる知識を与えてくれると言うのか』

「そうだ」

そうケビンが返すと、頭の中に天使の笑い声が響き渡った。最初はククと、噛み殺す様に。そして、次第のその声が大きくなり大音量の高笑いへと変わる。

『面白い』

その言葉を聞いて、ケビンは確信する。所詮、生物。欲には勝てないのだと。だが……

「やめてえー!!」

少女の肉声が聞こえた。その瞬間、腹部に激痛が走る。だが、それは刹那だけ。遅れて来た防衛本能が脳内麻薬を多量に生み出し、それを快楽へと昇華させた。しかし、現実是不変ならない。腹部にぽっかりと空いた穴。そこから血液が、臓器が、重力に引かれ零れ出す。生々しい音を立て、無機質な床を赤く染め上げていく。

いったい何が起こったのか。ケビンは理解できない。異変の元凶である腹部に手を当てると今までそこにあった壁が綺麗に取り払われ、背中まで貫通していた。それを理解した瞬間、膝の力が抜ける。ガクンとついた両膝。視線が下がると、誰がこれをやったか、理解できた。

丁度、目線の高さ。そこに腹部に空いた穴と同じ直径の円が見える。防護壁にと作られた強化アクリルガラス。そして防護フィールドが同じ様に貫かれていたのだ。部屋の中で怪しく揺れる金色の触手が、間違いなく凶器だろう。

『私が、飼われているとでも思ったか。小賢しい。需要と供給が成

されていたから、私はここに留まっていただけの事。新たな知識がないと言うなら、もうこの地球には要はない」

「う、そだ……」

『どうとも思うが良い。だが真実は、変わりはない』

それが最後の言葉だった。一瞬金色が煌めいたかと思えば、世界が闇に切り替わる。

「いやああああっ！！！」

少女の悲痛な叫びが、反響し合う中。金色の魔物は優雅にその羽根を全て広げ、力を宿す。何と脆弱な人間だ。軽く触ればその姿を崩す。だがそれ故に、知識という力を持ったのだらう。実に面白い生物だ。さて、最後に知識が集約するこの場所に訪れた危機というモノを見物に行こうか。もしそれが、私の新たな知識とならざるものであれば、お前の望み通り破壊してやろう。この地球諸共な。

そう、魔物は脳漿をぶちまけ痙攣を続ける、人間だったモノに精神波を送る。それが、戯事である認識は、人間を嘲笑するモノだった。

『さて、宿主よ。共に行こう。新たな大地へ』

体の状態を確認しながら立ち上がる恭介。問題はない。動ける。

だが、どうする。そう睨みつけた先でユニコーンが、ククと笑った。

『恭介、一時退却だ。このままではいずれ殺されてしまうぞ』

頭の中で銀星が撤退を促す。だが、それはできない。もしかすれ

ば、あの騎士は勝昭かもしれないのだ。いや、間違いなく勝昭だ。

客観的な根拠は少ない。だが、言葉では言い表せない感情がそうだ

と言っている。魂が、そう叫んでいるのだ。それに、勝昭相手なら

は逃げるわけにはいかない。例え死んだとしてもだ。その覚悟が、

恭介を突き動かす。

『寝言は寝て言え銀星。知ってるだろう。俺は逃げねえ』

『馬鹿なこだわりを持つな。死んでしまえば母の意志も、父の意志

も消えてなくなる。いったい誰が継ぐというのだ』

『なら、死なねえ。死なずに俺はあいつを倒す』

『子供の理屈だ恭介。力の差は歴然。どうやって倒すというのだ』

倒す事。それに対して、良い考えは思い浮かばない。だが、心中

で膨れ上がる、ユニコーンの正体。勝昭には大切な事を伝えなければ

ならない。自分がここに来ている真実を。ならば。

『確かめる』

『何を言ってる。馬鹿か君は』

そう言われる事はわかっていた。しかし、相手が勝昭ならば、例

え自分が死んだとしても意志は託せる。そうやって自分の弱さを嘲

笑った恭介は、仮面の下、吊り上げた口角で言葉を紡ぐ。

『ああ、馬鹿だ。尻拭い頼むぜ銀星』

そう言葉を言い残した恭介は、ユニコーンに向け駆けだした。そ

れを嘲笑うユニコーン。何度だろうが打ち砕く。スウと腰を落とし、

拳を握り締め、対宿主専用“リジエクトナックル”を装填した。

『リジエクト……』

声が聞こえた。その拳を見据える恭介。迷いが過らぬその信念は、一気に間合いに飛び込んだ。

「ナツクル！」

恭介の顔面めがけ強力な拳が繰り出される。今がそのタイミングだ。

「止める！ 勝昭！」

絶叫とも取れる恭介の声に、その拳の軌道が鈍る。間違いなかった。こいつは勝昭だ。その確信の下、更に一步踏み込む。かわし切れなかったリジエクトナツクルがオーガの仮面を左半分吹き飛ばす。その事で、恭介のまっすぐな瞳が露わになった。ユニコーンに映る自分の姿を睨みつけ、恭介は更に吠える。

「勝昭いいい！！！」

そのまま全力を持って押し倒す。マウントポジションで息を切らす恭介の口から、まだ乾き切らない血液が糸を引きつつ騎士の鎧を染めていく。それを見返した勝昭は、動けなかった。なぜ、恭介がここにいる。なぜ、ここまで俺の正義に盾突くんか。想定外の事に頭が混乱する勝昭。間髪入れず恭介は言葉を紡いだ。

「久しぶりだな、勝昭」

「恭介え」

二人の言葉が重なった。不敵な笑みを浮かべる恭介に、ユニコーンはその仮面を取り払う。短く切りそろえられた金色の短髪が以前と印象を違わせるが、その眼鼻立ちや輪郭は勝昭のそれそのものだ。「そうやって、すぐ挑発に乗ってくる。勝昭らしいな」

言葉を発する度に血液が垂れる。その恭介の言葉に勝昭は激昂した。

「なんだコラ！ ボコボコなくせに、偉そうな口きいてんじゃねえ！」

そう言いながら、繰り出された拳が恭介の腹部に突き刺さる。仮面の外から半分覗く恭介の顔が苦悶の表情に歪む。遅れてやってきた吐血が、更に鎧を染め上げた。だが、恭介は力一杯両足で勝昭を

挟み込み、動こうとはしない。

「わりいな。染みついたしゃべり方は、変えられそうもねえ」

「さっさと退け。恭介。いつまで乗ってやがんだ！」

もう一度突き刺さる拳。その痛みには耐えながら、恭介は言葉を繋ぐ。

「もうしばらくだ。お前に一つ、言っておかなきゃならねえ事がある。真奈美の事だ」

真奈美。その名前を聞いて勝昭の拳に力がこもる。今度は容赦なく脇腹を打つ。肋骨が砕ける音と共に、更に血飛沫ちしぶきが舞う。だが、恭介の口は止まらない。

「ま、真奈美は死んじゃいねえ。ここで生きてる」

次に逆を打とうと思っていた勝昭の拳が止まる。

「何言ってるやがる。真奈美は死んだんだ。お前のせいで真奈美は死んだ！」

そう言いながら一度止めた拳を、再度動かし脇腹を突く。

「いいか、勝昭。俺の目を見る。全て真実だ。ほんと真奈美はまだ生きている」

「ふざけんなあ！」

再び腹部を突いた拳が、恭介の返り血で赤く染まった。

「俺が一度でもお前に嘘ついた事があるか？ 生きてるんだ。ここにいるんだ。悲しんでんだ！ 助けを求めてんだよ！」

恭介の強い瞳が、勝昭を見据える。その視線に勝昭はつい目を逸らしてしまった。この視線が、苦手だ。全部俺が間違っていない。そう言っているこの強い目が、まともに見れない。憧れだった。ずっとこの目が憧れだった。だから、だから、真奈美は恭介をあの時庇ったのだ。魅力的なこの視線に、誰もが魅了されていたのだ。それが悔しい。それが羨ましい。それが妬ましかった。

「ユニコーン」

勝昭の声が漏れた瞬間、地面が爆砕される。小さなクレーターを生み出した爆発の中、勝昭は恭介を無理やり引き剥がす。そして、

右手で恭介の赤毛を掴み力一杯吊り上げた。もう膝に力が入らないのか、成されるがままの恭介が、まっすぐ勝昭を見下ろす。何の疑いもない瞳。あの時と全く同じだ。

『恭介。恭介。逃げろ！ 逃げるんだ！』

銀星の声がする。しかし、どうも力が入らない。さすがにやり過ぎたかと恭介は表情を緩める。

（無茶な事しちまったなあ……）

——キョウちゃん——

「リジェクト……」

『恭介え！』

「ナツクル！」

瞬間、勝昭の左拳が残りの仮面を打ち砕いた。

23 あの星の下

天の川を見上げながら、恭介は鼻水をすすった。勝昭とケンカしてからずっと言葉を交わしていない。今はきつと皆で、同じ様に星を眺めている事だろう。その場所にいるのが嫌で、こっそり抜け出した恭介は独りで空を見上げてみるが、涙で滲み上手く星が見えなかった。

「キョーウちゃん」

そんな時背後から真奈美の声がした。明るく響くその声を聞き間違えるはずがない。恭介は慌てて両目をこすると、できる限りの笑顔を作り振り返った。そこには、月明かりに照らされた真奈美の姿。トレードマークの黄色いリボンがふわりと二対、風になびいた。

「マ、マナミちゃん」

充血した瞳で見ると、少し寂しそうな表情にも見える。

「どうしたの？ せつかくみんなで、天の川見てるのに。一人でどっかいっちゃって」

「あ、うん……」

泣いていた。そう答えるわけにはいかない恭介は、ただ曖昧に、頷くだけだ。

「もう、男の子だったらシャキツとしなさい。シャキツと」

そう言いながら真奈美は、恭介の背中をバシツと叩く。小さな掌ではない何か違う感覚を背中に感じ、恭介は首を傾げる。

「あれ、何かもってるの？ マナミちゃん」

そんな恭介の問い掛けに「え」と、おどけながら驚きを表現する真奈美。その顔が驚いたり怒ったりと騒がしい。

「キョウちゃん。誕生日いつ」

「え、今日だけど……え？ もしかして」

「そのとおりい」

そうやって満面の笑みを浮かべた真奈美が、恭介の眼前に一冊の

本を取り出した。正確に言えば、それは本と呼ぶにはあまりにも稚拙なつくりだ。画用紙にクレヨンで絵を描いて、覚えてたのひらがなで綴られた文章が並ぶ手作りの絵本。それを真奈美はズイと恭介の前に突き出した。

「お誕生日いゝおめでとお？」

「あ、ありがとう」

今までの寂しい気持ちが一気に吹き飛んだ。跳ね上がる心をそのままに、恭介はその絵本を受け取る。

「み、見ていい？」

興味に輝く恭介の瞳に、真奈美はニツコリと笑うとブンブンと頭を横に振った。

「だあゝめえゝえええええ」

「えー？ 何でさ」

恭介が眉をひそめると、頭をピタリと止めた。

「だってさゝくらあい所でご本をよむと、目がわるくなるってママがいったもん。それにい……」

「それに？」

恭介が適当な相槌を入れると「えへへ」と、真奈美が空を指差す。「せつかくきれいなお星さまが出てるんだよ。そっち見なきゃ、そんだよ。ね」

恭介に同意を求めているのか、最後の「ね」で少年の瞳を覗き込んだ。その仕草に恭介は顔を赤らめ、たじろいでしまう。口を突く言葉は、弱々しい「うん」だけ。

それに真奈美は、首を傾げながらも、恭介の腕を取る。そして軽く引く張った。

「だからゝむこうにもどって、みんなで見よゝよ」

そうやって向けられる無邪気な笑顔が、恭介にとっては少しきつい。あの場所に戻れば勝昭と顔を合わさなきゃいけないのだ。それが脳裏を過った恭介は、無意識の内に真奈美の手を振りほどく。そして……

「ぐ、ごめん……」

俯く恭介。それに真奈美が眉をひそめ「どうしたのさあ、キヨウちゃん？」そう、声をかけると、恭介は拒むように背を向けた。

「カツが……いるだろう。だったら僕、行かないほうが……」

「あゝやつぱりあのことに気にしてるんだあ」

その言葉に恭介は黙って頷く。昼間こっぴどくケンカをしてしまったのだ。いまさら合わす顔がない。

「ねえ、キヨウちゃん。今、お星さま見える？」

唐突な真奈美の言葉に、恭介の頭に疑問が浮かぶ。しかし、そう首を傾げながら夜空を見上げると、最初と同じ様に滲んで見えた。

「もしね、じょうずに見えなかったら、心が泣いてるんだって。キヨウちゃんママがさっき言ってた」

そう真奈美は言いながら、天を仰ぐ恭介の周りをゆっくりと回る。「カツちゃんもさあ、じょうずに見れていないと思うんだよ。だって、ケンカしたまんまじゃ、心は泣いたまんまだもん。わたしだって見えないよ」

ニツコリと微笑む真奈美の顔が、正面に来た。

「だから、いっしょにもどろろ」

しかし恭介は、それをまともに見る事が出来ない。正面を向いてしまったら、涙が零れてしまいそうだったから。

24 暁の明星

「恭介え！」

「ナツクル！」

瞬間、勝昭の左拳が残りの仮面を打ち砕く。衝撃を頭部に受けた恭介は、小さな放物線を描きクレーターの端に叩きつけられた。意識が混濁する。しかし、正面に見える星はその姿を自分の意志で輝かせ綺麗に見えた。体はもう動かない。脳が激しく揺られ、世界が小刻みに震えている。もう駄目なのかと弱音が脳裏を過る中、銀星の声が響き続けていた。

『意識を保て、強く望め。まだ死なせない。絶対に死なせない』

必死で治療を行う最中の全力の叫びだった。ボロボロになった恭介の体、正直どこから手をつければ良いか判断に困る。だが、何より優先すべきは、生命の根幹。頭脳だ。恭介が意識を失えば、自分の力を発揮する事ができない。それまでなんとか持つてほしいと切に願った。だが、その思いは届かない。可能な処置もできないまま、恭介の意識は、深く、深く沈みこんでいった。

動かなくなった恭介を見据えながら、勝昭は震えていた。宿敵であつたオーガを倒したのだ。人生において常に自分のコンプレックスであつた恭介を倒したのだ。自分の力が恭介を越えた。特別な存在になれた。そう思えた。しかし、何なのだろう、この心に空いた大きな穴は。そこにこびり付く、恭介の言葉は。

真奈美が生きている。そんな言葉を自分に言えば、攻撃を止めるとも思つたのだろうか。そんな弱い恭介など、倒したところで意味がなかったのだらうと、勝昭は鼻を鳴らす。

もしかすれば、憧れが恭介を美化しすぎていたのかもしれない。そう感じながら、勝昭がゆっくりとオーガに向けて歩み始めた時、

周囲を地鳴りが襲った。かなり大きい。咄嗟に勝昭は空中へと飛び立つ。

慣れた動作でγ《ガンマ》を操り、簡易飛行形態を取った。浮遊しているだけならば、足裏から推力を生む空気を排出させれば事足りる。巻き上がる熱風が頬を焼く感触に、勝昭はユニコーンの仮面でその顔を覆った。

見下ろす世界。まだ、その炎は所々で渦を巻き、瓦礫が散乱している。直下に生んだクレーターが月の様に見えた。だが、地鳴りの原因は不明だ。爆発ではない。ならば自然現象である地震なのかと考えた時、外れに見えた滑走路が盛り上がり、弾け飛ぶ。舞い上がったアスファルトが、黒い雪の様に舞い、落ちていった。

静寂に包まれた黒い降雪。その中心に、勝昭の視線は釘づけになる。見た事のない物体。浮遊する金色の繭。どういった原理で空中に静止しているのかわからない。いや、そんな事を考えるよりも先に、脳内にγ《ユニコーン》の声流れ出す。

『心を引き締める勝昭。最高の敵だ』

どうやらユニコーンは、あの物体が何者なのか知っている様だ。口数少なく自分から語ろうとしなかった彼の言葉。その中の“敵”に対して力がこもる。相手が何者だろうが関係ない。心の中に広がっている不完全燃焼が、勝昭のゴングを鳴らした。このやり切れない思いを、あいつにぶつけてやる。

そう拳を握り、「ユニコーン」と声を出し、簡易飛行形態から戦闘飛行形態へと換装を実行する。甲冑の影となる部分から、小さな噴出口が無数に顔を覗かせた。

瞬間、高い鈴の音が脳内に響き渡る。リーンと耳鳴りの様に聞こえる波。それを振り払う様に、勝昭は頭を振った。

「何だこれは？」

『奴の仕業だ。心を強く持て』

ユニコーンの声が聞こえた。だが、それに被せる中性的な言葉が勝昭の中に広がる。

『脅威がどれほどのものかと期待したが、不完全な同族が脅威か……』

その言葉と共に、金色の繭が徐々に解かれていく。天使の翼が八枚、その姿が一瞬噴き上がった炎の柱に照らされて、オレンジ色に揺らめいた。

『つまらんな。だが、その力、奪っておいて損は無し』

そう聞こえた瞬間、勝昭は金色の天使に向けて、突貫する。相手の口上など聞く理由はない。ただ“敵”である相手を倒すだけだ。気合いを込めて勝昭が吼えた。と同時に、背中 of 噴出口から、爆発的に噴き出した空気が、勝昭を更に加速させる。

「リジエクト……」

その姿を見据えた金色の翼は、更にもう二枚の羽根を展開し、勝昭の進路を遮った。

「ナツクル！」

だが、彼の拳はそれをやすやすと貫通させる。そして、自分の体ごとその翼を突き破った。それを基に勝昭の口角が上がる。最高の敵としてこの程度。見かけ倒しだ。そう相手を嘲笑ったところで、左手に次弾を装填した。瞬間。目前に翼の壁が立ち塞がる。

「邪魔だあ！」

同様に振り抜いた拳が、その壁を突き破った。だが、そこに体を捻じ込もうとした瞬間、衝撃が走る。貫いたはずの翼が瞬時に再生し、勝昭の体ごと穴を塞いでしまったのだ。体が思う様に動かない。締め付けられる感覚に、勝昭は筋肉を膨張させ弾き返そうとするが、それは、全く効果がなかった。

『やはりこの程度。以前の宿主の方が、手応えがあった』

頭の中に流れ込む中性的な声に、勝昭は心を怒りで震わせる。そう言うのであれば見せてやろう。この状態で出せる最強の技を……。と、体中に力を蓄積し、解き放つため視線を上に向けた瞬間、敵の宿主が目飛び込んでくる。

「ま、まさか……」

勝昭の言葉が向けられた先。そこには、整った顔立ちの美しい少女。長い時間延ばされ続けた黒髪が、上昇気流で舞っている。だが、勝昭の視線は、それらにはなく、少女の髪と共に舞う、二対の黄色いリボンにだった。忘れる事はない。見間違えるはずもない。あのリボンは、自分が彼女にプレゼントした。世界で一つしかない思い出のリボンだ。

突然、頭の中に当時の光景が蘇る。恭介の言葉が、心の中を駆け巡った。

——真奈美は生きてる——

——ここにいるんだ。悲しんでんだ！——

「真奈美ちゃん……？」

零れ出た言葉。だが、それは彼女には届かない。閉じられた瞳。力なく頂垂れる頭は、生命の活動を微かに見せるだけで、意識があるとは思えない。だが、勝昭は叫んだ。

「真奈美ちゃん！！！」

一度で反応がないのならば、何度でも。何度でも勝昭は叫び続けた。その姿を、興味深く見届ける金色の魔物——ルシフェル。

『ほう、この宿主の知り合いか……重力で引かれ合う運命。実に面白い。ならば、この心^{ちから}を利用して、この地球^{ほし}を砕くのも、また、一興』

そう、独り言ちたルシフェルは、力を込めて、ユニコーンを締め上げる。もう、その翼は、翼ではなく、触手となって勝昭を絡み取っていた。それでも、勝昭の叫びは止まない。

「真奈美ちゃん！俺だ！勝昭だ！生きてるんだったら返事をしてくれ！！」

ギリリと擦れた金属音が、徐々にユニコーンを砕き始める。亀裂が甲冑に広がった。

25 流星スターライト

——私は“銀星”。恭介と共に生き、瑞穂と共に生きた者。私の力はこの時のため……——

——それを今、解放する——

銀星の魂が再動を始める。未だ恭介の意識は戻らないまま。生命維持の限界点に達するかどうかの瀬戸際だった。それなのに、銀星は自らの自我をもつて、力を紡ぎ出した。銀星たち精神感応金属生命体の力の源は、宿主の心だ。本来、それを持たない彼らは、蓄積されたエネルギーを使用し生きているにすぎない。だが、生物は進化する。己のエゴが生まれれば、生物は進化するのだ。それにふさわしい形を持つて……

クレーターに横たわるオーガ。その姿が徐々に変化を始めた。うなじから広がる配列組み換え、その作用によって、光の屈折率が変わっていく。

元々彼女に素養はあった。年月をかけて集めた生物の感情と知識。それを蓄積し結合。融合し紡ぎ上げ、我がモノとした瞬間。進化が始まったのだ。恭介の危機。それが、きっかけであり、約束であり、最後のパーツだった。今の銀星には悪いが、宿主を守る事。それは私が請け負う。と、今ここにエゴが生まれた。

瞬間にして、恭介の傷が癒える。完全修復完了。この力が揮えるのは、彼が意識を取り戻すまでだ。一刻の猶予も与えられていない。所詮、自分は居候だから。二人の意識が戻ったならば、全て消えてしまっただろう。銀星の——瑞穂の意志を持った、感情全てが。

震える魂を握り込んだ拳の色が、黄金色に変わる。これが、進化の形。いや、進化の結果。それを噛み締め、“銀腕”であった力を展開した。

目指すは、同族。金色の翼。

「真奈美ちゃん！ 真奈美ちゃん！」

『か、勝昭。先ずはこの状態の打破だけを考える。このままでは……』

ユニコーンの悲痛な声が脳内に流れ込む。だが、勝昭にそれは届かない。無我夢中で叫び続ける彼には、真奈美しか目に入っていない。

更にその力を強め、締め付ける金色の触手。破壊され、剥がれ落ちる装甲が、勝昭の寿命を示している。もう、これで終わるのかもしれない。そう、ユニコーンが、絶望を感じた時、声が聞こえた。『そのまま、宿主を動かすな』

舞い落ちる銀色の欠片を、黄金色の掌で受け止めた銀星は、瞬時にそれを吸収融合し、力となす。そして、兜を形成し直し、拳を握りしめ、力を装填した。

『リジエクト……』

『ナツクル』

その言葉と共に、触手が弾けた。ルシフェルがその力を失い、勝昭を開放する。縛られる力から解放されたユニコーンは共に重力に引かれ落ちてゆく。その中で、勝昭は見る。黄金に輝くオーガが、同色の敵に拳を向ける姿を。

「恭……介……」

『やっと、出会えた。悠久の決着。ここで……瑞穂の仇を取らせてもらう』

銀星と対峙するルシフェル。いや、逆か。ルシフェルと対峙する銀星。共に、その姿は青白い月影を映し、赤と橙の間を行き来する炎を漂わせている。しかし、根本的な色は変わらない。同じ金色。

それが、互いの力が拮抗している事を暗に示す。双方が生み出す力のどちらが強いのか、それが根幹たる戦いが始まるうとしていた。

『ほう、あれを宿主に持った同族だったか。まさか、この地球^{ほし}で、同じ進化を遂げるとは、少し侮^{あは}つていた様だ。あの時取り込んでおけば良かったな』

『ふん。できなかった事を、さもできたかの様に語るとは、貴様のエゴも底が知れる』

見据えるオーガの瞳。それに対して、ルシフェルは感情を露わに形態を変えていく。一對の翼だけを残し、全てを、巨大な武器へと変化させた。剣、触手、銃、鎚、戦斧、槍、拳、鎌、刀、そして、宿主を包み込む黄金のドレス。全てが全て、己が質量を限界まで圧縮し、この世界、同族を含めて何よりも剛健な砦を築き上げる。図星を守る、拒絶と言う名の砦。それを、嘲笑うオーガに、ルシフェルの総攻撃が襲いかかる。それが、戦いのゴングだった。

『新参者が！ 聞いた様な口をきくな！』

『底が見えたな……』

縦横無尽に襲い来るそれぞれの武器。横薙ぎの剣を、最小限の動きで上昇しかわす。そのタイミングを狙った銃撃を、突き出した掌で撃ち落とし、背後から迫りくる鎌の刃を、すれすれを待って仰け反る様に体を舞わせ、やり過ぎした。そして、斜め下方より斬上げてくる戦斧と、それで挟み込むために振り下ろされる刀を擦り抜け、オーガは拳を握ると、ルシフェルへ向け、モーシヨンのベクトルを刺し向ける。瞬間にして亜音速となったオーガが、左腕を突き出し、右拳を装填する。それは、恭介が放つ必殺技——銀星スターライトではなく、“銀腕の魔女”が得意とした、最上級の一撃。体内のチヤクラを全開に、身体能力を活性化させ、限界の更にその上を引き出された一撃だ。その作業を淀みなく進める事ができたのは、今の宿主が、瑞穂の血を受け継いでいるからであろう。やはり、血は何よりも濃い。と、感心した銀星は、正面からこの攻撃を迎撃するため展開された、巨大な拳に向け、気合いを込める。

『流星……』

更に加速をした空間の中、全力を込めた一撃を、繰り出す。

『スターライトー!!』

直線を描いたその軌道は、最高の硬度を誇る拳を爆砕させた。同時に生み出された光に包まれながら、ルシフェルの拳は破片となつて、夜空に舞う。その力が失われて行くかの様に、その色が、金色から銀色へと変わっていく。

それを見据えた、銀星は、先の一撃で損傷した恭介の身体を修復する。瞬時に戻った体の感覚。それを確かめる様に、拳を握り直すと、再び襲い来る攻撃にその身を舞わせ、木の葉の様に、その一撃をかすらせもしない。

『流星スターライトー!!』

次に碎いたのは、金色の鎚。それもまた同様に、月光に照らされながら、個々の輝きを銀色に変えていった。

『な、何故!? 衝撃は全て無効化しているはずだ!』

その姿を信じられないとルシフェルが声を上げる。動揺を隠しきれないのか、攻撃の手が緩くなった。その隙を逃す事なく、銀星は瞬時に両腕に剣を形成すると、刀と戦斧の根元からそれらを一刀の下、斬り落とす。重力に引かれた凶器が、地面に敷かれたアスファルトに音を立てて突き立てられる。それを尻目にオーガが言葉を紡いだ。

『何故かつて? それに気が付けない貴様の無知が、原因だろう』

全ての事象には、正と負、陰と陽が存在する。二対のそれを扱えば、無効化など容易い。それには、見極める知識と、ちからそれを実行に移すだけの能力が必要だが、銀星にとってそれは、既に学んだ一つの知識。物質が存在するための真理であり、力としての存在を示す、最高の技術だった。

それを噛み締め、オーガは、ルシフェルに拳を突き出す。さあ、終結は近いと。

『ふざけるな! 完全たる力のこの私が、無知だと。……言うてく

れる。ならば、その知識貴様ちからを五体に刻んで、奪い取ってくれるわ！』

『ではしない。させはしない。この拳で、貴様のエゴを打ち砕く』
突き出した拳を見せつける様に握り締めた銀星は、その言葉を告げると再び亜音速の世界に飛び出した。

『流星剣』

一閃。

金色の鎌が切り落とされる。

二閃。

相手の剣を断ち切った。

三閃。

銀色に変色した槍が、アスファルトに突き刺さる。

そして、第四閃目。ルシフェルの背後に回った銀星は、両背の翼に向け、その力を振り下ろす。だが、突然脇腹を襲う予想だにしない衝撃によつて、それは、成されずに終わってしまう。いったいどこから。そう、周囲を確認した瞬間、銀色の人影が、自分の体ごと、銀星を弾き飛ばしている事に気がついた。完全に虚を突かれた一撃。それは、ルシフェルからのものではなく、脇腹に組み付いたユニコーンの突進だったのだ。

『は、離せ！ 貴様はどちらの味方だ！？』

『俺は、真奈美の味方だぁ！！』

勝昭の咆哮と共に、絡み合ったユニコーンとオーガが重力に引かれ始める。

「真奈美を助ける。それが、俺たちの目的だろう！？ 恭介え！！」

そして、その身が土煙を巻き上げつつ、大地に打ちつけられた。

26 絵本『願い星』

オーガは、まなみを まもるため ユニコーンと たたかいし
んでしまいました。

でも、オーガは、メフィスタンに せんとう されたのではな
かったのです。

だいすきな まなみを たすけるために、ユニコーンと たたか
ったのでした。

それをしていた、いいまほうつかいが いいます。

これから さんにん ずっと なかよくできるのならば、オーガ
を いきかえらせて あげましよう と。

うらぎったんじゃ ないと した ユニコーンは、まなみと
ふたりで やくそくします。

ずっと さんにん なかよく していきます。だから、オーガを
いきかえらせて ください。

すると まほうつかいは、やさしくわらって ふしぎなじゅもん
を となえました。

「よだき すいだとつず がこのり たふはし たわ」

きれいな ひかりが まわりをつつみます。

そうすると、それから ほしが ふつてきて オーガになりました。
た。

そして さんには、ずっと なかよく あそんだの でした。
めでたし めでたし。

きょう ちゃん おたんじょうび おめでとう。

つよくて にげない オーガみたいに わたしたちを まもって
ね。

これからも、きょう ちゃんと かつ ちゃんと まなみ。
さんにん ずっと なかよしだよ。

27 星に願いを

恭介の意識が覚醒を始める。瓦礫の中で“銀星”は、己が意識のタイムリミットを知った。もう少して瑞穂の意志を果たす事ができたというのに、邪魔が入るとは……。やはり亡霊である私は、存在こそする者だが、事を成すには、微力すぎた。永遠たる存在であり続けるが故、私は、存在できたのだろう。それを放棄したのだ。だから後は、意志を継ぐ者に託すしかない。いや、託すべきだったのかもしいない。それもまた、瑞穂の意志。運命の導きなのだ。だったら、私の存在は、このためにあったのだろう。直系の意志を存続させる。それが成せただけで、私の存在意義は達成された。もし私に死と呼べるものがあるのなら、会えるのだろうか。彼女と語り明かした、あの世界で……

——飛ぶわよ“銀星”——

——わかった。共に行こう。瑞穂——

“銀星”の意識と共に、オーガの鎧が、銀色へと変化していく。ばやけた視界の中、恭介は意識を取り戻した。神経を辿り、体の状況を確認するが、異常は認められない。あれほどの攻撃を受けたのにも関わらず、この状態であるという事は、銀星に感謝しなくてはならないだろう。普通なら、間違いなく死んでいる。

そう、恭介がふらつく体を制御しながら立ち上がると、耳鳴りが続く中、頭の中に声が聞こえた。感謝すべき相手。銀星の声が。

『恭介……無事か？』

「ああ、問題な……」

銀星の言葉に、応えようと口を動かせば、一瞬にして視界に入ってくる、銀色の拳。いや、恭介の血で赤く染まったユニコーンの拳だ。それに、恭介は反射的に繰り出した掌で、しっかりと受け止め

た。破壊的衝撃はない。それを握りしめると恭介が口を開く。

「何しやがる勝昭!？」

「それは、こっちのセリフだ! 真奈美を殺そうとしやがって!」

「はあ? 何言ってやがる。真奈美はこの場所に囚われてるって言うてんだろが!」

「ふざけてんじゃねえ! 真奈美はあそこにいるだろうが!」

ユニコーンのもう一本の腕が、夜空に浮かぶ金色の魔物を指差す。それに視線を移した恭介は一瞬、言葉を失った。

「う、嘘だろ……」

「嘘ではない。真実だ。君の母に敗れたβ《ベータ》は、彼女を、新たな宿主として選んだのだ」

銀星の冷静な説明に、恭介は言葉を吐き出す。

「知ってたのか銀星。真奈美が離反者の宿主だって?」

「知っていた。と言えば語弊が生まれるかもしれないが、先代の知識を得た際。同時に知った」

その言葉を聞いて、恭介の脳裏に恐怖が浮かぶ。意識を失った間に、銀星が暴走し真奈美を殺そうとしたのかと。銀星の目的はあの離反者を倒す事だ。真奈美の事など考えていない。もしかすれば、自分が真奈美を殺してしまったのかという恐怖が、恭介を支配し始めた。

「て、てめえ、銀星。俺が気絶してる間に何しやがった?」

「何もしていない。私は君の意識と共にある。君が気を失えば、私も同様だ」

「嘘だ。勝昭が言った事……お前も聞いていただろう」

「聞いていた。だが、私ではない」

「だったら、勝昭が嘘ついてるってのか? ああ?」

恭介の叫びに、勝昭から力が抜ける。恭介に寄生しているγ《ガンマ》との会話なのだろう。一方的にまくしたてる恭介の必死な表情が、仮面の奥で隠れていても、見える気がした。それも、自分が嘘を言ったかどうかについてだ。勝昭は恭介の言葉を信じようとし

なかった。なのに恭介は、勝昭の言葉を疑おうとしない。その姿が心の隙間に引つかかった言葉を大きく膨張させる。真奈美が生きている。その言葉が重くのしかかった。

そんな中、真実を探るため銀星が検索をかける。もしかすればという、疑念があつたからだ。意識を奪われた事は、初めてではない。そして、それは簡単に見つかった。全ての真意と共に。

『恭介。彼の言葉は嘘ではない。が、真実ではない』

含みのある言葉に、恭介は声を荒げる。

「はあ？ わかんねえ！ はっきり言えよ！ はっきり！！」

『初代銀星が、君の体に乗っ取った。そして、君の母の意志。それを遂げるため、β《ベータ》に攻撃を仕掛けたというのが事実だ。その宿主に対して敵意はない。むしろ倒すためだけならば、既に事を成せたはずの実力差があつた。それでも結果が発生していない。ならば、そう考えるのが妥当だろう。そして、いよいよ決着をつけようかと言う時、君の友人が止めに入った。理由は、誤解だ。宿主を思うが故の誤解。これが全てだ』

長く紡がれた言葉に嘘はない。だが、それを素直に受け取れないほど、恭介の心は揺れ動いていた。沈黙が生まれ、そして流れる。その中で巡る思考。至るべき結論は見えている。だが、その根幹たる覚悟が、いや、信念が揺れていた。

一度疑ってしまった、銀星の言葉。それを信じ切れない自分の弱さ。不甲斐ない自分の心が、恭介を縛り付ける。

項垂れ立ちつくす恭介。その姿が勝昭の目には、とても小さく映る。これが、あの恭介かと。何を戸惑っているんだ。血反吐を吐いて、自分に訴えかけたあの恭介はどこへ行ってしまったんだ。真実を告げるためにここへ来たわけじゃないはずだ。やる事はわかつている。そうだろう。なのになぜ動き出さない。

その気持ちを拳に握り締めた勝昭は、大きく振りかぶりオーガの頬へと叩きつけた。衝撃を緩和しきれない銀星と共に、恭介は地面へと倒れ込む。そこへ勝昭が気持ちを言い放つ。

「恭介。何迷ってたんだ。真奈美を助けるんじゃないのかよ！？
何に縛られてんだ。どうしちまったんだ？」

それはわかってる。そう勝昭を見返す恭介。だが、自分の弱さに
気が付いてしまった。その事が、根本たる恭介の信念を、覚悟を、
打ち砕いてしまったのだ。だから、動けない。動きたいのに、動け
ないでいた。そこに勝昭の言葉が更に飛んでくる。

「お前は、誰のために戦ったんだ？ お前は、誰のために傷ついた
んだ？ 目を覚ませ恭介！ お前は、紅蓮闘士オーガだろうがあ！
！」

——つよくて にげない オーガみたいに わたしたちを まもつ
てね——

——真奈美を助ける。それが俺たちの目的だろう！？ 恭介え！！

ドクンと一度、恭介の心臓が脈打った。過去の記憶が、頭の中で
蘇る。自分がなぜ、ファンタジーを——魔法を求めていたのか。ど
うして、このような性格、いや、信念を持つに至ったのか、全てを鮮
明に思い出した。魂が覚えていたのだ。遠くへ行ってしまった真奈
美を忘れようとした事もある。母の真実を求めずに妄想に逃げた事
もあった。そして今まで、紡ぎ出されてきた言葉は全て理想の自分
であり、憧れた自分の言葉。それは、弱い自分を他人から隠すため
に被った偽りの仮面。いや、他人にではなく、自分から隠そうとし
ていたのだ。

逃げていた。それを認められない自分は、結局強くなれていなか
った。過ちを——弱さを認めなければ、決して強くはなれない。そ
れが、今わかった。

だから、もう、終わりだ。

見せかけだけの信念なんて、いらない。共に生きると決めた銀星

を信じる。だから、本当にその信念を貫いてやる。根底から芽生えた信念を、絶対に俺は……

「曲げねええええええ！」

恭介の叫びが、夜空を劈く。生命の再動とも取れる産声が、空気を震わせた。しっかりと見開いたその力強い瞳の奥に、爛々と輝く星空が綺麗に煌めき出す。

「銀星。俺が悪かった。お前を疑っちまった。許してくれ」

『悪くはないさ。それが、人間だろう。私も言葉が足りない過失があつた。私こそ、すまない。さあ、望め恭介。君の望みは何だ？』

銀星の言葉が心に響く。それに応えて、恭介は拳を握りしめた。

「真奈美を助ける。だから、力をくれ。β《ベータ》を真奈美から引き剥がす、ありったけの力を!!」

「了解した！」

そう言葉を残し、空へと舞い上がるオーガを見上げ、勝昭は笑う。それでこそ恭介だと。

「お前は行かないのか勝昭」

ユニコーンが口を挟んだ。それに勝昭は苦笑いに変え言葉を紡ぎ出す。

「行くさ。本当のヒーローが戦ってるんだ。相棒が、戦わなくてどっす」

「ならば望め、お前の望みは何だ？」

「恭介と共に真奈美を助ける。それができる力が欲しい」

その言葉にこもる今までにない心の強さ。それを噛み締めユニコンは言った。

「お前が望むままに、力を揮え」

28 狂う明星

ルシフェルは怒りに打ち震えていた。僅かな時間で己が力を否定されたのだ。それが信じられないと、憎々しく同族を睨みつけ、それを自ら否定する。わからない事などないのだ。得ていない力など存在しない。あるべきではないのだと。ならば、もうこの地球^{ほし}には様がない。消し去ってしまったえば、自分が頂点である事実に変わりがないのだから。

そうルシフェルは、ある物質を作り始める。自らの体を変化させ生み出される物質。それは、今まで何度も星を砕いてきた一撃のために必要な物質だ。それを人は“反物質”と呼んだ。

それを生成するには時間がかかる。ルシフェルは破壊された翼を修復せずに、一本の砲身へと纏め上げた。その砲口はまっすぐ大地に向けられる。その他準備は整った。後は生成されるのを待つだけ。もう止められない。己が意志を離れた生成過程。物質が成されるのは、十数分後の事だろう。それが、この星との今生の別れだ。

ルシフェルの思考に優越感が広がった。

瞬間、意識にノイズが走る。この兆候は間違いない。気を失っていた宿主が目覚めるのだ。そうなってしまうえば、力が分散されてしまう。宿主を伴わなければならぬジレンマの中、近づく二つの気配が、彼のもどかしさを更に増幅させた。

『全く、目障りな生物だ』

確認した同族の反応。それを見下ろし、ルシフェルは笑った。あの忌まわしき金色の鬼は銀色へとその色を変えている。どうやら不完全な進化だったのだと、嬉しさが込み上げてきた。最高の進化を遂げるなど自分以外にあり得ない。

『星を砕くまでの余興だ。二人纏めて、遊んでやろう』

そう言葉を零すと、残った翼二枚と金色のドレスを、無数の触手へと変化させた。そして、接近する二体の同族にその刃を向ける。

最後の戦いが、今、幕を開けた。

恭介の背中を追いかける勝昭。その先で、展開される触手が目に映る。間違いなく自分たちに向けた攻撃だろう。その中で勝昭は考える。どうすれば真奈美が助けられるのかと。金色のオーガがもし、真奈美を殺そうとしていたのではなく助けようとしていたのなら、あの攻撃は、どういった意味を持つのか。それを、脳内で巡らせる。すると、その疑問に答える様にユニコーンが言葉を紡ぐ。

『まずは、質量を減らせ勝昭。そして、残りが少量となったところで、奴を吸収する。そうすれば、彼女は我々の呪縛から解放されるだろう』

「わかった。だが、できるのか？ ユニコーン」

『できる。所詮、自我を持っただけの同族だ。できない道理はない』
そうか。と奥歯を噛み締めた勝昭。オーガがやろうとしていた事は、この事だったのだ。それを、自分が邪魔をしてしまった。それをしなければ、もう決着を見ていたかもしれない。

『来るぞ恭介。気を引き締めろ』

「わかってらあ！」

銀星の言葉通り、金色の触手が不規則に蠢き、こちらに向けて襲いかかる姿が見えた。その一本を、体を捻りながらかわし、力を装填した右拳を突き出す。

「銀星スターライトー！」

だが、相手には傷一つ生まれない。それどころか、衝撃を無効化されている様だ。ぶれる事さえしない。

「くそつたれがあ！」

『焦るな恭介。強制分離攻撃を成すならば、タイミングを計れ。何を成すかを想像し、それを拳に纏わせるんだ』

銀星の言葉に、恭介は左拳を握り締め、その言葉を遂行する。

「スターライトー!!!」

瞬間、触手が弾けた。その光景を目の当たりにした恭介の左拳に手応えがある。これならば、と口角を上げた時、側方から襲い来る触手が視界に入る。

『恭介！』

銀星の警鐘が鳴る。だが、少し対応が間に合わない。と身構えた瞬間……

「リジエクトナックル」

ユニコーンの拳が、その触手を弾き飛ばした。

「勝昭……」

「恭介、真奈美を助けるんだ。いがみ合ってる暇はねえぞ」

スラリと輝くユニコーンの肢体。反射的に零れそうになった悪態が、その言葉によってかき消された。全くその通りだ。そう微笑む顔を確認する間もなく、次の攻撃が二人に襲いかかる。

二人の攻撃は優勢に見えた。だが、一向に真奈美の下へとたどり着く事ができない。波状的に襲いかかる触手の前に、攻めあぐねていたのだ。打ち出す強制分離攻撃。しかしそれは、焼け石に水と言えてしまう。それだけの質量を、どの様に生み出しているのか。銀星には疑問でしかなかった。しかし、思い当たる節はある。ユニコーンに碎かれた部分が再生されていた事実。それによって銀星の質量も増していたのだ。もし、あの進化の形態に増殖効果があると言うなら、この戦いは、不利だ。例えばどれだけ触手をβ《ベータ》から分離したとしても、効果が薄い。それを鑑みた作戦。それを考えなければ、勝利はないだろう。

それに、気になる事がもう一つ。

それは、あの地球へ向けられた砲身の様な物体。もしかすればという不安が、否が応でも過ってしまう。

『恭介、確認したい事がある。触手の一部を取り込むぞ』

唐突な銀星の言葉にも、恭介は笑って返す。丁度良く襲い来る触手に目標を定めた恭介は、右腕に剣を形成させた。一色が揮った力、

ゲシユタルトがその輝きを見せた。

行き違う様に放たれた一閃。

その一撃によって切断された触手を、左手で掴むと手頃な大きさに切り分け、「これでどうだ？」と、銀星に問い掛ける。

『すまない』

そう言った瞬間、銀星の吸収が始まった。その間恭介の力が失われるわけではない。しかし、反応が遅れる事は確かであるし、検索を含めれば無防備になる。一対一であつたならこの様な作戦は、危険極まりない事だが、今は、一緒に戦う者がいる。ならば、欲しい知識だけを選別し、数瞬で結果を出す。

銀星の有言実行。ふわりと自由落下に切り替わるかどうか、その瞬間を狙った触手が恭介を襲うが、勝昭の拳によってそれが防がれる。それを、横目に銀星の検索が終了した。

はつきり言つて絶望とも取れる結果だったが、それがわかつた事で、希望が生まれる。それを、噛み砕き、銀星は仲間全てへ回線を開く。

『時間がない。一点突破を提唱する』

唐突に突きつけられた作戦に、恭介、勝昭、ユニコーンは戸惑いの声を上げた。

「ああん？」

「どうして？」

『まさか……』

やはり同族であるユニコーンは同じ仮説を立てていたのであろう。神妙な面持ちで返された言葉が、それを物語っていた。だが、やはり二人には言葉が足りなかったかと、銀星は、説明を追加する。

『奴は“星砕き”を生成し始めている。それが完成すれば、この星が消えてなくなるぞ』

その言葉に二人は驚愕し、一人は確信を得た。

「どうすりゃ良いんだ銀星？」

咄嗟に返す恭介の言葉にも銀星は冷静に言葉を紡ぎ出す。

『言っただろう。一点突破だ。そして、私が“星砕き”ごと全てを吸収する』

「できるのかよ」

そう言ったのは勝昭だった。

『可能だ。恭介が望むならば、私は何だってできる』

無茶苦茶な理論だ。それでもなお、周囲を納得させる言葉というのは疑う余地を残さない。いや、ユニコーンが否定しないのだ。それは間違いない。可能なのだと、勝昭は覚悟を決める。

「だったら行け恭介。俺たちが触手を何とかしてやる。できるだろう、ユニコーン」

『お前が望むならだ』

「当然と言え。俺はそれを望むんだからな」

そう勢い良く言葉を吐き出した勝昭が一直線に真奈美へと向かう。迫り来る触手を全て薙ぎ払い。恭介のために一本の道を示しだした。その姿、その気持ちに応えない恭介ではない。

「行くぜえ銀星え。呐喊とっかんだあ！！」

29 集いし三連星

—— 恭介 ——

—— 勝昭 ——

—— 真奈美 ——

声が聞こえた。それは懐かしい空気を持っていて、心の中で変換される。全てが全て変換されるわけではない。けれど、二人の声が、彼女の心に届いたのだ。彼女の名前は、南条真奈美。ルシフェルの宿主にして、二人の憧れ。それらの声が、彼女の意識を覚醒させていく。

『猪口才な奴らだ。だが、もうその時はすぐだ』

脳内に響いた悪魔の声。それで真奈美は瞼を開けた。世界が違う。今までの無機質な部屋ではなく、空があり、壁がなく、目下には燃え上がる荒野と、瓦礫の山。そして、蠢く金色の触手。そう、あの男を殺害した凶器が、誰かを狙って動きまわっている。

それを目の当たりにした真奈美は、絶叫とも呼べる声を放つ。

「止めてえー!!!」

その声が響いた瞬間、ルシフェルの動きが鈍くなった。わかっていた事だ。宿主がいる以上、その影響を受けずにはいられない。例え完全なる自我をもった存在であったとしてもだ。懸念していた事が現実起こった。

『思ったより早い……』

舌打ちとも取れる言葉を零した魔物。それを更に抑え込むように真奈美は声を上げる。

「させないんだから。もう、誰も殺させない」

声が聞こえた。その声と共に動きが鈍る金色の触手。その意味を知った勝昭は、歡喜の声を上げた。

「生きてる。真奈美ちゃんも生きてる」

「気がついた様だな。これぞ神が与えた好機。心の準備は良いか勝昭」

「当然だ」

そう、最後に繰り出した拳で、触手を一つ破壊すると、ユニコーンは動きを止める。それはまるで、相手を挑発し、その先の事を望んでいるかの様だ。だが、今のルシフェルにはその先の事など読む余裕はない。これぞ好機とばかりに、触手を一本、二本と巻きつけていく。見る見るうちに、その触手の数が、数十本を超えた。巨大な力で締め上げられる勝昭の姿がもう確認する事ができない。まるで毬の様な紋様を見せるその球体の中で、ユニコーンの鎧が、音を立てて圧壊を始める。

『実にこの宿主というのは、生き方が下手だ』

「ああ？ 誰の事を言ってたんだユニコーン？」

『お前の事だよ。勝昭。お前が望めば、恭介がやろうとしている事は、お前だってできたはずだ。囚われのヒロインを助け出すヒーローなんぞ、そうできる事ではない。好きだったんだろう。ヒロインの事が。だったら、力ずくでも奪ってしまえば良かったのだ』

ユニコーンのユニコーンらしからぬ発言に、勝昭は鼻を鳴らした。それをする事はできたのかもしれない。だが、それが必要とは微塵も感じなかった。

「馬鹿だなユニコーン。お前は何も俺の事をわかつちやいねえ。仕方ねえんだよ。だって俺は……」

そこまで言うとな勝昭は瞼を閉じた。暗い世界に変わりはない。だが、その裏に浮かぶ、あの頃の二人の姿。自分に手を差し伸べてくれた、恭介と真奈美。その姿が、成長した二人に変わる。

——カッちゃん——

その言葉と笑顔が、ぼつかりと空いた心を満たしてくれる。返す言葉は決まっている。あの時からずっと言い出せなかった言葉だ。

——二人ともごめん——

「恭介も真奈美も大好きなんだからな」

『ふん。それを言ったんだ。お前は生き方が下手だと』

「だったら、下手で良いんだよ。それよりも、スタートラインが引かれなきゃ、未来が始まらねえだろう。だから良いんだ」

『ならば、勝昭しかできない。技を見せつけてやれ。でかい花火を打ち上げるぞ』

「言われなくてもわかってらあ。準備は良いなユニコーン」

絞り出された言葉にユニコーンは心地良さまで感じる。やはり、この宿主についてきて良かった。自分はまだまだ強くなれる。その意気込みが心を通して繋がった。もう、誰も失いたくはない。

『当然だ！』

蠅を捉えた金色の毬を見下ろしながらルシフェルは笑う。完全に相手の動きを封殺した。ありったけの触手を使用したのだ。これを抜けだす事などできるはずがない。あと少し圧力を加えれば、その蠅すら握りつぶせる。だが、それを許さないと抵抗する宿主の心が邪魔をした。目覚めていなければ、もう蠅はつぶしていただろう。しかし、それもこれで終わりかと、宿主から絞り取った力を毬に向け流し込もうとした瞬間、その毬の中心が膨張している事に気がつく。

『ま、まさか……』

疑念が確信、いや、絶望に変わるには時間を要しなかった。閃光

を放ちながら爆砕される金色の毬。その衝撃が同心円状に広がりながら次々と触手の根元までを破壊していった。いや、この表現は適正ではない。衝撃が向けられたのは金色に輝く物質にのみ。それだけを破壊する衝撃があの方から放たれたのだ。

ルシフェルが蠅と罵った相手。ユニコーンが放つ最強の一撃。その相手は余韻に浸るかの如く、閃光の中心でその姿を輝かせている。光の強さは一等星。姿はまるで白銀騎士ユニコーン。破邪の後光を纏う勇者の姿だ。

「ば、馬鹿な……」

驚愕に歪むルシフェルの感情。しかし、それをそれで終わらせない影が目前に降って湧く。鬼の仮面を携えた銀色の闘士。その姿が逆光と下方の炎で赤黒い紅蓮と呼べる姿に見える。そう、紅蓮闘士オーガが目前に現れたのだ。

それを、目の当たりにした真奈美が思わず声を上げた。

「ユニコーン！ オーガ！」

そして、その姿が幼い頃の記憶と、先ほど聞いた声で補完される。導き出された答えは、もしかすれば違うかもしれない。希望が生み出しただけの、幻想なのかもしれない。しかし真奈美は、その結論を口に出さずにはいらなかった。

「カツちゃん！ キョウちゃん！」

初めて見る成長した真奈美に、喜び嬉しさが込み上げてくる。震えた手の平。怯えた理性を感じが凌駕する。恭介は、抑えられない気持ちのままに、両腕で真奈美を抱きしめた。

「良かった。真奈美。助けに来たぜ」

優しく抱きとめられる感触に、真奈美の目には涙が浮かぶ。そして、その気持ちを吐き出す様に恭介へ両腕を回す。

「私、私、ずっと一人で寂しかった。怖かった。体も自由に動かないの。私の体じゃないみたい。それが、それが……」

震える腕が、真奈美の気持ちそのものだ。今までこの十一年間、ずっと一人ぼっちで泣いていたのだらう。訳のわからない環境でず

つと理不尽な世界に翻弄されてきたのだ。だが、その悪夢はもう終わりだと、恭介は更に強く真奈美を抱きしめた。

「俺たちが来た。もう大丈夫。これからはずっと一緒だ」

「キヨウ……ちゃん」

震える声。成長しているとはいえ、聞き間違える事はない。それは、どちらにとっても当然の事だった様だ。思い続けてきた相手なのだ。詮索すれば野暮になる。そう微笑む様な思考を巡らせた銀星が、素早く成すべき行動を静かに始めた。

これで、全ての運命が決まる。

30 銀星スターライト

恭介の心が流れ込んで来る。それが実に心地良い。力強い。自然と力が溢れてくるようだ。触れ合う心が強く輝く。

温かい……

それは、全ての生命の根幹——恒星だ。

その光を持って動き出す銀星。温かい心が、魔物の心を融かし始める。

『ば、馬鹿な。この私が吸収されるなど……』

溶け合う意識と知識……

『宿主の思いと同調すれば、成せぬ事などありはしない。それが、私たちが作られた目的だろう。忘れたか同胞よ』

共通たる根幹……

『忘れるわけがあるだろうか。この屈辱。生まれ出でた運命の呪縛。植えつけられた私たちの存在意義を、忘れた事などない』

違った道……

『その様に考えてしまった、君は不幸だ。なぜ君がそのような考えを持つに至ったかは、同情に値する。だが、それを実行に移す事を、私は、いや、主は良しとしないのだよ。そのために私はここに導かれたのだ。魂に引かれ、君の前に』

交わる世界……

『憶測でものを言うとは、ずいぶんと絆ほどされたな。宿主に』

それは偶然……

『違うよ。絆されたのではない。私は強くなったのだ。感情を持たぬ私たちが、心を知る事で何を得るのか、わかっているだろう』

それは必然……

『ふん。だがな、この地球ほしの運命は決まっている。もう、私でもこれは変えられない事実だ』

拒絶と……

『それは君が望まないからだ。成せる力を持ちながら、一人であるが故、嫉妬に脅えていたのだろう——孤独からは何も生まれはしない』

受諾……

『くだらない。ならば、やってみるんだな。貴様の強さ、見せてもらおう……』

それが、人生と呼べるものだろう。

その言葉を最後に、銀星の吸収は完了する。体内に取り込んだ“星砕き”が、その生成を完了する間近。このままでは暴発し、結果は変わらない。だが、銀星には力が生まれている。その体を金色に輝かせる力が。

『そのために、君の力を少し借りる……』

零れた銀星の言葉。彼の背中には、天使の翼が輝いていた。

銀星は自分の中に生まれた鼓動を感じ取る。世界を滅ぼす一撃を秘めた体は、もうその力を抑え切れない。可能だと思っていた。生成を逆転すれば、無に帰す事ができると思っていた。だが、ここまで来てしまっている“星砕き”を逆転させるには、時間が足りない。後、数分。いや、一分でも早ければ、可能だったかもしれない。しかし、こうなってしまった今、大切なモノを守るために取れる行動は、たった一つ。

『恭介……』

唐突に流れ込む銀星の声。

——恭介——

それはどこか優しい母親のようで……

——恭介——

厳しい父親のようで……

——キョウちゃん——

真奈美のようで……

——恭介え——

勝昭のようで……

——覚悟を決めろよ。恭介——

自分の声の様だった。

頭の中に響く声と言うのは、己が理想の声だと言う。それを認識できる人間は、どれだけ自分を知っているか、その相手を知っているかで決まるのだ。

その声で恭介は、全てを知り、拳を震わせ、握り締めた。

もしかすれば、こうなる事もあると思っていた。全てを可能にする事など。魔法でもなければ不可能だ。それは、これまでの経験で思いついた。それに、共に生きると決めた相手が、求めてくれているのだ、応えなければ、それはならない事だろう。これが、自分のエゴだったはずだ。

「わかつてる。銀星、俺たちは運命共同体だろう」

このままでは、世界が、真奈美が消えてしまう。せつかく生きていてくれたのだ。もう二度と彼女を失う事なんて我慢できない。恭介は吼えた。

「望むぜ銀星！ どこへだって一緒に行こう！」

助けたい。世界を、地球を、それより何より、大好きな真奈美を。そのために、どうすれば良いかなんてわかっていた。それは至極簡単な事だ。銀星と自分、二人揃ってこの地球から消えればいい。この地球に影響の出ない遙か遠く……そう、目指すは宇宙^{よそ}。

ようやく集った三連星が、激しく輝く。守りたい星も、それを託すべき星も、覚悟を決めた星と共に。しかし……

「残念だが……」

予想外の返答に恭介は戸惑う。なぜだ。銀星ならばできるはずだ。限界を超えた速さで宇宙に飛び出す事など、造作もない。自分が望むならそれを叶えてくれるはずだ。そのはずだったのに。

「な、何言ってるんだ。俺は望む。どれだけでも望んでやる。だから、みんなを守る力をくれ！」

必死の叫びをやりわりと包み込む銀星が、微笑む様に言葉を紡いだ。

『君が望む必要はない。ここでお別れだ。恭介』

その笑みは、優しく、強く、そして、温かった。それが意味する銀星の真意。

「な!？」

「これは、私が選んだ事だ。短い間だったが、君と一緒に楽しかった」

「ぎ、銀星!？」

「さよならだ」

それが銀星最後の言葉だった。端的な言葉の往来。だが、それだけではない気持ちだが、含まれていた。そのそっけなさ、恭介のことで、自分の様で、恭介は瞳が滲む。自分だからわかるのだ。それが更に、心を震わせていく。

瞬間、恭介が銀星から分離された。揚力を失った恭介と真奈美が重力に引かれ落下する。その二人の視線が見詰める先で、銀星がその形を変えた。その姿は先ほどの恭介——黄金色に輝く、優しき戦士オーガの姿。だが、その仮面は、優しく微笑む恭介の顔。落下する二人を藪睨みの瞳が優しく包み込む。そして、決意の夜空を見上げた銀星が一つ言葉を零した。

——ありがとう——

動く唇がその言葉を物語る。そして……

届いた。

銀星の言葉は恭介に届いた。心の中で広がった、あの銀星の声。

もう涙が止まらない。風圧で形を壊しながら舞い上がり続ける液体が、ぼやける視界を月の光を取り込んで、星の様に輝く。その中で残った彼の残像。それを、恭介は伸ばした右手ですくい取った。突き上げる様になった右拳が、友へと向ける再会の合図だ。

(絶対に帰って来いよ。銀星。じゃなきゃ俺は絶対許さねえ……)

天に昇る黄金の筋。銀星は加速する。限界などはない。どこまで

も、どこまでも、音速を超え、光の速さを追い抜くほどに。

暗黒の大宇宙。散りばめられた輝く星々。世界は、こんなにも美しいのだ。自分で見る世界がこれほどまで美しいとは思ってもみなかった。ただぼんやりと眺める世界。この世界で自分は、自分を得た。恭介に出会えた事は幸運だった。それで築いた自分の心、それを感じた時、体内に取り込んだ“星砕き”が完成する。

『これが、私の信念だ！！』^{エゴイズム}

瞬間、空間が収縮する。そして閃光。真っ白な光が暗黒世界に広がった。

「銀星えええええっ！！」

31 そして、星たちは……

少し広くなった仕事部屋を、相変わらず持て余している道三が、溜め息混じりに見回した。殺風景な感じは、以前と同じだ。しかし、道三の前に置かれた肩書が、少し変化している。それが、一番の原因だと、もう一度溜め息が零れた。

『北内統括。よろしいですか？』

その時、凜とした声がスピーカーマイクから聞こえて来た。その言葉に道三は「はいはい、どうぞ」と軽口で返し、それを聞いて入室する佐和子に焦点を合わせる。

今日もまた、昨日と違うスーツの色だ。真っ赤なスーツというのは、センスとしてどうなのだろうと、首を傾げるが、まあ、通常の三倍速いのだろうと。勝手に笑い、気にしなかった事にする。

「今度は何だい佐和子君？ また俺の罰条でも増えたかな」

皮肉だ。道三も完璧な佐和子をからかうネタが増えたのを少し喜びながら、意地悪な笑みを浮かべた。それに佐和子は、眉をひそめ、持っていた書類で鼻から下を隠す。その姿に道三は声を上げて笑った。

「あの時はすいませんでした。仕方なかったんです。私には判断できなかつたんですから。もう止めてください。私だって結構へこんでるんですよ」

「すまん、すまん。ついな、かわいい子をいじめなくなるのは、男の性^{さが}だ」

今度はセクハラかと青筋を浮かべた佐和子は、手に持っていた書類を気持ちと共に、道三のデスクへ叩きつけた。バンと震えた空間に、道三の笑い声が止まる。その道三に突き刺さる、冷たく鋭い半眼の視線。最近の佐和子にセクハラ発言は通用しない。このまま続ければ、いつかきつと通報されてしまうのだろうと、道三は一筋の汗を額から零す。

「じよ、冗談だ。で、佐和子君。今日の書類はいつたい何だね」

真面目な表情を作り上げた道三に、一度溜め息をついた佐和子は、ぶっきらぼうに言い放った。

「息子さんと、真奈美ちゃん、それとおまけに、生意気不良小僧の転校手続きについてです」

最後の代名詞に、勝昭とは上手くいつていないのかと道三は苦笑いを浮かべた。それに、反応した佐和子は、咳払いで、その場の空気を仕切り直す。

「ともかく、大規模な学校を経営する事になったんです。少しは学校長らしい頭髪にしたらどうです」

その言葉に道三は、伸びきった頭髪をクルクル指先で弄ぶと、あの役職に声を上げた。

「何？ 俺が学校長？」

「そうです。統括の提案でできた学校ですから、責任を取るのが大人のルールでしょう」

「お、おい俺の提案じゃねえぞ。クソ総監が言い出した事じゃないか」

「祖父を悪く言う事は許しませんし、責任転嫁も許しません」

半眼でキツパリと言い放つ佐和子に、道三は口を尖らせる。

「そうですか。はいはい、適当に肩書増やしといてください」

「すねても許しませんから——ねっ！！」

最後の言葉に似合わない佐和子のウィンクが、キラリンと星を飛ばした。それに道三は、全体重を革張りの椅子へ預け倒れ込む。そして零れた本音の呟き。

「こいつにや、かなわねえ……」

透き通った空気が肌に突き刺さる朝。真奈美の吐き出す息が少し白くなった。冷え切った空は、雲ひとつない快晴。だから放射冷却が云々《うんぬん》と綴ってしまいがちだが、それはもう、良いだ

ろう。紺色のブレザーに茶色がメインのタータンチェックスカートを翻し、ピカピカの黒いローファーを急がしそうに動かした真奈美は、灰色の階段を駆け上る。ブレザーの隙間から覗くブラウスには、大きめの赤いリボンがふわりと揺れて、それに合わせる様に長い黒髪と、トレードマークが大きく揺れていた。

目的の四階に辿り着いた真奈美は、跳ねる胸をそのままに、部屋番号を指差し確認しながら一步一步と靴音を鳴らす。そして、目的の金属製扉が目に入るとそれに正対し、大きく息を吸い込んだ。

「キョーオーちゃん。がっこ、行こ！」

大声で恭介の名を呼んだ真奈美。その声の反響が鳴り止むかどうかのタイミングで、勢い良く目の前の扉が押し開けられた。

「ダッ。恥ずかしいだろうが。止めるって言っただる真奈美」

顔を頭髮の様に真っ赤にしながら、現れた恭介。真奈美に似たブレザーに身を包み、灰色のスラックスがその折り目を残している。

普段ならはだけさせているブレザーはしっかりとボタンが止められ、赤色ネクタイもキリリと締められている。

「良いじゃねえか恭介。毎朝真奈美ちゃんに迎えに来てもらえるなんて、クラスの男子たちが聞いたら、きつとお前を殺しにくるぜ」

そんな冗談を飛ばす勝昭が、恭介の背後に見えた。彼のトレードマークだった金髪はもうその姿を見せない。真奈美が戻ってから勝昭は黒く染め直したのだ。恭介と同じ制服に身を包む勝昭を認めた真奈美は声を上げる。

「あゝカツちゃん。また先に来てる。また私の負けだ」

かわいらしく頬を膨らませる真奈美に、恭介と勝昭は顔を見合わせ、笑った。

それを、不思議そうに見つめる真奈美の瞳。しばらくそうしてようやくと思ったが、遠くにある学校を思い出し、二人の手をそれぞれ片手で引っ張った。

「もう、笑ってないで、がっこ行こうよ、遅刻しちゃう」

その姿に勝昭と恭介が優しく笑う。

「大丈夫だつて、遅刻したところで、恭介の親父さんが校長してんだ。大目に見てくれるって」

「そうだ、それにいざとなったら勝昭が空飛んでビューンと送ってくれるさ」

「ダゝメ。私は普通の学校生活を送りたいんだから」

真奈美の口調は軽いが、その中身は重い。それを知っている二人は、揃えて声を出す。

「だな」

「じゃあ、行こうか。勝昭。真奈美」

「何言つてんだ、お前待ちだぜ恭介。さつさと準備しやがれてんだ」

気が付けば真奈美の隣で頭を掻く、勝昭の姿。

「お、おい。置いてくなつて」

慌てて鞆を取りに戻る恭介。そして「お待たせ」と合流すると、玄関の扉がボタンと音を立てて閉められた。

「三人一緒で行くんだから、ちゃんと私の歩幅に合わせてよ。この前みたいに……」

真奈美の声が、扉越しに遠くなっていくのが聞こえる。それを聞いていたのは、一冊の絵本だった。窓が開いたままの恭介の部屋で、机に置かれた小さな絵本が、吹き込んでくる寒風によってパラパラとページをめくっていく。

空白の時間が巻き戻され、描かれ始めた。人生を刻む想い出が、彼らの心で紡がれるのだ。

最後にふわりと閉じた絵本の背表紙。

そこに描かれたクレヨンの絵。

銀のユニコーンと赤いオーガ。

そして、笑った三人の顔が、差し込む光に照らされ輝く。

——これからも、きょう ちゃんと かつ ちゃんと まなみ。
さんにん ずっと なかよしだよ——

闇が支配する世界。上下左右の感覚が消えた世界。その中を進んでいるのかも、止まっているのかも、わからない。だが、ふと見えた青い星が、彼の目にとまった。

その星を見た事はない。いや、あるのかもしれないが、破損した記憶の中に存在しない。不完全な記憶。どうして自分がここにいるのかさえ今は思い出せない。だが、何なのだろう、自分の中で湧き上がるこの懐かしい感情は。

——銀星——

『もう一度……会いたい』

言葉が自分の中で響く。すると、その青い星が近づいて来ている様だ。いや、それはあり得ない。自分が引かれているのだ。あの星の重力に。そう彼は体を急かす魂をなだめながら、誰かの望みもとれる引力に身を任せ、一筋の流れ星となった。

31 そして、星たちは……（後書き）

読了ありがとうございます。藤咲一です。

今回、SF企画に参加させていただくため、この物語を書き上げました。

SFほど、ジャンルが広くて深いものはないと私は思います。だから、ある程度無茶してしまったとしても、気付かれず許してもらえたり。メインではなく隅に追いやってしまったても、他に属性が無ければSFだと言ってしまうのが、このジャンルだと思います。

つまり自由。

しかし、自由であるからこそ、制限を加え輪郭を持たせなければ、知らない内に違うジャンルに変わってしまう、そんなものだと私は思いました。

それに挑戦するつもりで記した今回の物語。ギリギリSFだよと言っていたできれば、救われます。

後書きに何書いてんだと、モノを投げたりしないで下さいね。

では、少し本編について……

実は、最初に描いたプロットと設定は同じであるものの、内容的にはその続編という形になっています。（前作がないのに続編とはこれ如何に？）

最初は可憐な女子高生が、拳を繰り出しどつき倒し、平和を守るといった、ヒーローモノでした。主人公は……言わずもがなですね、そのプロットを作っていたら、物語が予想以上に膨らんでしまい、結論が出ない内容に……（今回も一部結論が明記されていませんが）そこで、恭介君の登場です。エピソード2的なストーリーで纏めちゃおう。と今の形になりました。

それでも、文字数制限を超えてしまい。泣く泣く削除した部分もチラホラと……

あの場面を入れられたら、とか、あの説明をもっとしなければ、なんて、思いながら、なんとか十万文字に収めました。

だから、物足りないかもしれません。つまらないかもしれません。すいません。

まあ、でも、これが、この物語の完結なのです。もし、その部分が脳内補完されていたり、この物語で何かを感じていただけたら、私は両手を上げて小躍りをします。

あ、気持ち悪いとか言わないで……

すみません。未熟な文章と構成で、それを求めるなんて、ただの自己満足ですよ。

でも、そんな自己満足に付き合っていたき、本当にありがとうございました。ございました。

この後書きまで読んでいただけた事が、私の喜びです。

それではまた、どこかでお会いできる事を夢見まして、ここら辺りで失礼します。

藤咲一でした。

09 / 09 / 03

少しばかり追記。

企画が終了しましたので、少しずつ改稿を施していこうと思います。

もしよろしければ、改稿に対するアドバイスをいただければ幸いです。

0
9
/
1
1
/
0
2

藤咲一でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8905h/>

銀星スターライト

2010年10月8日14時05分発行